

ひがしはざま
東狭間遺跡

— 緊急避難塔整備に伴う発掘調査報告書 —

2019.2

香南市教育委員会

序

2011年3月11日の東日本大震災の津波の記憶は、8年の歳月を経てもなお鮮明です。

香南市でも南海地震のたびに津波の被害が繰り返されてきました。野市町上岡、香我美町岸本、夜須町坪井には、江戸時代安政南海地震の津波の記録が刻まれた石碑が残っています。土佐湾に面した自治体にとって、南海地震対策、とりわけ津波に対する備えは喫緊の課題となっています。

香南市が東日本大震災の年から取り組み始めた津波避難タワーの建設も今年で8年目となり、市内各地に18基の津波避難タワーが完成しました。これから建設されるタワーも含めて合計22基の避難タワーにより市民の命を守る計画です。市の整備によるものが19基、県の整備によるものが3基、今回の発掘調査のきっかけとなった吉川町大八幡宮東側の津波避難タワーは高知県の整備計画により建設されたものです。

タワー予定地には弥生時代終わりごろの集落と奈良時代の建物跡がのこされていました。大量に土器が投棄された竪穴住居を含む弥生時代から古墳時代への移行期(3世紀)の集落の様子や、古代の条里が物部川河口付近まで延びていたことがわかるなど、貴重な成果が得られています。地域の歴史を解明する手がかりとして、この調査成果を活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査にご協力いただきました吉川町吉原地区の地元の皆様、高知県中央東農業振興センター、高知県教育委員会をはじめとする関係諸機関および関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成31年2月

高知県香南市教育委員会
教育長 安岡 多實男

例言

1. 本書は、高知県が平成29年度に実施した香南南部地区農村災害対策整備吉川工区緊急避難塔建設工事に伴う、東狭間遺跡の発掘調査報告書である。
2. 東狭間遺跡は、高知県香南市吉川町吉原字東狭^(※)間1984番地1、1985番地に所在する。
3. 本発掘調査は、高知県の発注を香南市が受注し、委託業務を同市教育委員会生涯学習課文化振興保護係(香南市文化財センター)が主体となって履行した。試掘調査は平成29年3月17日～5月2日に実施し、本発掘調査は平成29年5月29日～10月27日にかけて実施した。
4. 調査対象面積 約1,540㎡ 試掘調査面積 約170㎡ 本発掘調査面積 約760㎡
5. 試掘調査時(平成28・29年度)の調査体制は以下の通りである。
調査担当 宮地 啓介 香南市教育委員会生涯学習課文化振興保護係埋蔵文化財調査員
6. 本発掘調査時(平成29年度)の調査体制は以下の通りである。
事務担当 寺内 より子 香南市教育委員会生涯学習課文化振興保護係係長
“ 松村 信博 “ “ “ 主監調査員
調査担当 宮地 啓介 “ “ “ 埋蔵文化財調査員
7. 報告書刊行時(平成30年度)の香南市教育委員会生涯学習課文化振興保護係の体制は以下の通りである。
課 長 田中 彰裕 嘱託員 横山 藍 臨時職員 高橋 加奈
係 長 竹中 ちか “ 宮地 啓介 “ 藤原 ゆみ
主監調査員 松村 信博 臨時職員 澤田 佐世 “ 松田 克純
主 査 澤田 秀幸 “ 高橋 由香 “ 宮本 幸子
8. 本書の編集・執筆は宮地が行った。遺物の写真撮影は宮地、画像補正は半田印刷が行った。
9. 本報告書中で使用する方位は真北(方眼北)を基準とし、公共座標は世界測地形第Ⅳ系に拠った。掲載した地形図等は、特に表示のない場合は上方が北である。
10. 発掘現場作業に際しては下記の方々の協力を得た。記して謝意を表したい。(敬称略)
[発掘調査] 宗圓良一 川村正廣 植田秀夫 溝渕進一郎 金田 稔 依光 諒 宮本幸子
大野久雄
[重機オペレーター] 清藤勝秀
[機械・器具] (株)東部レントオール 香南営業所 (株)ジツタ 高知支店
[空撮] 香南ケーブルTV(香南施設農業協同組合)
11. 遺物整理・報告書作成等に際しては下記の方々の協力を得た。記して謝意を表したい。(敬称略)
藤原ゆみ 宮本幸子 齋藤美幸 澤田佐世 吉本由佳 高橋由香 高橋加奈 松田克純
12. 遺構の略号は、ST(竪穴住居状遺構)・SB(掘立柱建物跡)・SK(土坑状遺構)・SX(性格不明遺構)・SR(自然流路)・P(ピット状遺構)等と表記し、本報告書において包括的な総称として用いている。
13. 掲載した遺物実測図は通し番号で表示し、挿図・写真図版とも同一番号を使用している。出土遺物は「17-4HG^{ひが}」と注記し、仮番号を付して関連図面・写真と共に香南市文化財センターで保管している。
14. 調査に当たっては高知県中央東農業振興センター(基盤整備課)の協力を得た。また地元住民の方々には埋蔵文化財保護に対する御理解と御協力を頂き、厚く感謝の意を表したい。

15. 本報告書作成に際して、吉成承三氏、池澤俊幸氏、久家隆芳氏、筒井三菜氏(公益財団法人 高知県文化財団埋蔵文化財センター)、宮里 修氏(高知大学人文社会科学部講師)、松村信博氏、横山 藍氏(香南市文化財センター)ら諸氏に貴重な御教示・御助言を頂いた。記して謝意を表する次第である。

※ 登記簿に記載(登録)されている本地番における表記である。通常の当該字名は「狭」の文字を使用しており、本遺跡の名称もこれに倣っている。

本文目次

第Ⅰ章	調査の経緯	
第1節	調査の経緯	1
第2節	調査対象地の概要	3
第3節	試掘調査	4
第Ⅱ章	香南市域の地理・歴史的環境	
第1節	地理的環境	7
第2節	歴史的環境	8
第Ⅲ章	調査の成果	
第1節	調査の方法	13
第2節	弥生後期後葉の遺構と遺物	16
第3節	古代～中世期の遺構と遺物	34
第4節	小括	55

挿図目次

第1図	香南市及び東狭間遺跡位置図	1
第2図	香南南部地区農村災害対策整備吉川工区緊急避難塔整備工事図面	2
第3図	東狭間遺跡包蔵地範囲及び調査対象地位置図 (S=1/5, 000)	3
第4図	調査対象地 試掘坑位置図 (S=1/500)	4
第5図	TR 1 土層断面図 (北壁) (S=1/60)	5
第6図	TR 6 出土遺物実測図	5
第7図	東狭間遺跡周辺の主な遺跡及び地形分類図 (S=1/45, 000)	9
第8図	調査区位置及び公共座標 (S=1/500)	13
第9図	遺構配置図 (S=1/180)	15
第10図	弥生土器片等出土遺構 (S=1/250)	16
第11図	SX 2・ST 2 土層断面図 (西壁) (S=1/40)	18
第12図	ST 2 出土遺物実測図 1	18
第13図	ST 2・SX 2 遺構平面図・断面図 (遺物出土状況) (S=1/40)・他	19

第14図	ST 2 出土遺物実測図 2 (S=1/3)	20
第15図	ST 2 出土遺物実測図 3 (S=1/3)	21
第16図	SK 1 (ST 2) 出土遺物実測図 (S=1/3)	22
第17図	ST 2 土層断面図 (南壁) (S=1/40)	22
第18図	SX 1 遺構平面図 (礫群検出状況)・土層断面図 (S=1/40)・他	23
第19図	SX 1・SK 1 (ST 2) 遺構断面図 (遺物出土状況) (S=1/40)	24
第20図	SX 1 出土遺物実測図 1 (S=1/3)	24
第21図	SX 1 出土遺物実測図 2 (S=1/3)	25
第22図	SX 1・2 出土遺物実測図 (S=1/3)	26
第23図	SX 2 出土遺物実測図 (S=1/3)	27
第24図	SK 2・9 遺構平面図・他 (S=1/40) 出土遺物実測図 (S=1/3)	28
第25図	P13 遺構平面図・他 (S=1/40) 出土遺物実測図 (S=1/3)	29
第26図	P71 遺構平面図・他 (S=1/40)	29
第27図	P114 遺構平面図 (遺物出土状況)・他 (S=1/20) 出土遺物実測図 (S=1/3)	30
第28図	P116 遺構平面図・他 (S=1/40) 出土遺物実測図 (S=1/3)	30
第29図	P174 遺構平面図・他 (S=1/40)	31
第30図	P180 遺構平面図・他 (S=1/40)	31
第31図	包含層出土遺物実測図 1 (S=1/3)	31
第32図	SB 3 遺構平面図・断面図 (S=1/50) 出土遺物実測図 (S=1/3)	32
第33図	SB 4 遺構平面図・断面図 (S=1/50) 出土遺物実測図 (S=1/3)	33
第34図	古代～中世土器片等出土遺構 (S=1/250)	34
第35図	SK 10 遺構平面図・他 (S=1/40) 出土遺物実測図 (S=1/3)	35
第36図	SK 1 遺構平面図・他 (S=1/40) 出土遺物実測図 (S=1/3)	36
第37図	SK 11 遺構平面図 (礫群検出状況)・他 (S=1/40) 出土遺物実測図 (S=1/3)	36
第38図	集石遺構 1 遺構平面図 (礫群検出状況)・他 (S=1/40) 出土遺物実測図 (S=1/3)	37
第39図	集石遺構 3 遺構平面図 (礫群検出状況)・他 (S=1/30) 出土遺物実測図 (S=1/3)	37
第40図	集石遺構 2 出土遺物実測図 (S=1/3)	38
第41図	SK 7 遺構平面図 (礫群検出状況)・他 (S=1/40) 出土遺物実測図 (S=1/3)	39
第42図	P150 遺構平面図・他 (S=1/40) 出土遺物実測図 (S=1/3)	40
第43図	P169 遺構平面図 (遺物出土状況)・土層断面図 (S=1/40) 出土遺物実測図 (S=1/3)	40
第44図	SB 1 遺構平面図・土層断面図 1 (S=1/50)	44
第45図	SB 1 遺構平面図・土層断面図 2 (S=1/50) 出土遺物実測図 (S=1/3)	45
第46図	SB 2 遺構平面図・土層断面図 1 (S=1/50) 出土遺物実測図 1 (S=1/3)	46

第47図	SB 2 遺構平面図・土層断面図 2 (S=1/50) 出土遺物実測図 2 (S=1/3) ……………	47
第48図	SD 2-1 遺構平面図・他 (S=1/40) 出土遺物実測図 (S=1/3) ……………	51
第49図	SD 2-2・3 遺構平面図・他 (S=1/40) 出土遺物実測図 (S=1/3) ……………	52
第50図	SD 1 遺構平面図・他 (S=1/40) 出土遺物実測図 (S=1/3) ……………	53
第51図	SR 1・P175・182・他 遺構平面図・他 (S=1/50) 出土遺物実測図 (S=1/3) ………	54
第52図	包含層出土遺物実測図 2 (S=1/3) ……………	55

表目次

第1表	ST 2 ピット状遺構 (主柱穴) 計測表 ……………	18
第2表	土坑状遺構 (SK) 計測表 ……………	28
第3表	SB 3 ピット状遺構 (主柱穴) 計測表 ……………	32
第4表	SB 4 ピット状遺構 (主柱穴) 計測表 ……………	33
第5表	ピット状遺構 計測表 1 ……………	56
第6表	ピット状遺構 計測表 2 ……………	57
第7表	ピット状遺構 計測表 3 ……………	58
第8表	ピット状遺構 計測表 4 ……………	59
第9表	ピット状遺構 計測表 5 ……………	60
第10表	遺物観察表 1 ……………	63
第11表	遺物観察表 2 ……………	64
第12表	遺物観察表 3 ……………	65
第13表	遺物観察表 4 ……………	66
第14表	遺物観察表 5 ……………	67
第15表	遺物観察表 6 ……………	68
第16表	遺物観察表 7 ……………	68

写真図版目次

図版 1	調査対象地
図版 2	調査Ⅰ区
図版 3	調査Ⅱ区
図版 4	調査Ⅲ区
図版 5	ST 2

- 図版 6 SX 1 / SX 2
- 図版 7 SK 2 / P165 / P114 / SB 3 / SB 4 / SK10
- 図版 8 SK11 / 集石遺構 1 / 集石遺構 2
- 図版 9 集石遺構 3 / 集石遺構 4 (SK 7) / P169
- 図版 10 SB 1
- 図版 11 SB 2
- 図版 12 SD 2-1
- 図版 13 SD 2-2 / SD 3 / SD 1 / SR 1 / 包含層 (耕土層) 出土遺物
- 図版 14 東狭間遺跡 空撮
- 図版 15 遺物写真 1
- 図版 16 遺物写真 2
- 図版 17 遺物写真 3
- 図版 18 遺物写真 4
- 図版 19 遺物写真 5
- 図版 20 遺物写真 6
- 図版 21 遺物写真 7 / 津波避難タワー
- 図版 22 調査日誌抄 5月 29日 ~ 6月 1日
- 図版 23 調査日誌抄 6月 2日 ~ 6月 8日
- 図版 24 調査日誌抄 6月 9日 ~ 6月 22日
- 図版 25 調査日誌抄 6月 23日 ~ 7月 12日
- 図版 26 調査日誌抄 7月 13日 ~ 7月 27日
- 図版 27 調査日誌抄 7月 29日 ~ 8月 3日
- 図版 28 調査日誌抄 8月 9日 ~ 8月 14日
- 図版 29 調査日誌抄 8月 16日 ~ 8月 22日
- 図版 30 調査日誌抄 8月 23日 ~ 8月 28日
- 図版 31 調査日誌抄 8月 29日 ~ 8月 31日
- 図版 32 調査日誌抄 9月 4日 ~ 9月 7日
- 図版 33 調査日誌抄 9月 8日 ~ 9月 19日
- 図版 34 調査日誌抄 9月 20日 ~ 10月 3日
- 図版 35 調査日誌抄 10月 4日 ~ 10月 11日
- 図版 36 調査日誌抄 10月 12日 ~ 10月 23日
- 図版 37 調査日誌抄 10月 24日 ~ 10月 27日
- 図版 38 現場写真 / 遺物整理作業

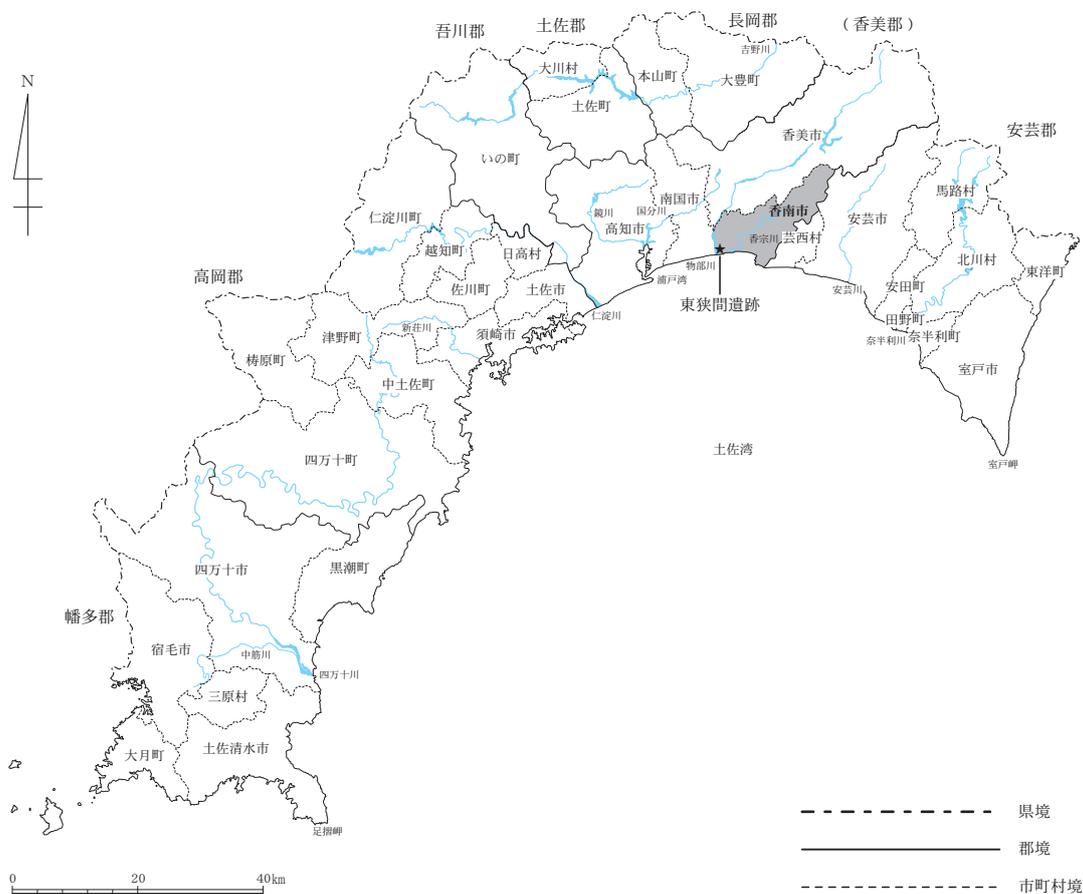
第I章 調査の経緯

第1節 調査の経緯

本調査は高知県香南市吉川町吉原字東狭間に計画されている緊急避難塔建設工事に伴う、記録保存のための事前発掘調査である。

本事業は県の防災対策事業の重点施策として、住民避難の安全性を図り、地域の防災・減災対策に資するものとした県営による農村防災施設整備事業である。事業対象地周辺に周知の埋蔵文化財包蔵地は確認されていなかったが、地理的・歴史的環境を鑑み、埋蔵文化財が遺存している可能性が考えられた。これに伴い、事前に事業計画区内の埋蔵文化財の有無を確認し、埋蔵文化財の保護と事業の円滑な調整を図ることを目的として、香南市教育委員会(市文化財センター)が主体となって試掘調査を実施した。

調査の結果により、比較的良好な遺構が遺存することが判明した。埋蔵文化財包蔵地の所在把握に伴い当該地の小字名を採って「東狭間遺跡^{ひがしはざま}」として新設し、遺跡発見の通知(文化財保護法第97条)を進達した。関係機関との協議の結果、当事業の施行により対象地の埋蔵文化財が影響を受けると判断された。県教育委員会よりの通知に基づき、高知県から発掘調査業務の委託契約を受託した香南市(教育委員会)が主体となり、調査対象面積約1,540㎡の内約760㎡について、平成29年5月29日から10月27日にかけて遺跡の調査と記録保存を目的とした緊急発掘調査を実施した。



第1図 香南市及び東狭間遺跡位置図

農村地域防災減災事業計画概要書(抜粋)

- 事業実施主体 高知県
- 事業の種類 農村防災施設整備事業
- 事業内容 農村防災施設整備事業(農村防災施設整備)
- 施設の種類の種類 緊急避難路整備、緊急避難施設整備事業内容
- 主要工事 避難誘導標識、避難誘導灯、緊急避難塔(タワー)

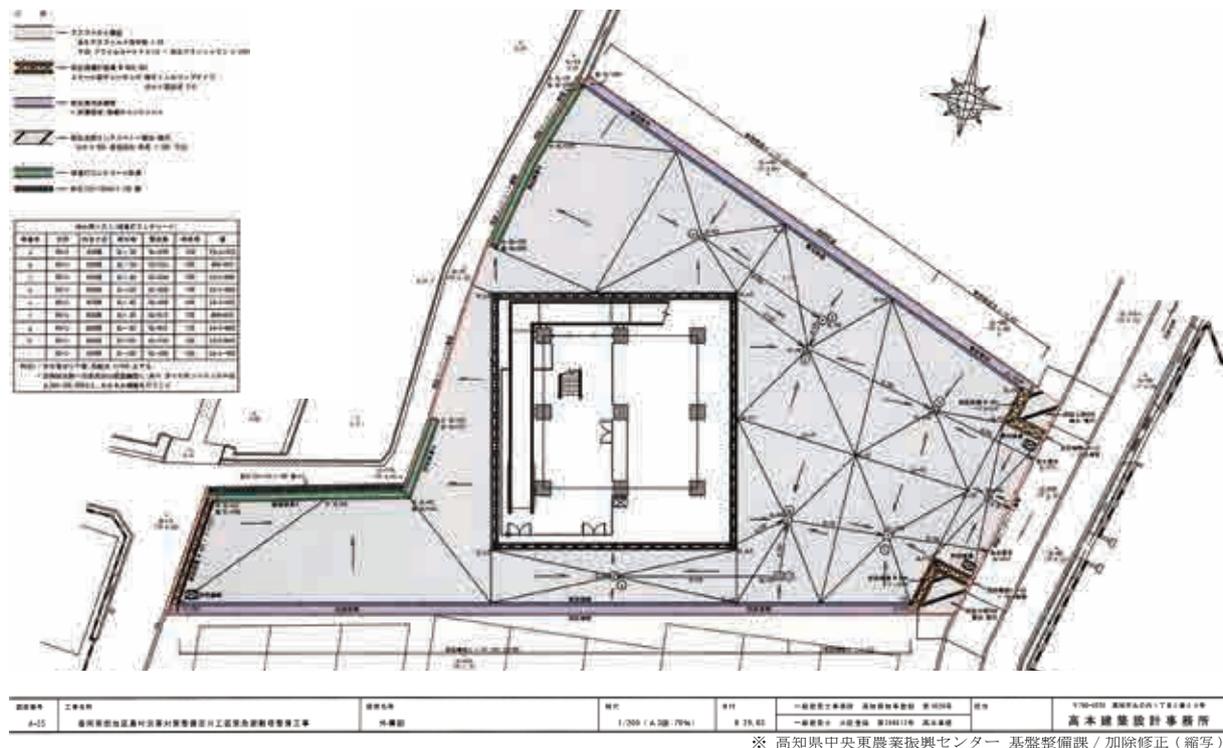
当該地域及び当該施設の特徴並びに事業の必要性

本地区は香南市南部、土佐湾に面した海岸線が12 kmに広がる、東は手結山から西は物部川左岸域に開けた海拔5m程度と非常に低い場所に位置する農村地帯である。また、本地区の北側の内陸部には広大な水田地帯が広がっている。

本地区においては、近い将来発生が予想されている南海トラフ巨大地震発生時には、避難場所として周辺に高台や避難場所がないため直接津波の被害を受けてしまう地域であるため住民の速やかな避難が重要課題となっている。

本地区では、平成24年12月10日に公表された「高知県版第2弾の津波浸水予測」により、津波浸水並びに津波浸水エリアが大幅に見直され、現行の指定避難場所である高台や津波避難ビルでは対応できない地域があり、そこで平成24年5月10日に公表された高知県版第1弾の津波浸水予想地域を対象にした地域ワークショップを開催し、住民自ら新たな避難場所や避難路、また要援護者対策等についての協議検討を行った結果、市が実施する避難施設以外にも、農村地域の防災・減災対策として早急に実施する必要があると思われる。

よって、地震発生後の津波から人命を守るためには、津波浸水区域からの安全で速やかな避難を可能とする必要があることから、本事業により早急な対策を講じる必要がある。



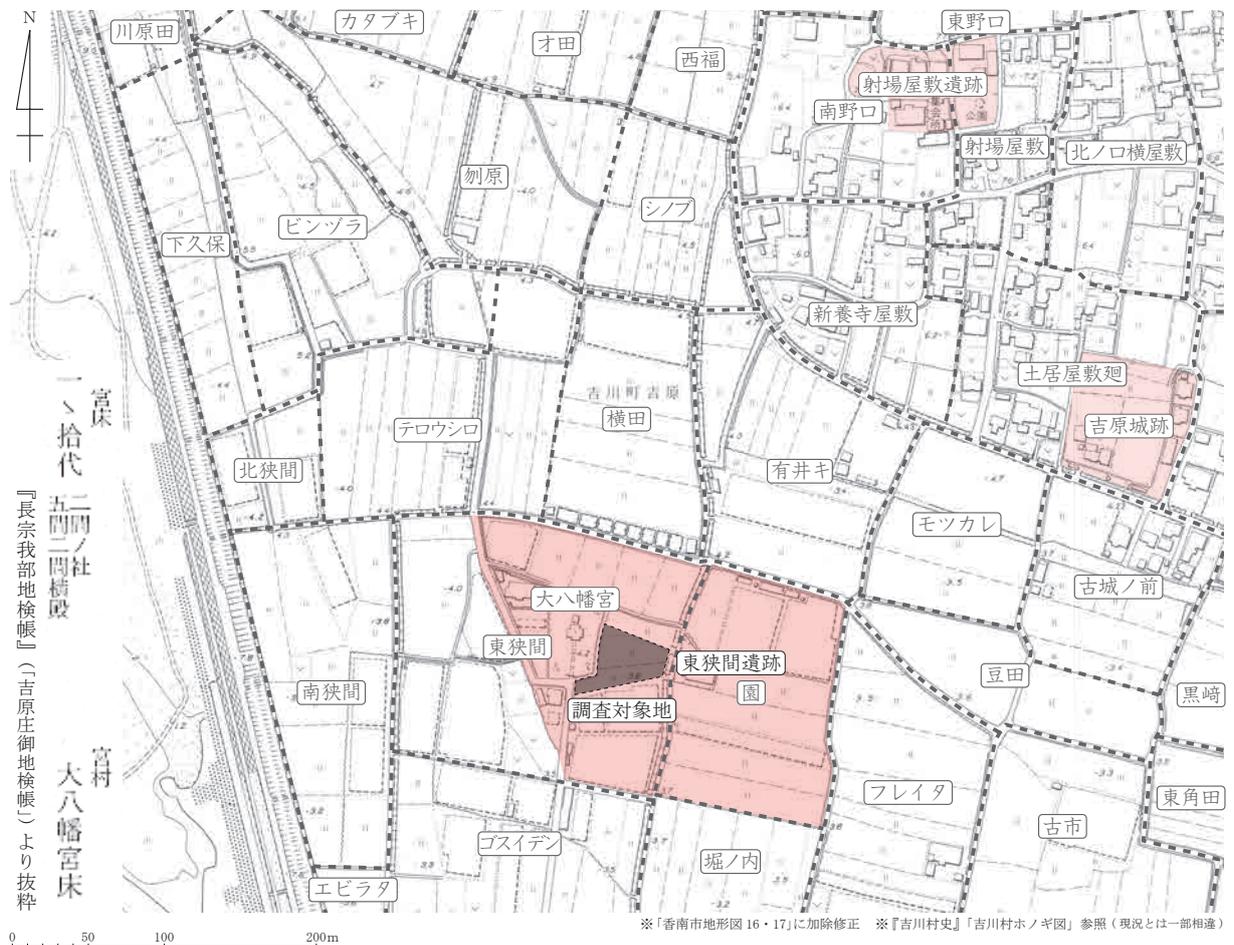
第2図 香南南部地区農村災害対策整備吉川工区緊急避難塔整備工事図面

第2節 調査対象地の概要

調査対象地の所在する香南市吉川町吉原は、西に流域の基幹を成す物部川が貫流し、瀬戸川(吉原溝)の小流を境として東に同町古川、北に沃野の広がる同市野市町下井と接する低平な田園地帯で、米作や施設園芸農業などの第一次産業が盛行している。南に土佐湾を臨んで複数列の浜堤(砂堆)が旧汀線を示し、海成複式堆積低地による堤間湿地(堤列低地)の発達により、背後に潟湖性の低湿地が認められる。対象地は物部川旧河道による河成堆積扇状地(古期)を開析する沖積扇状地(新期)の自然堤防に位置しており、標高4m前後を測る沖積低地から三角州(低湿地)へと漸次的に移行する地形的特性に立地している。

当該地には鎌倉初期に立荘したとされる吉原庄(「壬生家文書」)の歴史が伝えられている。同庄は高倉院法華堂に寄進後、室町期には細川氏の守護領国となり、長宗我部氏の檣頭に及びその支配領域となる。段丘上には中世屋敷群・寺堂等を示唆する小字や吉原城跡が所在し、周辺には「堀ノ内」「古市」等の中世(前期)に遡る遺物が散見される。『長宗我部地検帳』に記されたホノギの多くが現地比定されるなど、当庄に由来する中世村落の景観の様相を地籍図等により傍証ながら復原し得る環境が遺されている。

対象地近傍に「大(田井)八幡宮」が鎮座しており、『地検帳』には「宮床」として馬場を附帯した社殿が造営され、4町4反余の社領(神田)が記されている。社は周辺集落の産土神であり、城八幡宮等を合祀している。地内の社寺は宝永地震(1707)の津波被害で古記録を流失しており、縁起(創建年代)や権力構造等については不明であるが、関連する埋蔵文化財が遺存している可能性が予察される区域である。



第3図 東狭間遺跡包蔵地範囲及び調査対象地位置図 (S=1/5,000)

第3節 試掘調査

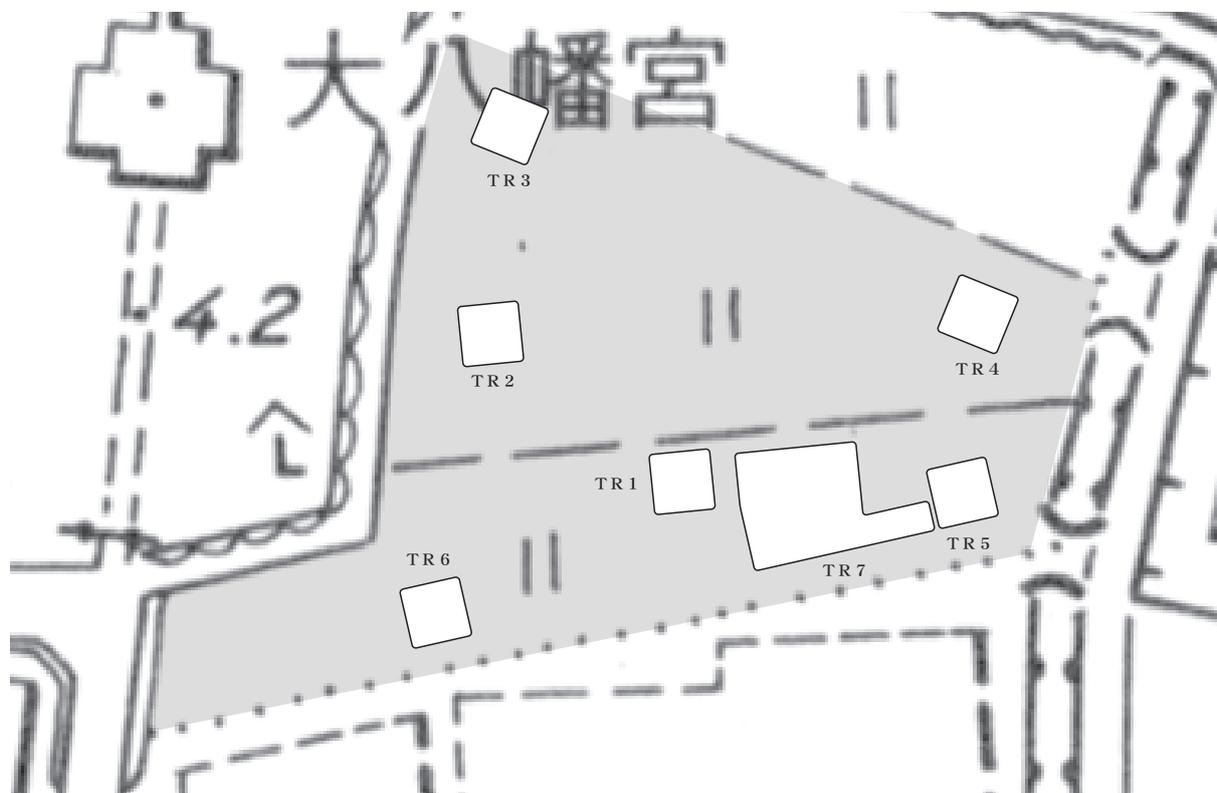
香南市吉川町吉原字東狭間において、平成29年度に「香南南部地区農村災害対策整備吉川工区緊急避難塔建設工事」が計画されている。これに伴い、事前に事業計画区内の埋蔵文化財の有無を把握し、埋蔵文化財の保護と事業の円滑な調整を図ることを目的として、平成28年度に高知県中央東農業振興センター(基盤整備課)と協議を行い、市教育委員会(生涯学習課 文化振興保護係/香南市文化財センター)が主体となって試掘調査を実施した。



調査対象地 概況 (2013. 5. 7)

試掘調査は平成29年3月17日から同月30日(平成28年度)及び平成29年4月3日から5月2日(平成29年度)にかけて約170㎡を調査した。水田作地の経歴を有する調査対象地において、既存のコンクリート畦畔等の保全を期した調査地の選定を行い、トレンチ(TR:試掘坑)を耕地内の任意の適地に設定して試掘調査を実施した。調査方法は重機(バックホウ)を用いて表土(耕作土)を剥除した後、手作業で精査して土層の堆積状況や遺物・遺構の有無について確認した。土層断面(層相)については、土色観察と層理面による分層を試み、土層断面図・写真撮影等により調査結果を記録した。試掘坑位置・検出遺構等については平板測量及び光波測距儀による測図を行い、図示している(第4・9図)。レベル測量は任意に設定した仮BM(標高4.0m ※:誤差±10cm未満)を基準とし、水準儀を用いて視準・計測を行った。

※「(香南市)地図システム」参照



※「香南市地形図16」に加除修正

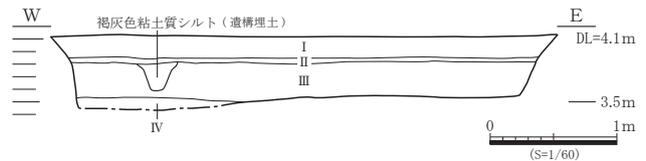
第4図 調査対象地 試掘坑位置図 (S=1/500)

基本層序

試掘坑 (TR 1) 北壁で堆積状況を観察し、図示している。表層 (I 層) は還元状態の黄灰色～黄褐色粘土質シルトを主成分とする灌漑水田土壌である。下部には強還元状態の耕土層から溶出した鉄・マンガンが酸化・濃集して斑紋帯を集積することがあり、II 層においてマンガン斑紋が確認できる。下層 (III 層) から沖積扇状地 (新期) を形成する主に粗細粒砂岩の円礫～亜円礫 (玉石) で構成される河成砂礫堆積層を検出し、扇状地性礫層の産状を把握した。対象地における基本層序は以下の通りである。

基本層序

- I: 黄灰色粘土質シルト 明褐色シルトが混在 (作土層)
- II: 褐灰色粘土質シルト マンガン濃集層 (床土)
- III: 砂礫層 3～10 cm 大の小礫を包含 (遺構検出面)
- IV: 細砂層

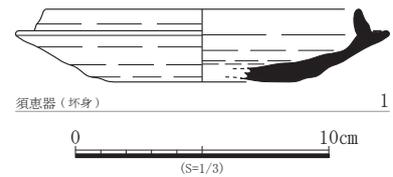


第 5 図 TR 1 土層断面図 (北壁) (S=1/60)

調査所見

試掘調査の結果、地表下約 20 cm 前後の扇状地性礫層から弥生後期後葉を示唆する住居状遺構や溝状遺構などを検出し、対象地に当該期の集落跡が遺存することが把握された。また同一遺構面から古代～中世にかけての遺構・遺物も散布しているなど計画区内全域に遺構の分布を確認しており、対象地周辺を含めた当地内において、弥生～中世に関連する集落が断続的に形成されていた可能性が推測される。

遺跡所在の把握により埋蔵文化財包蔵地として新設すると共に、工事により改変を受ける範囲についての本発掘調査に向けての基礎資料を得ることができた。



第 6 図 TR 6 出土遺物実測図



TR 1 遺構検出状況 (2017. 3. 17)



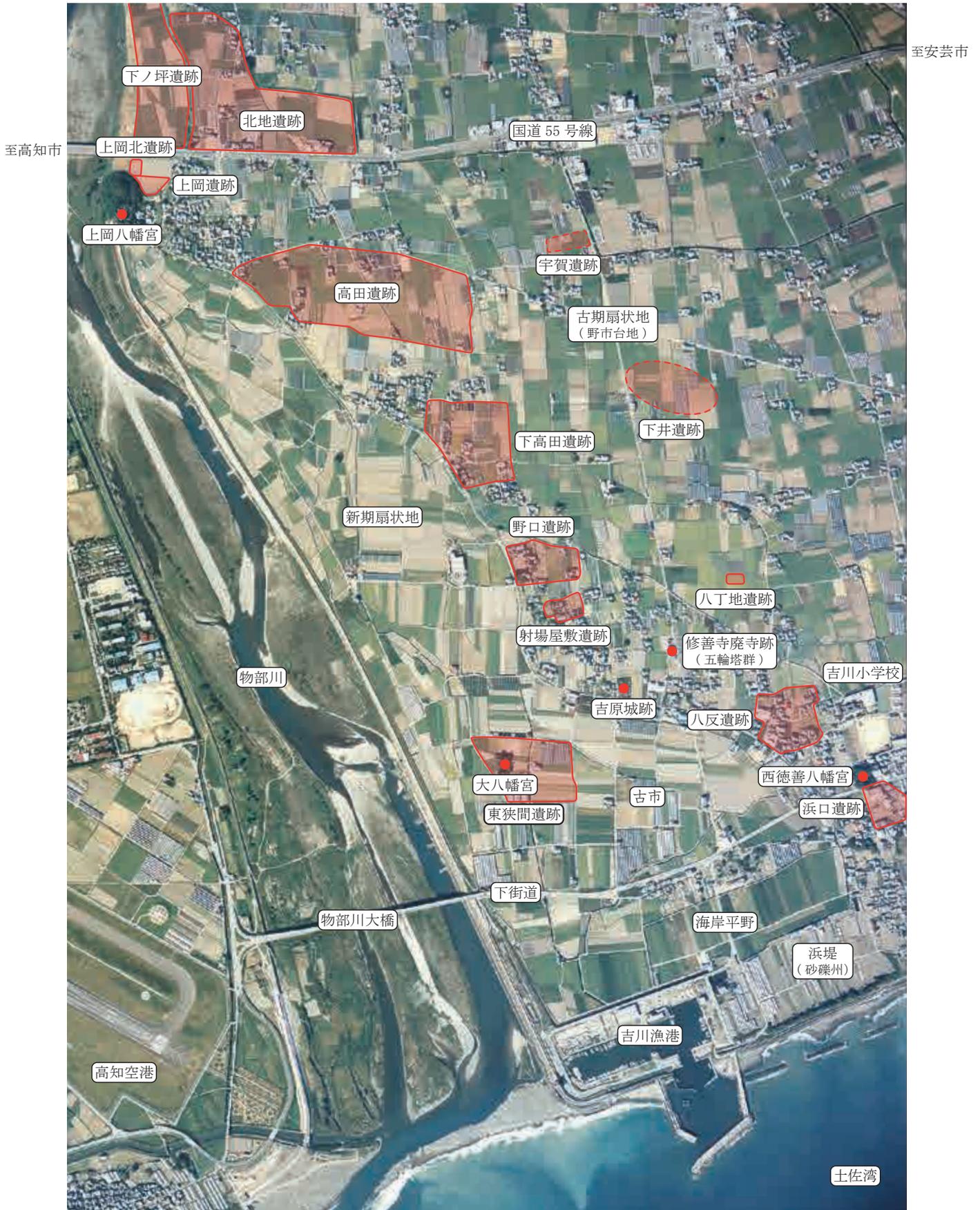
TR 6 遺物出土状況 (2017. 3. 28)



TR 7 遺構検出状況 (2017. 4. 20)



試掘調査 出土遺物 (2017. 5. 9)



※ 野市町航空写真に加筆。

東狭間遺跡周辺の地理・歴史的環境

第Ⅱ章 香南市域の地理・歴史的環境

第1節 地理的環境

東狭間遺跡は高知県香南市吉川町吉原に所在し、県中央部に広がる高知平野の東半に位置している。

平成18年(2006)4月に旧香美郡の香南5町村(赤岡町・香我美町・野市町・夜須町・吉川村)が合併し、面積126.5 km²、人口約3万3,300人(平成30年12月現在)の香南市が発足した。市域の西端には剣山山系白髪山(香美市物部町)に源を発して香南市吉川町吉原で土佐湾に注ぐ物部川(流路延長71 km)が縦貫し、同市香我美町別役峠を源流とする香宗川(流路延長19.5 km)と共に流域の基盤を成している。これらの河川により形成された扇状地や沖積平野(河成堆積低地)には沃野が広がり、最下流域の低湿な海岸平野は圃場整備が成され、米作や施設園芸農業などの第一次産業が盛行している。平野部には標高100m未満の小起伏丘陵(残丘)が点在し、山裾及び現・旧河道周辺に断続的に分布する自然堤防沿いに集落が発展している。

当遺跡の所在する香南市吉川町は物部川河口東岸に位置し、明治期の市町村合併で近世の吉原村と吉川村の頭尾を採って村名とした面積4.25 km²の旧吉川村域を後継している。東は迂曲する香宗川を中分して同市赤岡町と町域を区画し、西は物部川を隔てた西岸に字「西大境」などの飛地を有して南国市との境界を成す。南に土佐湾を臨んでドロメ(シラス)漁や嘗ては養鰻業などが活況を呈し、北は香宗川支流烏川や古川山(九六山・下田山・大石山・八幡山・篠部山の総称)、瀬戸川の小流を境に同市野市町と接している。近世には高知城下から下田(南国市)を経て東進する旧下街道(県道春野赤岡線)が村域を横断し、隣接する町には県都高知市と県東部を結ぶ主要国道55号線が東西に開通するなど、県中心部からの交通・輸送の便も申し分無く、高知龍馬空港(南国市)と目睫の間であって他地域への利便性にも優れている。

香南市は野市町域を中心に開発・都市化が進行し、高規格道路である南国・安芸道路の建設や、平成14年(2002)には第3セクターによる鉄道「ごめん・なはり線」が開通するなど、社会基盤の整備も進みつつある。一方、市内では山北をはじめとする「棒踊り」や「手結盆踊り」(県保護無形民俗文化財)などの伝統的な祭礼が継承されている地区も多く、民俗文化を次世代に伝える地域社会が残っている。

南部は太平洋(土佐湾)に面する海岸地帯(急深海浜)である。外洋性の高い波浪や沿岸流が海岸に作用して形成された複数列の浜堤(砂堆)が弓状に延びて旧汀線を示し、海成複式堆積低地による堤間湿地の発達により、背後に潟湖性の低地が認められる。この浜堤上に連檐する赤岡と岸本は在郷町として商圏を確立し、旧観の町並みに昔日の盛業を追懐する。また一帯の海岸は嘗て製塩業が盛行し、赤岡から物部川上流の大柘(香美市物部町)へ続く峠越えの往還路が、現在「塩の道」として整備されている。

東部には夜須川が南流し、河口付近に位置する手結内港は往時の景観を今に伝える藩政期の掘り込み港である。手結港の東には地質区分による四万十帯の露頭(横浪―手結住吉メランジュ:県指定天然記念物)が観察できる住吉海岸(香南市夜須町～安芸郡芸西村)が所在する。海洋底移動により遠隔地の枕状溶岩や層状チャート・多色凝灰岩などが混在する岩石群が分布し、また同帯の走行に対して上・下盤の剪断方向が異なり、その規模から地殻変動によるものと考えられるなど、プレート理論を実証している。

地理的にみた当遺跡の立地は、浜堤や砂州を形成する現海岸線から約0.9 kmの扇状地性低地に所在し、周辺は平均傾斜区分3°未満の低暖地帯が広がっている。沖積低地から三角州へと移行する当該地は標高4 m未満の低平な地形であり、象徴的景観を帯びた山容を遠景に眺望できる自然環境に在る。

秋葉山(標高490 m)を主峰とする秋葉山山系は香我美町の北に位する聞楽山(標高368 m)より南西方向

に標高を減じ、三宝山(金剛山 標高 265m)の南西方向で野市台地(扇状地性中位段丘)に埋没する。その秋葉山山系の北方に平行して烏ヶ森の山列があり、同じく南西に向かって標高を逡減して物部川にその山裾を侵蝕されている。三宝山の尾根上には仏像構造線が北東—南西の方向性を示して走向しており、尾根中腹に連なる急斜面(断層崖:傾斜角 30 ~ 40°)は、同地質構造線の衝上断層によるものである。

西南日本外帯に属する高知県地域の基盤は、四国脊梁山地をほぼ東西方向に走る御荷鉾構造線及び仏像構造線によって、北から三波川変成帯(御荷鉾緑色岩帯)・秩父累帯及び四万十帯に分類され、大観的には南ほど新しい地層が層状に累重して分布する覆瓦状構造を成している。当該地周辺は地帯構造的には四万十帯北帯に属しており、安芸構造線によって南帯と分けられる。北帯北部は断層帯が狭間隔で併走する白亜紀前期の地層(付加体)から成り、当地域は新莊川層群に属する須崎層に該当する。主に暗灰色の泥岩から形成され、珪質岩を含む海底堆積物(混濁流)によるタービダイト層(砂泥互層)を主体に構成されており、半山層(葉山層)の分布地域で南側に整合・漸移関係で上位に重なる地層である。当遺跡の北約 4.0 kmにある山嶺が三宝山で、中生代の地質構造帯「三宝山帯」の名前の由来となった峰であり、尾根上より北部が秩父帯南帯(三宝山帯)である。構造線の北側に沿って石灰岩(トリアス期)が散在しており、北東約 8.3 kmには我が国有数の石灰鍾乳洞穴として奇勝に富む龍河洞(香美市土佐山田町)が存在する。

裾野に広がる野市台地は物部川下流域に発達した開析扇状地(古期扇状地)であり、海拔約 40~10mと北から南へ緩傾斜し、香長平野(香美・長岡郡南部の河成堆積低地)の東半を形成している。この台地は、秋葉山山系西端の三宝山山麓部で遮られた物部川旧河道が東南東へ流下したためできた扇状地性堆積物(砂礫層)によって形成されたものである。また物部川に面した台地の西端部は 5mほどの段丘崖と成り、下段に沖積扇状地(新时期扇状地)が広がっている。野市台地は長岡台地(南国市・香美市土佐山田町)を含む段丘中位面と地形的に連続性がみられることから、ほぼ同時期に離水したと推測されている。降灰時期が約 7,300 年前とされる K-A h 火山灰(鬼界アカホヤ)の堆積(濃集層準)が段丘上に認められ、AT(始良-Tn)火山灰(約 25,000 年前)の降灰層準が不明瞭なことから、氷河性海面移動に基づく世界規模の海水準変動(海退)がみられた最終氷期(ヴェルム氷期)極相期(約 20,000 年前)以前に形成されたと考えられている⁽¹⁾。

野市台地(扇央部)は粗粒砂岩礫層を呈して透水性が高く、伏流による低地下水位の乏水地であり、原野の広がる非条里地域と考えられていた。物部川は下刻作用により河床が低下し、台地への灌漑は容易ではなかったが、近世初期以降の大規模な水利事業の展開により、今日にその遺産を見ることができる。

第 2 節 歴史的環境

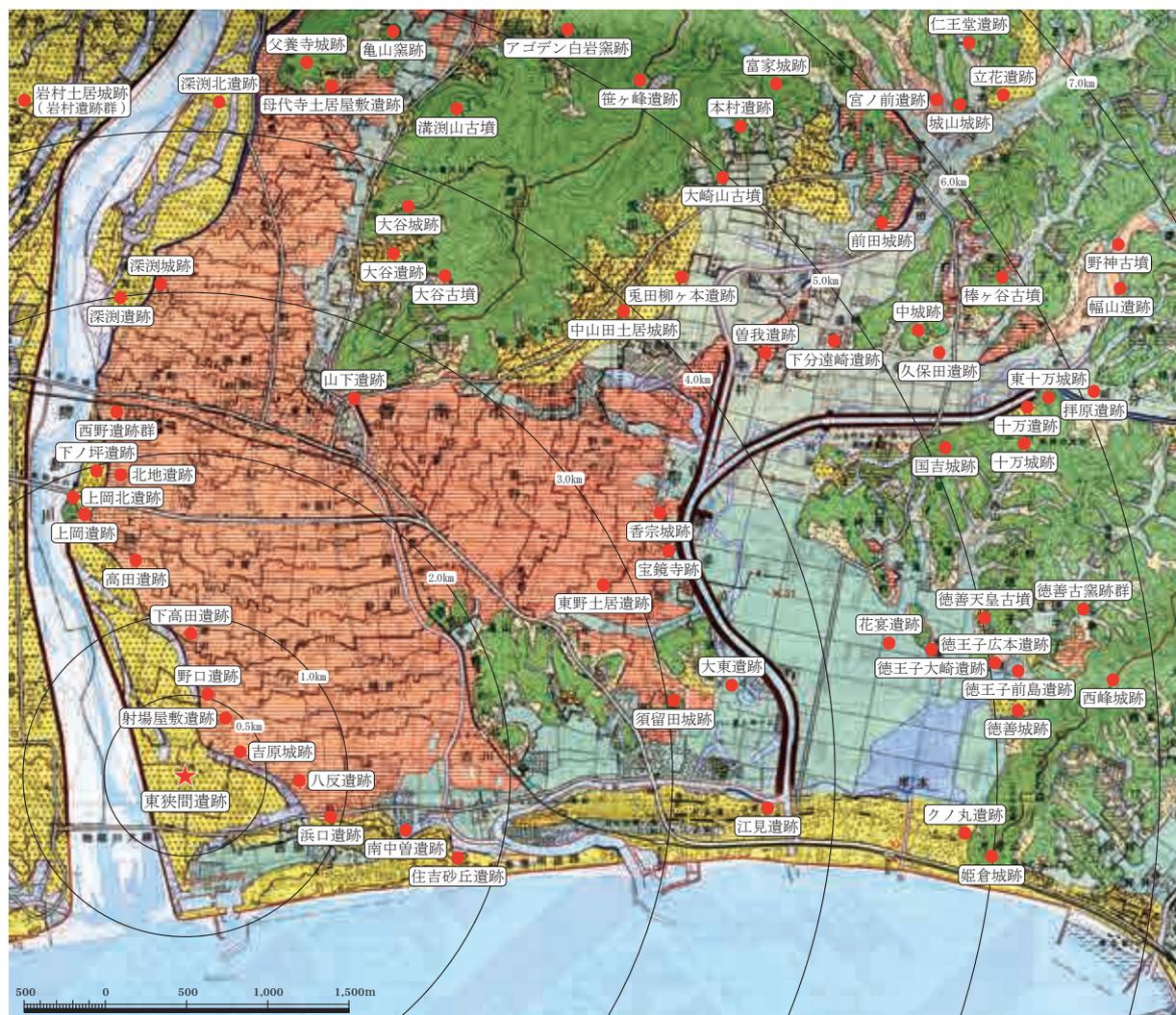
東狭間遺跡の所在する香南市は、北部に聞楽山山系の山塊を背負い南に平野部と土佐湾が開けている。中央附近を香宗川(二級河川)が流下して恵みを齎し、西は一級水系物部川が市域を区画している。

物部川は野市町をはじめ高知平野東部(香長平野)に灌漑の余慶を与えているが、現在の流路を形成したのは近世初頭に堤防が築堤されて以降のことであり、それ以前に西偏していた複数の旧河道や凹地列の派流が緩勾配の扇状地上に微地形として遺されている。下流域は旧河道地形に沿って断続的に自然堤防が形成され、遺跡の分布を把握する。その中でも当遺跡から約 3.0 km西に位置する田村遺跡群⁽²⁾(南国市)は地勢的な優位性もあり、弥生時代における南四国最大級の拠点的(母村)集落として知られている。

香南市域における縄文時代以前の遺跡は、有舌尖頭器(草創期)が採集された手結遺跡、後期(宿毛・片粕・松ノ木式)の土器片を出土した拝原遺跡⁽³⁾、晩期の貯蔵穴が確認された十万遺跡⁽⁴⁾、晩期末の突帯土器が

採集された深淵遺跡⁽⁶⁾の例が知られていたが、何れも断片的な出土状況でしかなかった。これまでは縄文・旧石器の空白地帯と謂われるほど縄文時代以前の遺跡の例は僅少であったが、平成23年(2011)に確認された庭ヶ淵遺跡⁽⁶⁾において、香長平野では初の事例となる縄文晩期の集落遺跡が発見された。近年の調査により旧石器時代ナイフ形石器文化期から細石器文化期・縄文早期にかけての岩陰遺跡である奥谷南遺跡⁽⁷⁾(南国市)、小型のナイフ形石器が確認された新改西谷遺跡⁽⁸⁾(香美市土佐山田町)、西日本有数の縄文早期の定住跡を検出した刈谷我野遺跡⁽⁹⁾(同香北町)、無文厚手土器・押型文土器(縄文早期)を出土した開キ丸遺跡⁽¹⁰⁾(同土佐山田町)など、香長平野周辺に縄文後期を遡る遺跡の存在が明らかになりつつあり、香南市域から該期の遺跡が更に確認される可能性は高いと期待されている。

平成20年(2008)、高規格道路建設に伴う発掘調査で、物部川以東で確認例の無かった弥生前期前半の遺構(土坑跡)が、香宗川下流域の海岸平野微高地(丘陵部)に立地する徳王子大崎遺跡⁽¹¹⁾で発見された。出土した土器は前期前半の西見当I式(畿内I様式古段階併行)であり、前期の早い段階でも物部川左岸に集



※ 国土地理院 1:25,000 土地条件図 高知・安芸を基に作成。

地形分類							
	主要分水界		山地斜面等		段丘(中位面・下位面)		段丘(低位面)
	山麓堆積地形		扇状地		砂(礫)堆・砂(礫)州		凹地・浅い谷
	氾濫平野・谷底平野		海岸平野・三角州		後背低地		旧河道
	河川・水涯線及び水面		旧水部				

第7図 東狭間遺跡周辺の主な遺跡及び地形分類図 (S=1/45,000)

落が発達していたことを示す遺跡として注目されている。庭ヶ淵遺跡でも弥生前期前葉から中葉の土器片(遠賀川式)の出土がみられ、移行期の遺跡として田村遺跡群の影響(伝播)が考えられている⁽¹²⁾。

弥生前期末になると、上岡遺跡⁽¹³⁾・北地遺跡⁽¹⁴⁾・下分遠崎遺跡⁽¹⁵⁾・拝原遺跡・十万遺跡など集落数は急増する。物部川右岸に所在する田村遺跡群からの分村による集落数の増加だと考えられている。下分遠崎遺跡ではカツオの脊椎骨(腹椎骨)をはじめツキノワグマ・シカ・イノシシ・イヌなど様々な魚骨・獣骨類や、農工具を含む多様な木製品、また遺構出土の炭化米から熱帯ジャポニカのDNAが検出されるなど、自然科学分析により多くの知見が齎された。

下分遠崎遺跡や北地遺跡など幾つかの遺跡では、集落が弥生前期末から中期前葉・中葉にかけて継続して営まれるが、前期末のみの一時的な遺跡もみられる。香南市域において中期中葉から後葉(Ⅲ様式中段階～Ⅳ様式古段階)にかけての遺跡は殆ど確認されていない。

中期末から後期の初めにかけては、当遺跡の北東約5.3 kmの地点に高地(丘陵)性集落的な要素を持つ本村遺跡⁽¹⁶⁾が所在している。この遺跡からは竪穴住居(建物)跡や段状遺構など当該期の高地性集落の典型的な遺構群と共にガラス製の勾玉も出土している。同遺跡は標高約30 m前後を測る低丘陵斜面部に立地しており、土器は凹線文土器が主体である。遺跡の北東に連なる山稜上に所在する笹ヶ峰遺跡や、日本屈指の鍾乳洞である龍河洞内で発見された龍河洞遺跡(香美市土佐山田町)などがほぼ同時期に営為されるなど周辺一帯の土器の分布状況から、当該期には標高の高い地点を利用していたと考えられており、成立の背景として中部瀬戸内地方の影響を受けた可能性が指摘されている。

物部川と香宗川に挟まれた野市町域は、青銅器についても注目される地域である。当遺跡の北方約4.3 kmの地点には絵画銅剣(国指定重要文化財)で知られる兎田八幡宮が鎮座し、物部川段丘崖上段には銅鏡(破鏡)の出土した北地遺跡と、銅矛の再加工品が出土した西野ルノ丸南A遺跡⁽¹⁷⁾(西野遺跡群)が所在している。この段丘崖の下段面からも後期前半の竪穴住居跡(下ノ坪遺跡⁽¹⁸⁾・上岡遺跡)が確認されており、下ノ坪遺跡では高知平野最大級の竪穴住居跡1棟から多数のガラス小玉が出土している。段丘崖の上下段に分布するこれらの遺跡は、弥生後期前半に一連の集落を形成していたものと考えられている。

弥生後期後半から古墳時代初頭にかけては、深淵遺跡・西野ルノ丸遺跡・東野土居遺跡⁽¹⁹⁾・幅山遺跡⁽²⁰⁾・野口遺跡・射場屋敷遺跡⁽²¹⁾など集落数も更に増加する。深淵遺跡・東野土居遺跡・幅山遺跡では竪穴住居跡と土器棺墓が確認され、兎田柳ヶ本遺跡⁽²²⁾では「方形周溝墓」の可能性を残す遺構を検出しているなど、当地域において当該期の墓制や祭祀空間などの様相を把握する資料の蓄積は漸増しており、今後の調査結果に期待したい。これらの集落は物部・香宗両河川流域に展開しており、他地域からの搬入土器(庄内式土器・東阿波型土器)の存在からも、河川が当時の交通に果たしていた役割を推察することができる。

古墳時代前期の古式土師器Ⅱ期以降、高知平野では遺跡の確認例がほぼ無くなるなど、遺跡数急減の可能性が指摘されている。その中で拝原遺跡では古式土師器Ⅲ期(4世紀)の竪穴住居跡が2棟検出されており、県内でも数少ない調査事例として注目されるが、県央での前期古墳は殆ど確認できていない。丘陵先端部に立地していた徳善天皇(花散里)古墳は5世紀代の古墳とされているが、それ以外は6世紀後半以降に築造された後期古墳が大半であり、存在が伝えられるが旧態を存していないものも少なくない。大谷古墳⁽²³⁾・大崎山古墳⁽²⁴⁾など発掘調査の実施された古墳もあるが、詳細な時期特定のできないものも多く、古墳時代については4～5世紀前後の様相は殆ど解明されていないのが実情である。6世紀後半～7世紀初めにかけての古墳時代後期の竪穴住居跡が、深淵遺跡・下ノ坪遺跡・西野ルノ丸遺跡・東野土居遺跡などで確認されているが、古墳被葬者の帰属集落との関連性については検討を要すると思われる。

古代(律令期)の遺跡としては、下ノ坪遺跡が白眉である。8世紀前半～9世紀中葉頃に盛行し、古代の出土遺物は硯や丸靴、全国的にも例の少ない四仙騎獣八稜鏡などが出土している。「コ」字状に配置された南四国最大級の規模を持つ総柱建物跡を検出しており、物部川に面した立地から奈良時代及び平安時代にかけて川津として機能していた遺跡だと考えられている。深淵遺跡も同様に官衙としての役割を果たしていたと考えられており、二彩陶器・緑釉陶器・墨書土器・陶硯・蛇尾などが出土している。対岸に位置する岩村遺跡群⁽²⁵⁾(南国市)からも畿内・近江・東海産の緑釉陶器が出土しており、9世紀後半～10世紀中葉頃に盛期を迎えている。中世には城館(岩村土居城跡)の出現がみられ、長期に亘る拠点として存続した要因として、物部川(旧河道)に臨む川津としての水運掌握が背景に有ると考えられる。

香宗川流域にも曾我遺跡⁽²⁶⁾や十万遺跡など官衙関連と考えられる遺跡が点在している。また条里地割(「香長条里」)の可能性を持つホノギ(一ノ坪・四ノ坪・中ノ坪・大坪など)が随所にみられる。

古代の窯跡として野市町佐古地区周辺に亀山窯跡・アゴデン白岩窯跡、香我美町徳王子に徳善古窯跡群(7世紀後半～8世紀初頭頃)が確認されている。亀山窯跡で生産された瓦は平安京大極殿や、藤原氏の氏寺である法勝寺に使用されていた記録が遺っており、古代における土佐と中央との関係を窺知する上で重要な遺跡と考えられている。物部川に面して深淵北遺跡⁽²⁷⁾が9世紀末～12世紀代にかけて成立していたとみられ、周辺には亀山窯跡関連集落の可能性を有する母代寺土居屋敷遺跡⁽²⁸⁾が所在している。

古代末から中世初頭にかけて各地で荘園の成立がみられ、香美郡内に立荘された大忍庄(荘)は、土佐湾に面した岸本(クノ丸遺跡⁽²⁹⁾)から山間部の奥物部に跨る広大な荘域を有していた。『和(倭)名類聚抄』(10世紀前半頃成立)にみえる大忍郷が荘園化したものと考えられ、鎌倉時代の後期には鎌倉の律宗寺院極楽寺が、次いで南北朝期には紀州の熊野新宮が荘領主となり、15世紀には室町幕府管領で土佐守護でもあった細川氏の所領となるなど、権門による支配の動向が当該地域に影響を与えてきた。

中世には香美郡南部において香宗我部氏の檀頭をみる。香宗我部氏は鎌倉時代初頭に西遷した中原秋通が香美郡宗我部・深淵両郷の地頭職に補任したのに始まるとされている。地名を姓氏として宗我部氏を名乗ったが、長岡郡の宗我部(秦)氏と截然するため、郡名を冠して香宗我部氏を称したとする。香宗城を居館とし、室町時代(戦国期)には土佐守護細川氏の権力を背景に大忍庄へ進出するが、安芸氏との抗争で衰退する。長宗我部国親の三男親泰を後嗣として迎え局面を打開し、以後長宗我部氏の勢力拡大に貢献する。慶長5年(1600)主家の改易に伴い、地域権力としての香宗我部氏は終焉するが、本流は中山田氏として土佐に家名を遺している。現在香宗城跡は市史跡に指定され、八幡社と土塁の一部を存しており、香宗我部氏菩提寺の宝鏡寺跡(県指定史跡)には観音堂や五輪塔などが造立している。周辺の遺跡(東野土居遺跡)からは中世の土師質土器や瓦質土器の他に貿易陶磁器などの広域流通品の出土がみられ、字「野々土居」からは堀跡と考えられる2条の溝状遺構を検出するなど、同氏との関連が指摘されている。

また香宗川左岸の標高13m前後を測る丘陵縁辺部の微高地に立地している十万遺跡でも、「重濠複郭式屋敷城」(松本豊寿『城下町の歴史的地理的研究』1967年)と考えられる溝跡を検出している。大忍庄内において名主層などの在地勢力が構造的変質を遂げる時期の遺構として注目されており、周辺の中世城館なども含めて、当該地域が緊張状況下にあった可能性を示唆している。

近世前期になると、物部川(上井・下井)からの分水(引水)により高燥な野市台地の開墾が進み、豊かな穀倉地帯へと景観を変えた。上岡北遺跡⁽³⁰⁾からは、物部川の治水を手がけた野中兼山(土佐山内家執政家老)による築堤と推測される17世紀頃の石積み遺構が確認されている。東狭間遺跡の所在する吉川町は臨海平野地帯に位置しており、地形的な観点から津波の常襲地帯としての側面も有している。宝永4年

(1707)に発生した地震の被害として西徳善八幡宮や大八幡宮の古記物等が流失した記録(「亥の大変」)が残り、住吉神社には民話として伝承されている。段丘中位面に位置する野市は物部川西岸の後免(南国市)に対する東岸の開発拠点として西野(東町)周辺に街村集落が形成され、民家・商家が発展する。明治以降の近代化に伴う町村制度施行による合併を経て、香南地域の行政・経済・文化の中心地となり今日に至る。

【註】

- (1) 研川英征「河岸段丘の形成と、地形学見地からみる物部川および高知平野」『土佐山田史談』2004年
- (2) 前田光雄・吉成承三 他 『田村遺跡群Ⅱ 第1～9分冊』(勸高知県埋蔵文化財センター 2004・2006年)
- (3) 出原恵三 『拝原遺跡』香我美町教育委員会 1993年
- (4) 高橋啓明・出原恵三・吉原達生 『十万遺跡発掘調査報告書』香我美町教育委員会 1988年
- (5) 高橋啓明・出原恵三・吉原達生 『深淵遺跡発掘調査報告書』野市町教育委員会 1989年
- (6) 宮地啓介 『庭ヶ淵遺跡』香南市教育委員会 2012年
- (7) 松村信博・山本純代 『奥谷南遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』(勸高知県埋蔵文化財センター 1999・2000・2001年)
- (8) 中山泰弘 『新改西谷遺跡・勝楽寺跡』土佐山田町教育委員会 2002年
- (9) 松本安紀彦 『刈谷我野遺跡Ⅰ・Ⅱ』香北町・香美市教育委員会 2005・2007年
- (10) 小林麻由・藁科哲夫 『開キ丸遺跡』土佐山田町教育委員会 2002年
- (11) 下村 裕・島内洋二 他 『徳王子大崎遺跡』(勸高知県埋蔵文化財センター 2009年)
- (12) 出原恵三 『南国土佐から問う弥生時代像 田村遺跡』新泉社 2009年
- (13) 更谷大介・溝渕真紀 『上岡遺跡』野市町教育委員会 2005年
- (14) 松村信博・宮地啓介 『北地遺跡』香南市教育委員会 2011年
- (15) 高橋啓明・出原恵三 他 『下分遠崎遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ』香我美町・香南市教育委員会 1989・1993・2010年
- (16) 坂本憲昭 『本村遺跡発掘調査報告書』野市町教育委員会 1993年
- (17) 更谷大介「西野遺跡群ルノ丸地区南・ルノ丸地区南A」『埋文こうち 第21号』高知県教育委員会 2008年
- (18) 出原恵三・池澤俊幸・小松大洋 他 『下ノ坪遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』野市町教育委員会 1997・1998・2000年
- (19) 久家隆芳・筒井三菜・矢野雅子 他 『東野土居遺跡Ⅱ～Ⅳ』(勸高知県埋蔵文化財センター 2015・2016・2018年)
- (20) 岡本 修 『幅山遺跡』香我美町教育委員会 1999年
- (21) 宮地啓介 『射場屋敷遺跡』香南市教育委員会 2016年
- (22) 松村信博・宮地啓介 『兎田柳ヶ本遺跡』香南市教育委員会 2010年
- (23) 山本哲也 『大谷古墳』(勸高知県文化財団 1991年)
- (24) 山本哲也 『大崎山古墳』香南市教育委員会 2013年
- (25) 三谷民雄 『岩村遺跡群Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ』南国市教育委員会 1997・1998・1999年
- (26) 高橋啓明・吉原達生 『曾我遺跡発掘調査報告書』野市町教育委員会 1989年
- (27) 吉成承三・佐竹 寛 『深淵北遺跡』野市町教育委員会 1996年
- (28) 松村信博・宮地啓介 『母代寺土居屋敷遺跡』香南市教育委員会 2010年
- (29) 松本安紀彦・舛田龍也 他 『クノ丸遺跡』(勸高知県埋蔵文化財センター 2010年)
- (30) 更谷大介・溝渕真紀 『上岡北遺跡』香南市教育委員会 2009年

【参考文献】

『高知県の地名 日本歴史地名体系 40』山本 大(監修) 平凡社 1983年

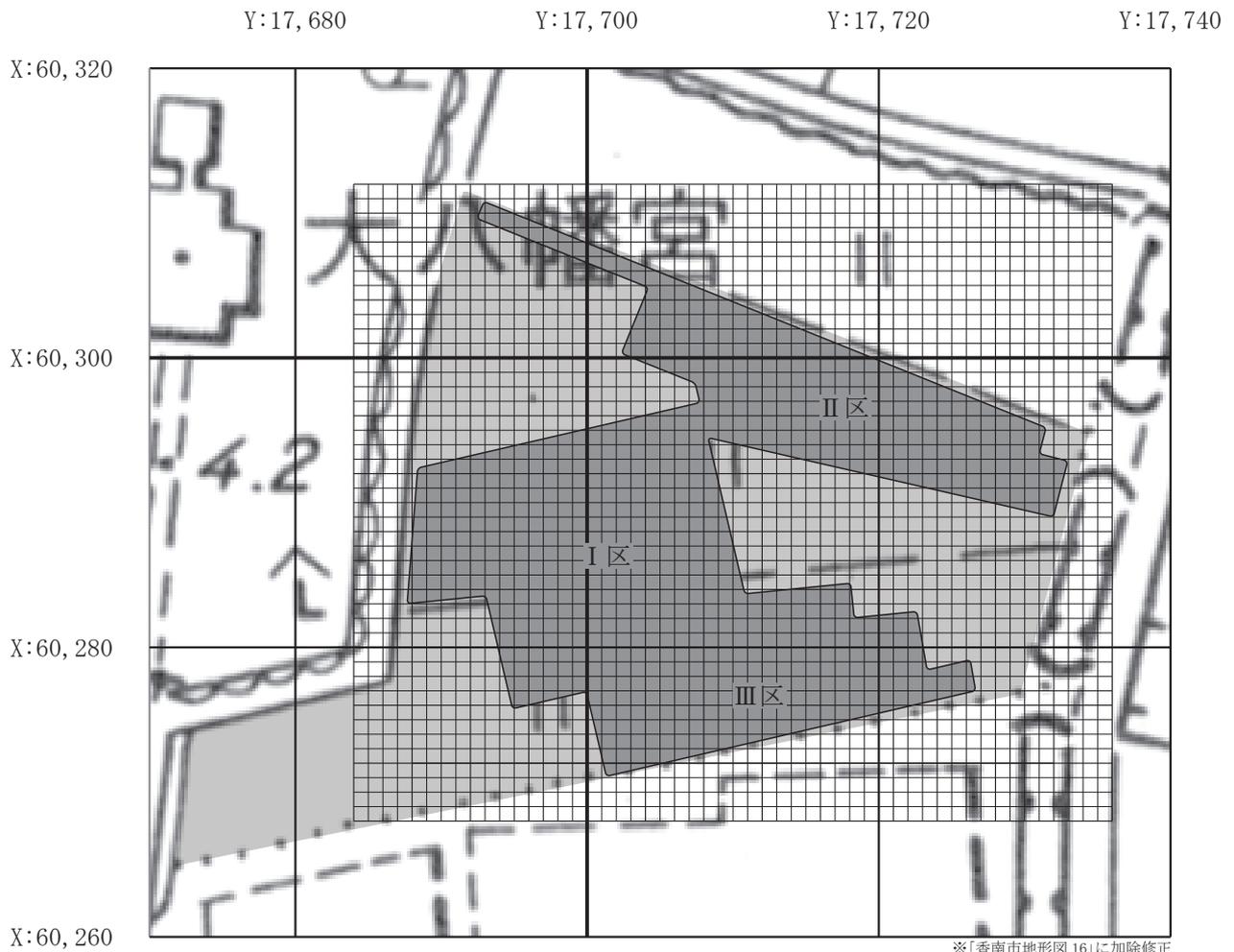
第Ⅲ章 調査の成果

第1節 調査の方法

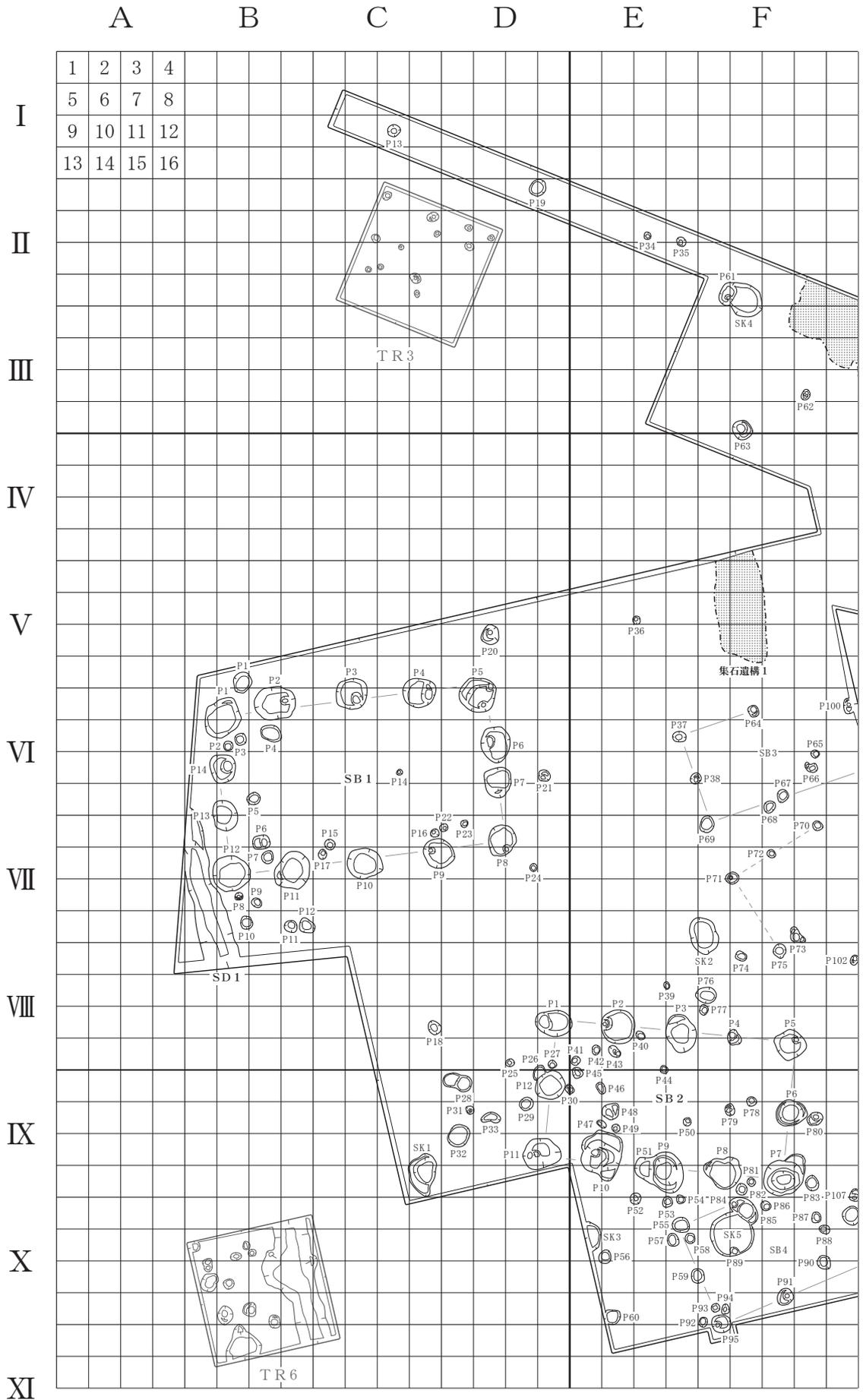
調査対象地において、排土置場及び工程上の事由により緊急避難塔本体工事部分(調査Ⅰ期)をⅠ区、外溝等周辺付帯工事部分(調査Ⅱ期)を着手順にⅡ・Ⅲ区に区分し、調査区の設定に際しては隣接民有地との境界壁の保全を期して実掘範囲を画定した。調査の手順としては、重機を用いて表土を剥除した後、遺物包含層掘削・遺構検出・遺構埋土掘削等を手作業で精査しつつ、調査を進捗させた。

検出遺構の調査については、対象遺構の形状に即して任意の基線(実測基準点)を設定し、調査員による平面実測・レベル(海拔高)測量及び写真撮影等によって記録を保存した。水平・垂直位置の測量は、BMと共用した既存の金属標を用いた任意の方向角を設定し、光波測距儀と水準儀を併用して視準・計測を行った。層相については目視による土色観察と層理面による分層を試みた。遺構平面図及び土層断面図は、縮尺20分の1を基本として測図を行い、礫群検出状況図等は縮尺10分の1を適用して作図した。

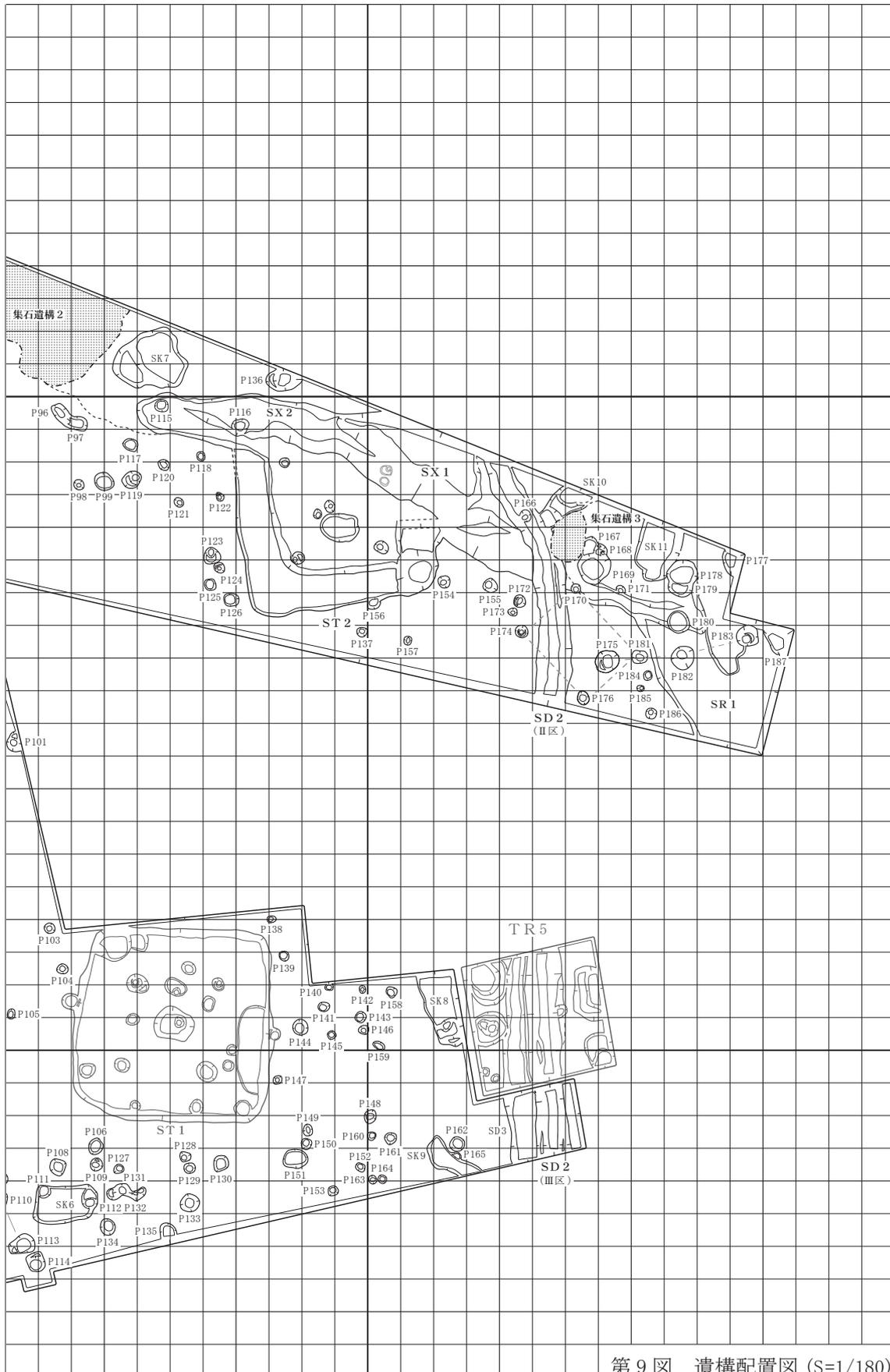
本報告書では、世界測地系に則した公共座標に基づいて1mの方眼を展開し、グリッド番号を付して遺構配置図として使用している。調査時における任意の方向軸は、方眼北(国土座標第Ⅳ系)を基準としたものに修正して本書図版に掲載している。



第8図 調査区位置及び公共座標 (S=1/500)



G H I J K L M



第9図 遺構配置図 (S=1/180)

第2節 弥生後期後葉の遺構と遺物

本調査区で検出した弥生後期後葉を示唆する主な遺構は、竪穴住居状(建物)遺構2棟(軒)、土坑状遺構6基、ピット状遺構約50個及び掘立柱建物跡2棟であるが、可能性を有する遺構も含まれている。

本報告書で記載する「弥生土器」とは、主に叩き技法による成形が顕在化してくる時期(ヒビノキ式)の土器型式を示し、本書においてヒビノキⅠ・Ⅱ式を古相、ヒビノキⅢ式(古式土師器Ⅰ併行)を新相とする。尚、試掘調査で検出・調査し、本発掘で精査したST 1に関しては本報告書への掲載は割愛している。



第10図 弥生土器片等出土遺構 (S=1/250)

竪穴住居状遺構(ST)

「竪穴住居」とは掘立柱等による上部構造を有する半地下式の家屋形態を意図した遺構を従来表現していたが、近年この名称に対して工房など住居施設以外の可能性を指摘して「竪穴建物」という用語が普及しつつある。本調査区における竪穴遺構の営為の証跡は不明であるが、構造的属性として支柱穴とみられるピット状遺構と土坑状遺構(中央ピット)及びベッド状遺構等を検出しており、形態的に本報告書では慣例を考慮して旧称を用いて報告している。



竪穴住居状遺構 作業状況 (2017.9.4)

調査の手順として土層(埋土)観察用に十字形畦(バンク)を設定し、サブトレンチを加工面まで掘削して埋積過程や床面状態の把握を行い、精査して覆土を除去した。遺構埋土中の遺物は状況に応じて水平・垂直位置を計測し、個体が確認できる遺物は図化や写真撮影等で記録した。

尚、本書図版において遺物等の出土位置を示した垂直分布図は、空間的上下関係を重複的に模式図化したものであり、主に遺構断面図等に所掲している。水平及び垂直位置が重複する状態では遺物の出土地点を優先して上・前位置に表示し、礫群、焼土・炭化物の順で表現している。また模式図化に対応した礫等は便宜上実物とは異なる色調で着色し、垂直縮尺は全厚 2/3 程度に縮小して表示している。

ST 2(第 11～17 図)

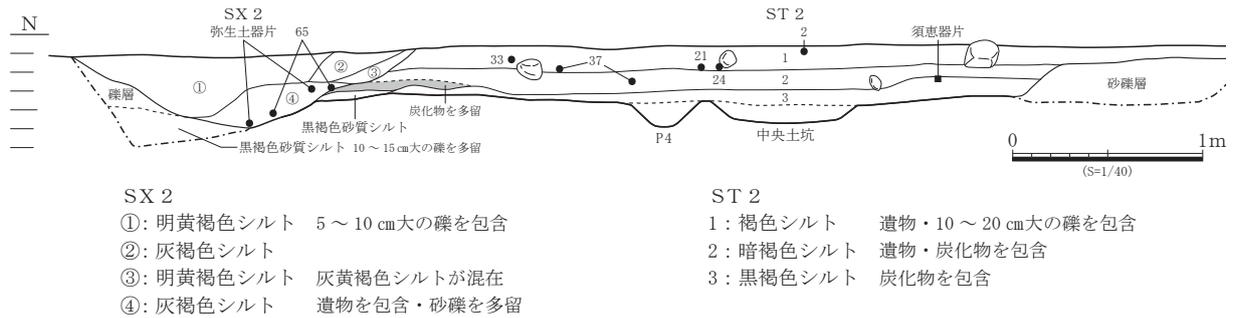
調査区ⅡⅣ・Ⅴ/JⅣ・Ⅴグリッドに位置し、検出高は 3.82m を測る。北及び東端は SX 1 により未検出であるが、平面形態は(隅丸)方形状を呈しており、長・短辺方向共に約 6.0m 前後を測る。上部は作土層により削平された可能性が考えられ、本来の竪穴部の遺構深度は把握できないが、現状で約 25～30 cm 前後を遺存している。埋土は褐色～黒褐色シルトを基調とし、2・3 層には焼土・炭化物成分を包含する。

遺構の主な平面構成要素としては、柱穴、ベッド状遺構、中央ピット等を検出している。支柱穴と考えられるのは P 1～3 で、配置から北東隅に該当する柱穴は SX 1 により削失された可能性が高い。径約 35～40 cm 前後、深さは 33 cm 前後で立柱に適合した形態を有しており、柱間寸法は約 2.6～3.0m を測る。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とし、半截による断面調査では柱痕跡等は確認できなかったが、P 3 から検出した径 12 cm、深さ 15 cm を測る小穴はその可能性を有している。また、P 1 の埋土には炭化物が少量含まれていた。4 本支柱構造であり、南北軸方向は N-7°-W を指向している。

ベッド状遺構(高床部)は幅約 1.0m 前後、低床部との高低差は 12 cm 前後を測り、遺構残存部をほぼ圍繞している。扇状地性礫層の掘り残しによる成形であり、南東隅に土坑状遺構(SK 1)を附置している。

床面中央から南寄りの位置に中央ピットと考えられる土坑状遺構を検出している。平面形状は楕円形状乃至隅丸方形状(不整形)を呈し、長軸 1.16 m、短軸 0.87 m、深さ 12 cm を遺存する。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とするが、被熱残滓等の検出は殆ど認められず「炉」(燃焼施設)を意図した可能性は低いと見当され、床面中央に所在する P 4 との関連の有無についても不明である。また竪穴部の掘削底面(加工面)からは扇状地性礫層を産出しており、最下層に貼床(機能面)を伴っていた可能性が考慮される。

埋土中から粒径 5～30 cm 大の粗細粒砂岩を主体とする円礫～垂円礫約 170 個を検出した。低床部の南及び西側を中心に遍在しているが、北側からは未検出である。可能性として SX 1 を充填する埋土に崩



- SX 2
- ①: 明黄褐色シルト 5~10 cm大の礫を包含
 - ②: 灰褐色シルト
 - ③: 明黄褐色シルト 灰黄褐色シルトが混在
 - ④: 灰褐色シルト 遺物を包含・砂礫を多留
- ST 2
- 1: 褐色シルト 遺物・10~20 cm大の礫を包含
 - 2: 暗褐色シルト 遺物・炭化物を包含
 - 3: 黒褐色シルト 炭化物を包含

第 11 図 SX 2・ST 2 土層断面図 (西壁) (S=1/40)

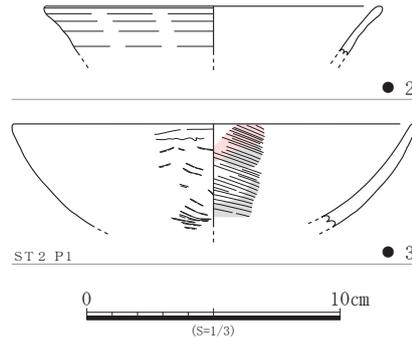
積した埋没後擾乱を主因と考量する。礫群はほぼ定高性を有して散在しており、遺構廃絶に伴って意図的に投棄されたと推察される。また概略的に表示した着色円形は、主な焼土(薄赤色)及び炭化物(薄黒色)の検出状況を表現している。埋積土の随所に多含し、床面の検出には焼土・炭化物成分の除去を要したが、柱梁構造の崩落等の焼失住居と判定し得る状況に欠いており、火焼に起因すると推測されるものの、焼土成分等の埋積過程は祭祀(儀礼)関連行為の可能性も含めて判然としない。

遺物は弥生後期後葉を示唆する土器片約2,200点(3~38)を埋存しているが、約7割以上が上層(1・2層)からの出土である。埋土は遺構廃絶後堆積層(覆土)と考えられるため、累重する出土遺物の全てを積極的に存続期間と同一視的な時間軸として帰属させることは示せない。遺物は残片(半存個体)を主体として多くは床面から遊離するなど二次廃物(廃棄資料)の可能性を含んでおり、一括性を把握できる一次廃物(遺棄資料)は多くない。13は未接合資料であるが、出土状況などから同一個体の可能性を有しており、復元図を図示している(1)。また須恵器片1点、土師質土器片3点(2)を出土しているが、人為的作用を含む様々な要因により混在したとみられる。

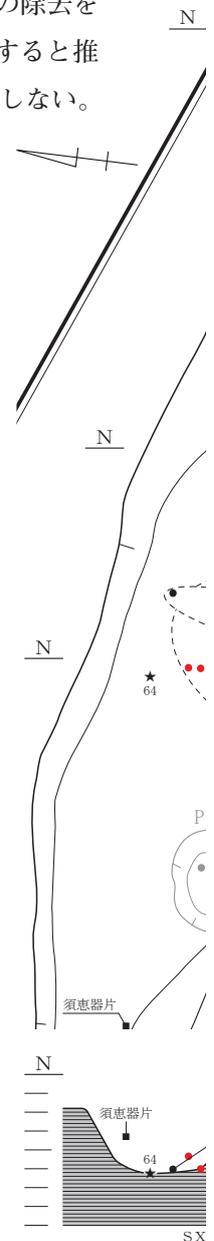
尚、遺物の一部は先後関係を有するSX 1・2の掘方斜面下方へ再堆積して原位置を留めていない可能性を残しており、49(ST 2)と50(SX 1)は同一個体と推量する。



ST 2 炭化物検出状態 (2017. 10. 18)

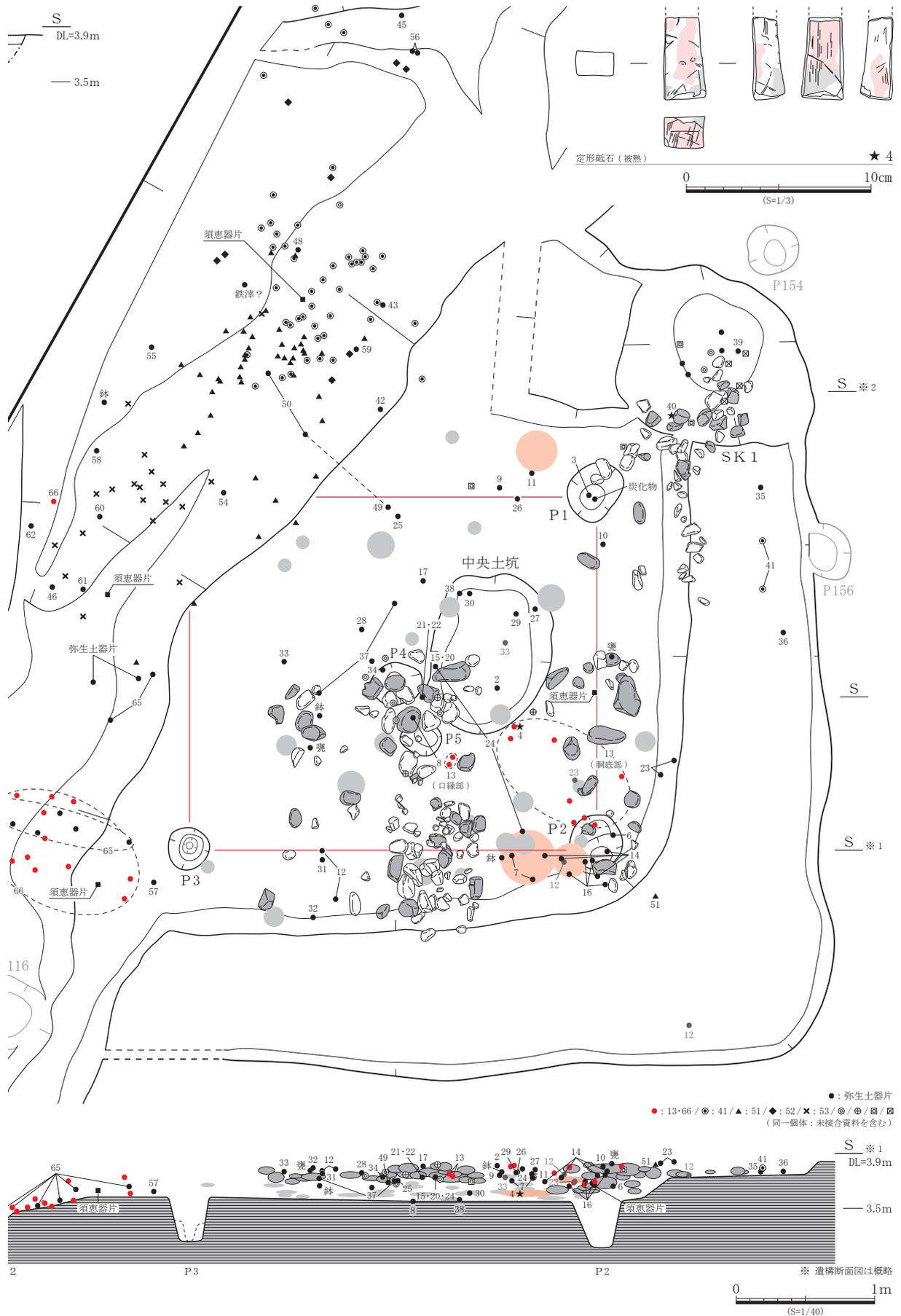


第 12 図 ST 2 出土遺物実測図 1



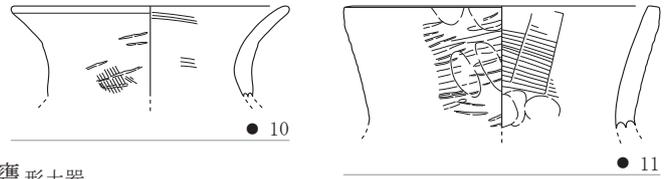
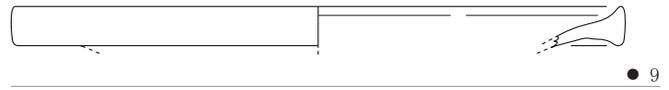
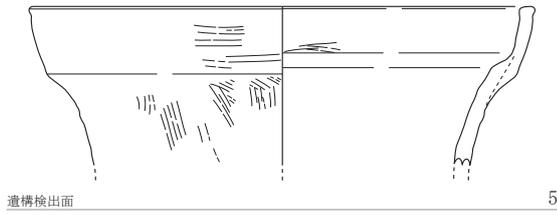
遺構番号	平面形状 (概形)	規模 (cm)			検出高 (m)	埋土 (土色・土性)	出土遺物 (破片点数)	備考
		長径	短径	深さ				
ST 2 P 1	楕円形状	44	35	33	3.567	黒褐色粘土質シルト	弥生土器 1点	主柱穴
ST 2 P 2	円形状	39	37	34	3.565	黒褐色粘土質シルト	—	主柱穴
ST 2 P 3	円形状	31	30	32	3.563	黒褐色粘土質シルト	—	主柱穴(柱痕跡)
ST 2 P 4	垂円形状	38	31	14	3.536	黒褐色粘土質シルト	—	
ST 2 P 5	非円形状	30	25	15	3.520	黒褐色粘土質シルト	—	

第 1 表 ST 2 ピット状遺構 (主柱穴) 計測表

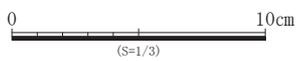
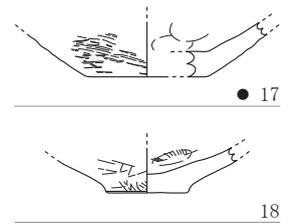
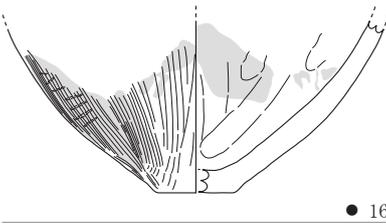
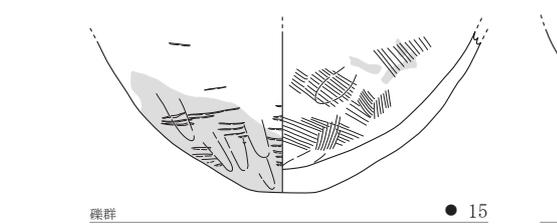
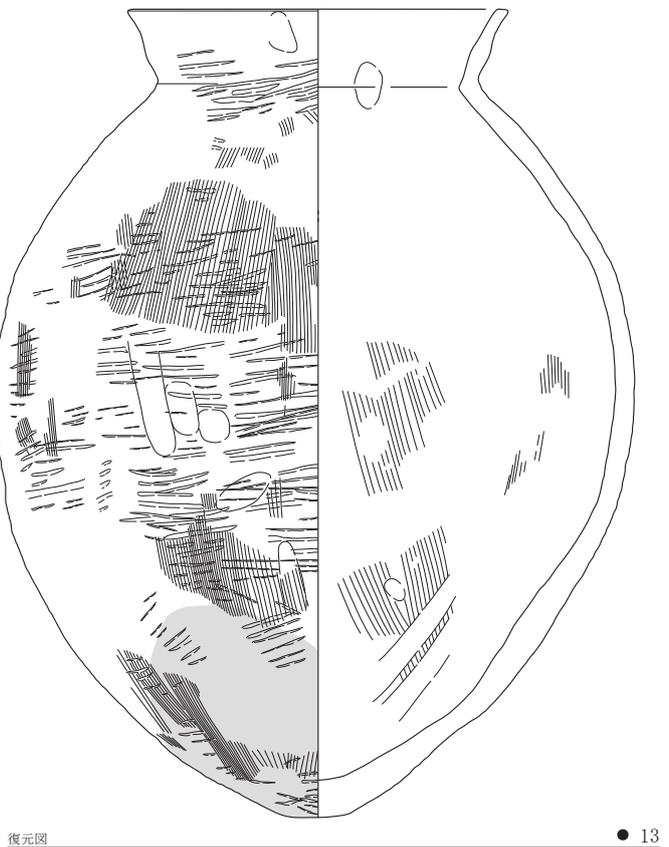
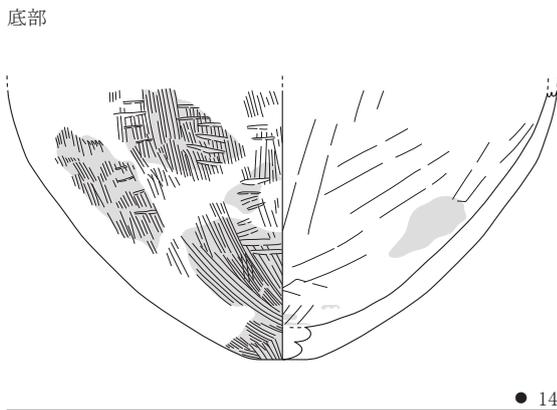
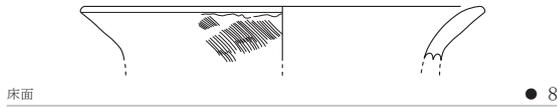
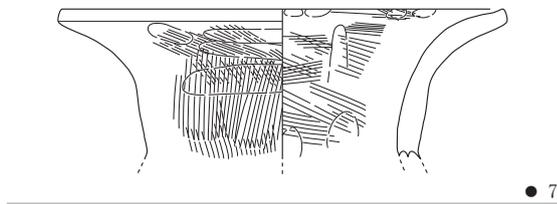
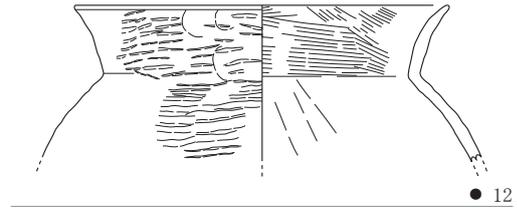
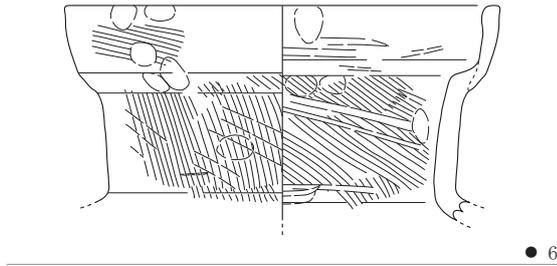


第13図 ST 2・SX 2 遺構平面図・断面図(遺物出土状況)(S=1/40)・他

壺形土器

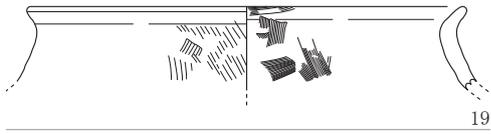


甕形土器

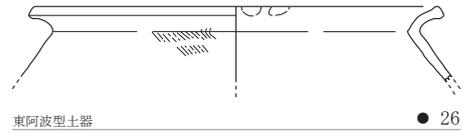


第14図 ST 2 出土遺物実測図 2(S=1/3)

非在地系土器



19

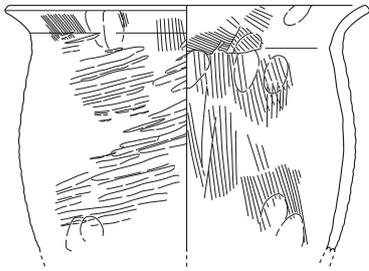


東阿波型土器

● 26

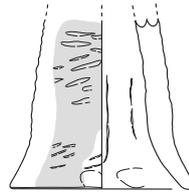
支脚形土器

ミニチュア土器

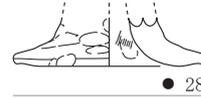


残群

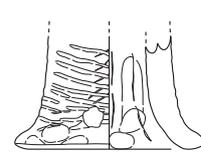
● 20



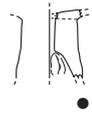
● 27



● 28

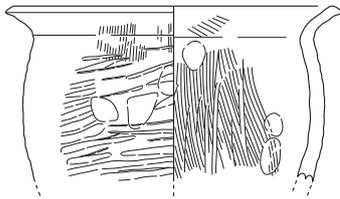


● 29



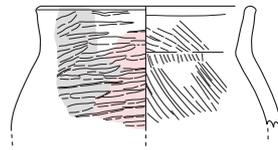
● 30

鉢形土器

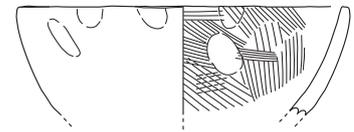


残群

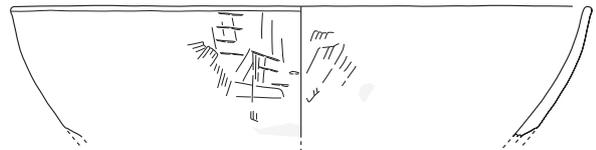
● 21



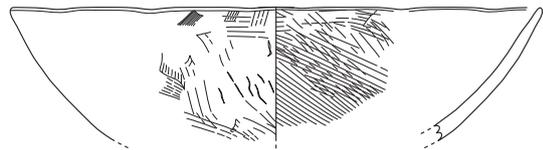
● 31



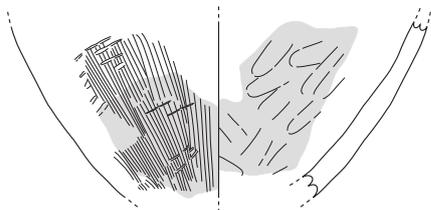
● 32



● 33



● 34

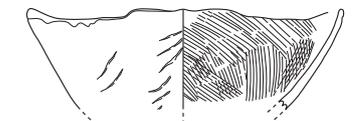


● 23



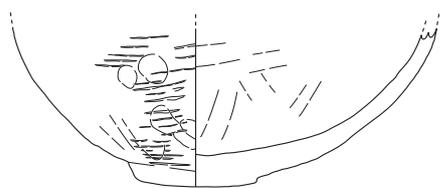
ベッド状遺構

● 35

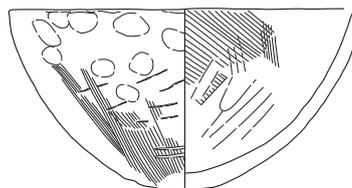


ベッド状遺構

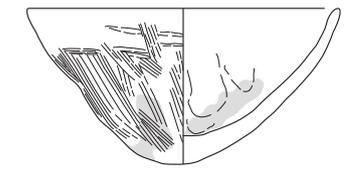
● 36



● 24



● 37

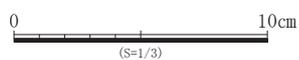


床面

● 38



● 25

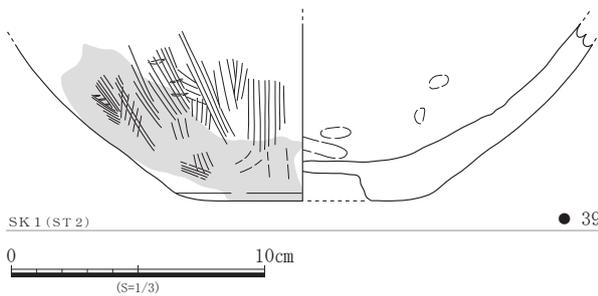


第15図 ST 2 出土遺物実測図 3(S=1/3)

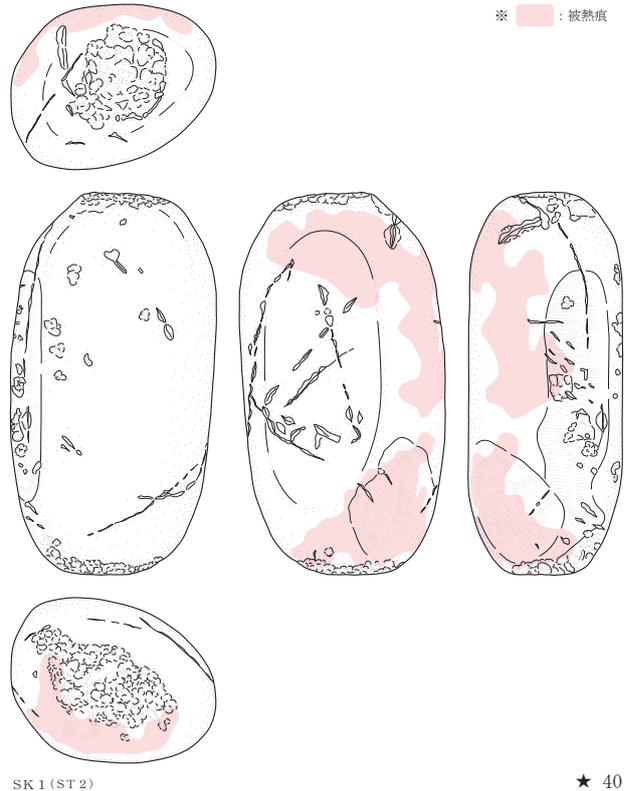
ST 2 SK 1(第16図)

ST 2の高床部南東隅から検出した土坑状遺構である。平面形態は方円形状を呈し、長軸で約1.60m、短軸で約1.25m前後を測る。断面形態は逆梯形状を呈し、深さは52cmを遺存している。埋土は暗褐色シルトを基調とする。

遺物は弥生後期後葉を示唆する土器片約130点(39)等を出土しており、多くは摩耗がみられる。ST 2出土遺物と同一性が看取できるなど、住居状遺構に伴う貯蔵穴等の可能性を思考する。



第16図 SK 1(ST 2) 出土遺物実測図 (S=1/3)



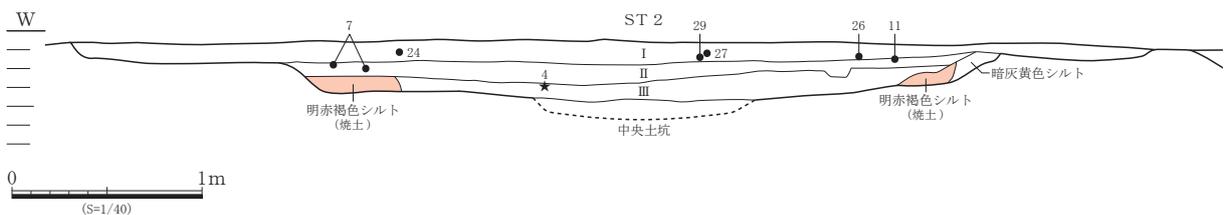
SK 1(ST 2)

SX 1(第18～22図)

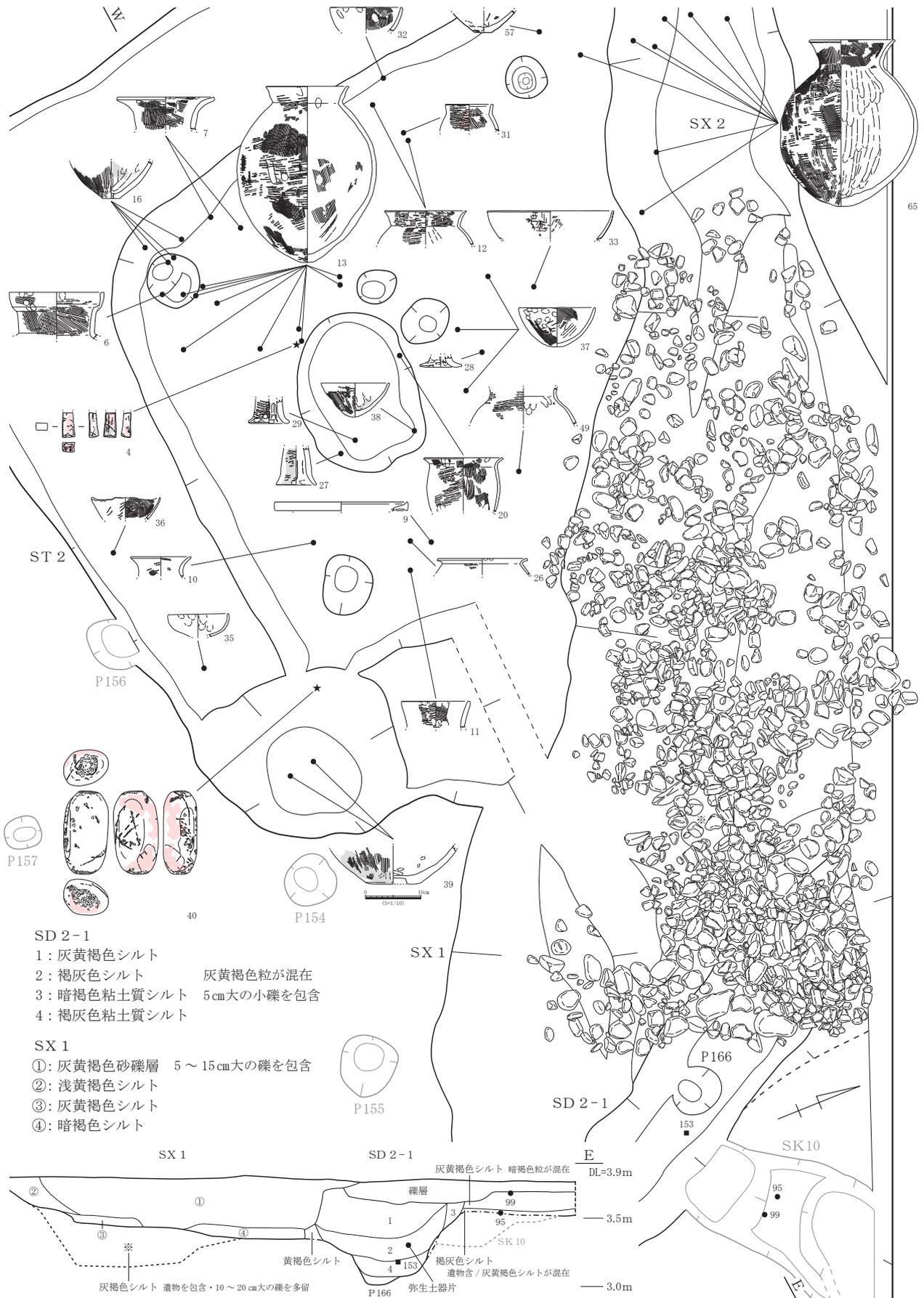
性格不明遺構 (SX)

調査Ⅱ区ⅠⅣ/JⅣ・V/KⅣ・Vグリッドに位置する。北端は調査区外へ続いており、未検出である。検出高は3.78mを測り、ST 2・SD 2-1などと先後関係を有している。現状での検出規模は長軸約7.8m、短軸約3.1m前後の溝状を呈しており、検出状態での長軸方向はN-57°-Wを指向している。底面高は西端で3.07m、東端で3.14mを測り、東から西へ緩降する状況が看取できる。断面形態は現状で凹状を呈し、深さは最深部で76cm前後を遺存している。遺構からは粒径5～30cm大の粗細粒砂岩を主体とする円礫～亜円礫約1,500個余を検出した。礫群の垂直範囲は標高約3.2～3.6m前後の水準に粗密を有しながら集積して本遺構の主要部を形成している。集石を充填する埋土は灰褐色シルトを基調とするが、部分的に空隙(擾乱)が認められた。図化しているのは上～中位部の礫群検出状況である。礫群を被覆する①層は最終段階の埋積であり、砂礫を優勢とする堆積は限定的で非人為的な印象を与えている。

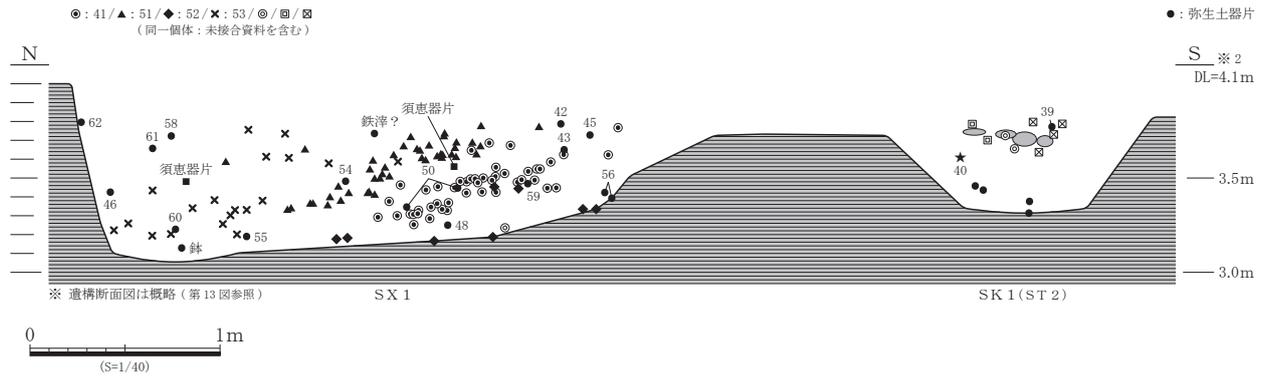
遺物は弥生後期後葉を示唆する土器片約400点(41～62)を主体とするが、ST 2出土遺物と接合する個体も含まれるなど、出土状況(第13・19図)等から多くは先行する竪穴住居状遺構に由来する遺物と捉えることができる。本遺構からは須恵器片8点や土師質土器片約30点の他、瓦質土器片や白磁片(42)などが僅少なが出土しており、古代～中世期を主要な帰属時期とする暗渠状遺構等の可能性が思量される。



第17図 ST 2 土層断面図(南壁) (S=1/40)



第18図 SX 1 遺構平面図(礫群検出状況)・土層断面図(S=1/40)・他



第19図 SX 1・SK 1 (ST 2) 遺構断面図 (遺物出土状況) (S=1/40)

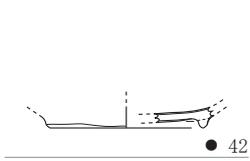
壺形土器



0 10cm (S=1/3)

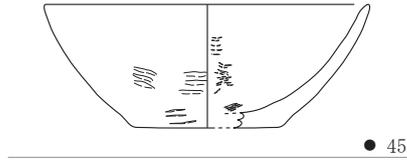
第20図 SX 1 出土遺物実測図1 (S=1/3)

白磁碗

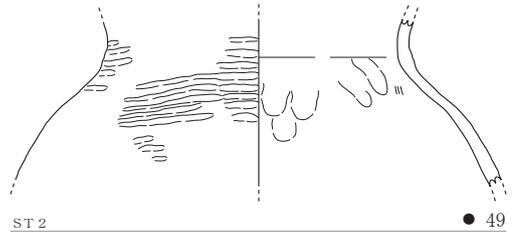


● 42

鉢形土器

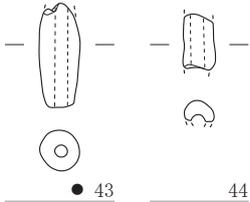


● 45



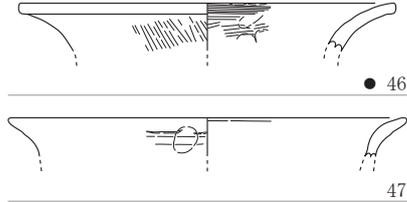
● 49

土錘



● 43

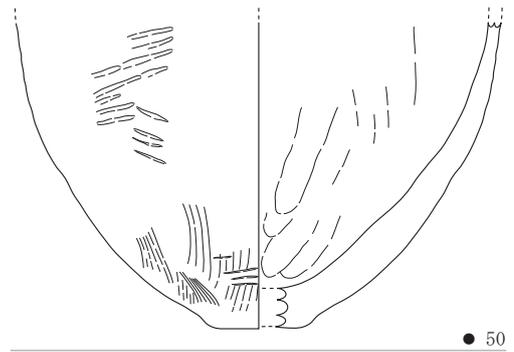
壺形土器



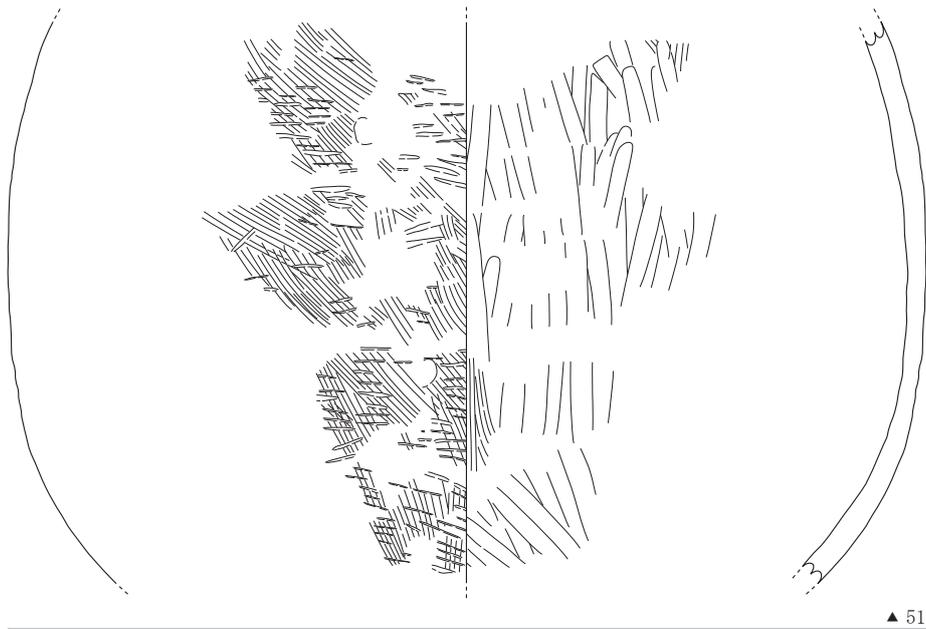
● 46



● 48

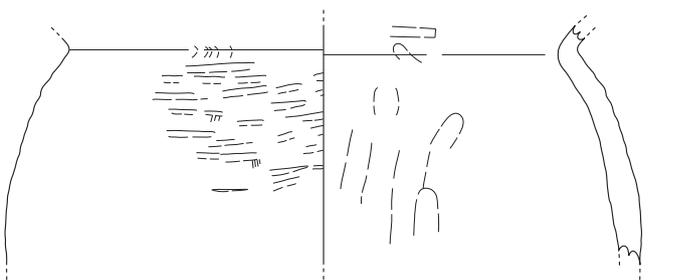


● 50

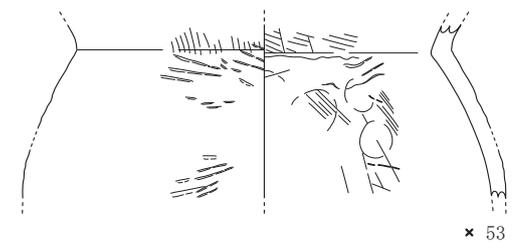


▲ 51

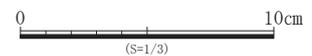
甕形土器



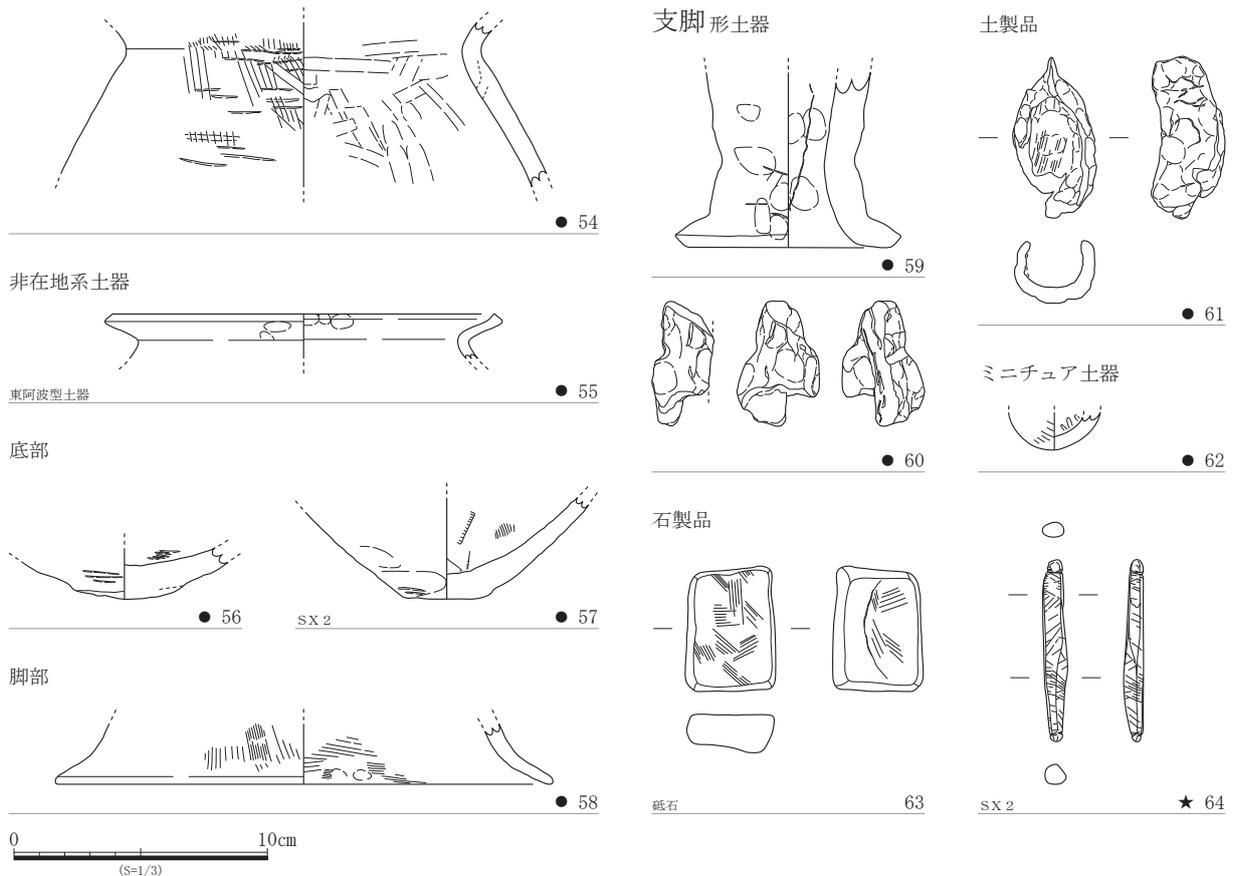
◆ 52



× 53



第 21 図 SX 1 出土遺物実測図 2 (S=1/3)



第22図 SX 1・2 出土遺物実測図 (S=1/3)

SX 2(第11・13・22・23 図)

調査Ⅱ区HⅣ/IⅣグリッドに位置し、検出高は3.76mを測る。ST 2・SX 1と先後関係を有し、底面からP115・116を検出している。現状での検出規模は長軸約7.4m、短軸約1.9mの溝状を呈しており、検出状態での長軸方向はN-77.5°-Wを指向する。底面高は西端で3.58m、東端で3.34mを測り、西から東へ緩降する状況が看取できる。断面形態は凹状を呈し、深さは20～43cm前後を遺存している。埋土は明黄褐色シルト～灰褐色シルトを基調とする。

遺物は弥生後期後葉を示唆する土器片約130点(57・65・66)を主体とするが、遺構南側に偏在するなどの出土状況から多くは重複関係を有するST 2に由来する遺物の流入(変位)が窺える。66は未接合資料であるが分離遺物の一括性や土器片等から同一個体の可能性が考えられ、復元図を図示している⁽²⁾。

本遺構は土層断面図(第11 図)などからST 2を削剥する遺構と観察されるが、埋没時期を推定する遺物は寡少であり、須恵器片(2点)を出土するなど遺物構成的に古代以降を主要な帰属時期とする溝状遺構と捉えることもできる。

調査Ⅱ区北端に展開するSX 1・2(性格不明遺構)は本節の対象時期より後代の遺構と考えられるが、弥生後期後葉を示唆する竪穴住居状遺構に関連する遺物が多量に出土している可能性を考慮し、同節に収載している。



SX 2 遺物出土状況：65 (2017. 9. 13)

壺形土器



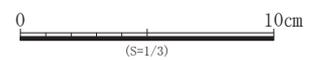
● 65

甕形土器



復元図

● 66



第23図 SX2 出土遺物実測図 (S=1/3)

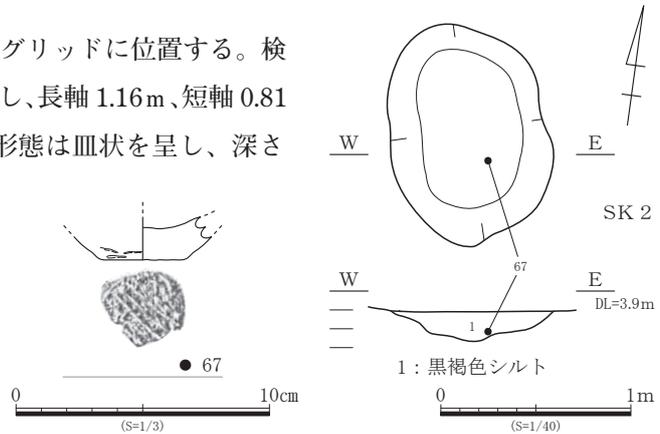
土坑状遺構(SK)

本調査区において弥生後期後葉を示唆する遺物を主体に出土するなど、当該期の可能性を含む土坑状遺構は6基を抽出できたが、形状や配置などに企劃性は看取できず各遺構の性格についても不明である。

SK 2(第24図)

調査Ⅰ区EⅦ-16/EⅧ-4/FⅦ-13/FⅧ-1グリッドに位置する。検出高は3.80mを測る。平面形状は楕円形状を呈し、長軸1.16m、短軸0.81mを測る。長軸方向はN-16°-Wを示す。断面形態は皿状を呈し、深さは20cm前後を遺存している。埋土は黒褐色シルトを基調とする。

遺物は弥生後期後葉(古相)を示唆する土器片44点(67)と土師質土器片2点を出土している。多くは細片であり、摩耗がみられる。

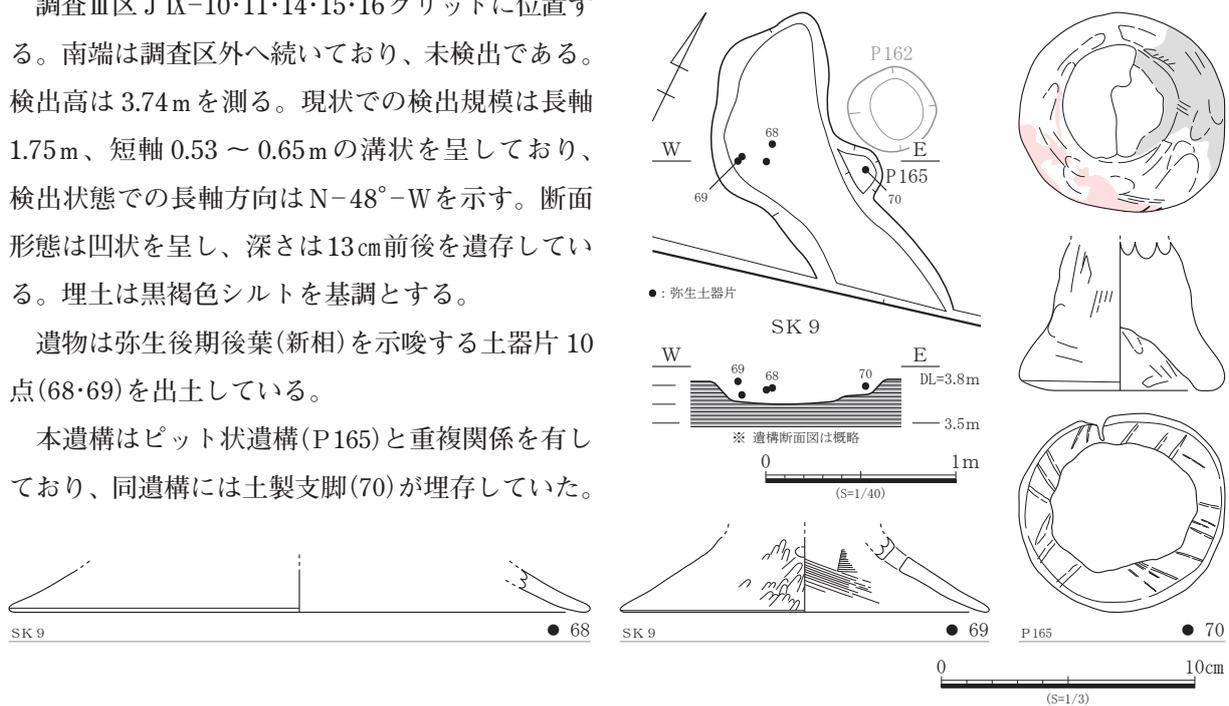


SK 9(第24図)

調査Ⅲ区JⅨ-10・11・14・15・16グリッドに位置する。南端は調査区外へ続いており、未検出である。検出高は3.74mを測る。現状での検出規模は長軸1.75m、短軸0.53～0.65mの溝状を呈しており、検出状態での長軸方向はN-48°-Wを示す。断面形態は凹状を呈し、深さは13cm前後を遺存している。埋土は黒褐色シルトを基調とする。

遺物は弥生後期後葉(新相)を示唆する土器片10点(68・69)を出土している。

本遺構はピット状遺構(P165)と重複関係を有しており、同遺構には土製支脚(70)が埋存していた。



第24図 SK 2・9 遺構平面図・他 (S=1/40) 出土遺物実測図 (S=1/3)

遺構番号	平面形状 (概形)	規模 (m/cm)			検出高 (m)	埋土 (土色・土性)	重複関係	遺構位置 (グリッド)	出土遺物 (破片点数)
		長軸	短軸	深さ					
SK 3	楕円形状	0.96	(0.44)	11	3.795	黒褐色シルト	—	EX-1・5	—
SK 4	楕円形状	(0.94)	1.00	22	3.760	黒褐色シルト	P 61	FⅡ-13・14 / FⅢ-2	弥生土器 5点
SK 5	円形状	1.35	1.34	11	3.759	褐灰色シルト	P 85・89	FX-1・2・5・6	弥生土器 10点
SK 6	長方形	1.88	1.13	11	3.763	褐灰色シルト	P 111・112	GX-2・3・4・6・7・8	弥生土器 10点
SK 8	長方形	(2.39)	(1.06)	11 (32)	3.762	黒褐色シルト	土坑状遺構 (TR 5)	JⅧ-6・7・10・11・14・15	弥生土器 21点 土師質土器 12点

第2表 土坑状遺構(SK)計測表

ピット状遺構(P)/掘立柱建物跡(SB)

本調査区においてピット状遺構は時期不明を含めて約190個を検出している。弥生後期後葉の遺物を出土するなど当該期の可能性を含む遺構は約50個を抽出できるが、擾乱等により土師質土器片等が混入している状況も散見されるなど、古代～中世期の遺構が混在している状態が看取できる。

遺構の平面形状は概形で円形状を基本とする。断面形は立柱を意図した形状を呈するものが多いが、検出面から底面までの高低差が小規模な遺構は柱穴として根入れが不十分な印象を受け、固定力(自立性)に不安が残る。これは扇状地性礫層を被覆していた土壌化層に形成する遺構群の掘方上部を土層に削平された可能性が要因として指摘でき、浅い遺構は主体部を削失した残部の可能性も考えられる。

検出したピット状遺構は平面観察の後、半截して柱痕跡等の有無を確認するなどの精査を行ったが、殆どの遺構は黒褐色シルト又は褐灰色シルトを基調とする単層埋土であった。重複関係を有する遺構では先後関係を確認するため適所で断面調査を行い、必要に応じて土層断面図を作成した。

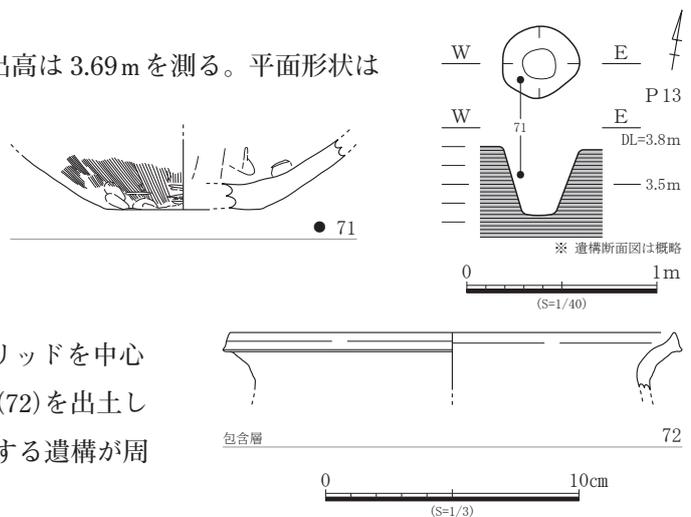
調査区に散在する多数のピット状遺構は柵列(柱穴列)跡等を含む遺構群を構成していたと考えられるが、不等規格などの変則的な平面形の可能性も考慮するなど、復元作業には留意する必要がある。本書では柱筋の通りなどから抽出した柱穴群を、意図的な配列の可能性を残す事例として報告しているが、各柱穴列の主軸方向に有意な関連性は見出せなかった。

P13(第25図)

調査Ⅱ区CⅠ-11グリッドに位置する。検出高は3.69mを測る。平面形状は円形状を呈し、長径40cm、短径38cm、深さ38cmを遺存している。埋土は黒褐色シルトを基調とする。

遺物は弥生後期後葉(古相)を示唆する土器片(71)を出土している。

本遺構の所在する調査Ⅱ区北西端はCⅠグリッドを中心に包含層(黒褐色シルト)から弥生土器片45点(72)を出土しており、遺物からヒビノキⅠ式を帰属時期とする遺構が周辺に展開していた可能性が検討される。



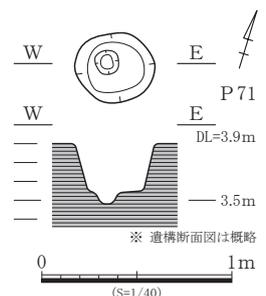
第25図 P13 遺構平面図・他 (S=1/40) 出土遺物実測図 (S=1/3)

P71(第26図)

調査Ⅰ区FⅦ-5・6・9・10グリッドに位置する。検出高は3.80mを測る。平面形状は垂円形状を呈し、長径42cm、短径38cm、深さ26cmを遺存している。底面から径13cm前後、深さ6cmを測るピット状遺構を検出した。埋土は黒褐色シルトを基調とする。

遺物は弥生後期後葉を示唆する土器片13点を出土している。多くは細片であり、摩耗がみられる。

本遺構は周辺遺構群(P70・72・75)と柱穴列等の相関関係を有する可能性を含んでいる(第9図)。その場合における柱間寸法は約1.5～2.7mを測り、現状での東西軸方向はN-58°-Eを指向している。



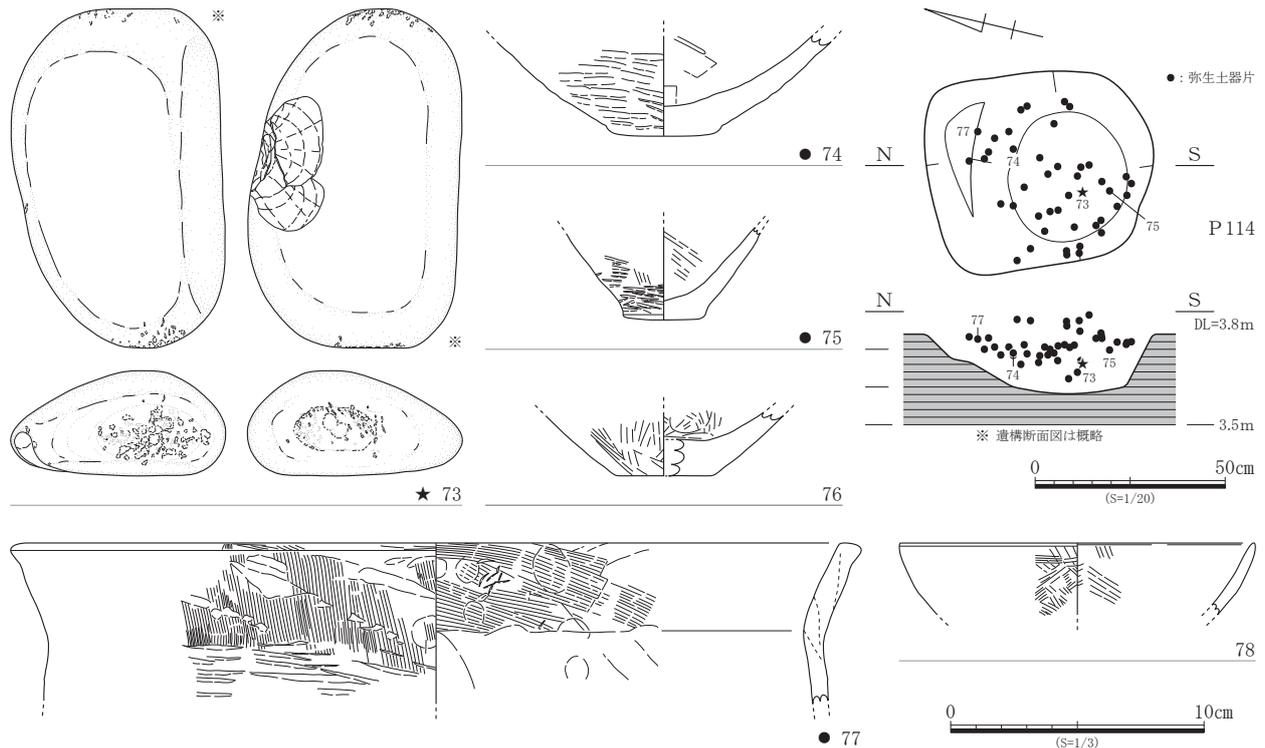
第26図 P71 遺構平面図・他 (S=1/40)

P114(第27図)

調査Ⅲ区G X-10・11グリッドに位置する。検出高は3.76mを測る。平面形状は方円形状を呈し、長径60cm、短径51cm、深さ19cmを遺存している。埋土は黒褐色シルトを基調とする。

遺物は弥生後期後葉(古相)を示唆する土器片約100点(74～78)と叩石(73)を出土しており、土器片の多くは摩耗がみられる。

本遺構は未実測ながら良好な胴部片(写真図版18)を出土しているなど、遺構の規模に比して多量の遺物を埋存しており、意図的な遺棄(埋納)を指向した廃棄土坑等の可能性も考慮される。



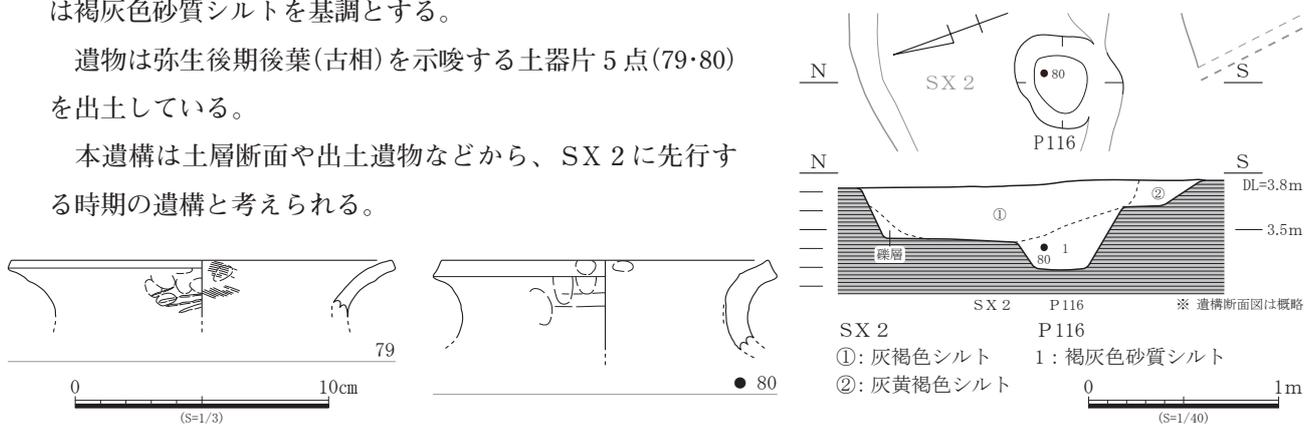
第27図 P114 遺構平面図(遺物出土状況)・他(S=1/20) 出土遺物実測図(S=1/3)

P116(第28図)

調査Ⅱ区H IV-4・8 / I IV-1・5グリッドに位置する。SX 2と先後関係を有しており、検出高は3.62mを測る。平面形状は不整形な垂円形状を呈し、長径56cm、短径49cm、深さ33cmを遺存している。埋土は褐灰色砂質シルトを基調とする。

遺物は弥生後期後葉(古相)を示唆する土器片5点(79・80)を出土している。

本遺構は土層断面や出土遺物などから、SX 2に先行する時期の遺構と考えられる。



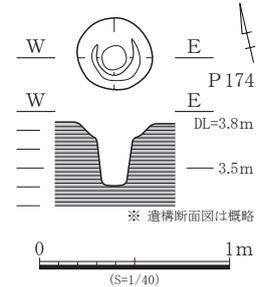
第28図 P116 遺構平面図・他(S=1/40) 出土遺物実測図(S=1/3)

P174(第29図)

調査Ⅱ区KV-13グリッドに位置する。検出高は3.74mを測る。平面形状は円形状を呈し、長径39cm、短径38cm、深さ35cmを遺存している。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とする。

遺物は弥生後期後葉を示唆する土器片5点を出土している。何れも細片であり、摩耗がみられる。

本遺構は周辺遺構群(P170・176・181)と柱穴列(掘立柱建物跡)等の相関関係を有する可能性を含んでいる(第9図)。その場合における柱間寸法は長辺約2.8m、短辺約2.1mを測り、長軸方向はN-43°-Wを指向している。



第29図 P174 遺構平面図・他 (S=1/40)

P175(第51図)

調査Ⅱ区KV-15・16/KVI-3・4グリッドに位置する。検出高は3.78mを測る。平面形状は不整形形状を呈し、長径76cm、短径66cm、深さ34cmを遺存している。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とする。

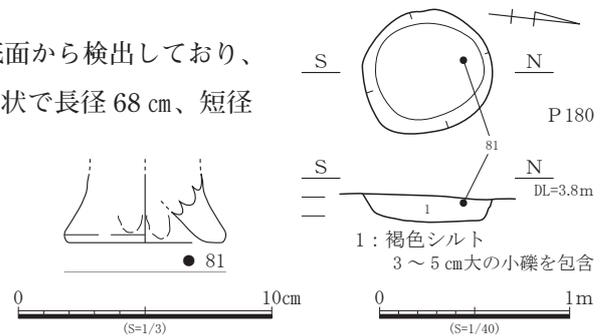
遺物は弥生後期後葉(新相)を示唆する土器片約30点(177)を出土しており、多くは摩耗がみられる。

本遺構及びP182・183は、検出状況や出土遺物の帰属時期などから柱穴列等の相関関係を有する可能性を含んでいる(第51図)。その場合における柱間寸法は約2.0~2.3mを測り、現状での東西軸方向はN-80°-Eを指向している。

P180(第30図)

調査Ⅱ区LV-10・14グリッドに位置する。SR1の底面から検出しており、検出高は3.70mを測る。平面形状は円形状を呈し、現状で長径68cm、短径65cm、深さ15cmを遺存している。埋土は褐色シルトを基調とする。

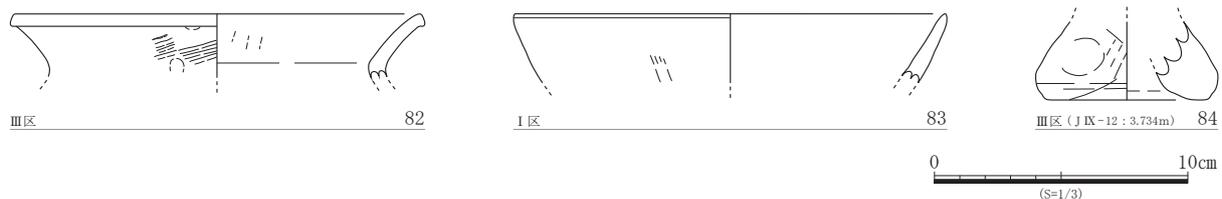
遺物は弥生後期後葉(新相)を示唆する土器片(81)を出土している。



第30図 P180 遺構平面図・他 (S=1/40)

包含層出土遺物(第31図)

当該期の包含層出土遺物は約400点を出土しており、Ⅰ区で67点(17%)、Ⅱ区で176点(45%)、Ⅲ区で151点(38%)余を数える。遺物は細片が主体であり、多くは摩耗がみられる。図示したものは甕形土器(82)、鉢形土器(83)の口縁部及び支脚形土器(84)である。Ⅱ・Ⅲ区には比較的良好な遺物包含層が遺存しており、古代~中世期の遺物も混在しているが、本調査区において被覆する埋積土壌と遺構埋土の識別は容易ではなく、下位層(扇状地性礫層)に至って遺構の検出を確定する状況にあった。

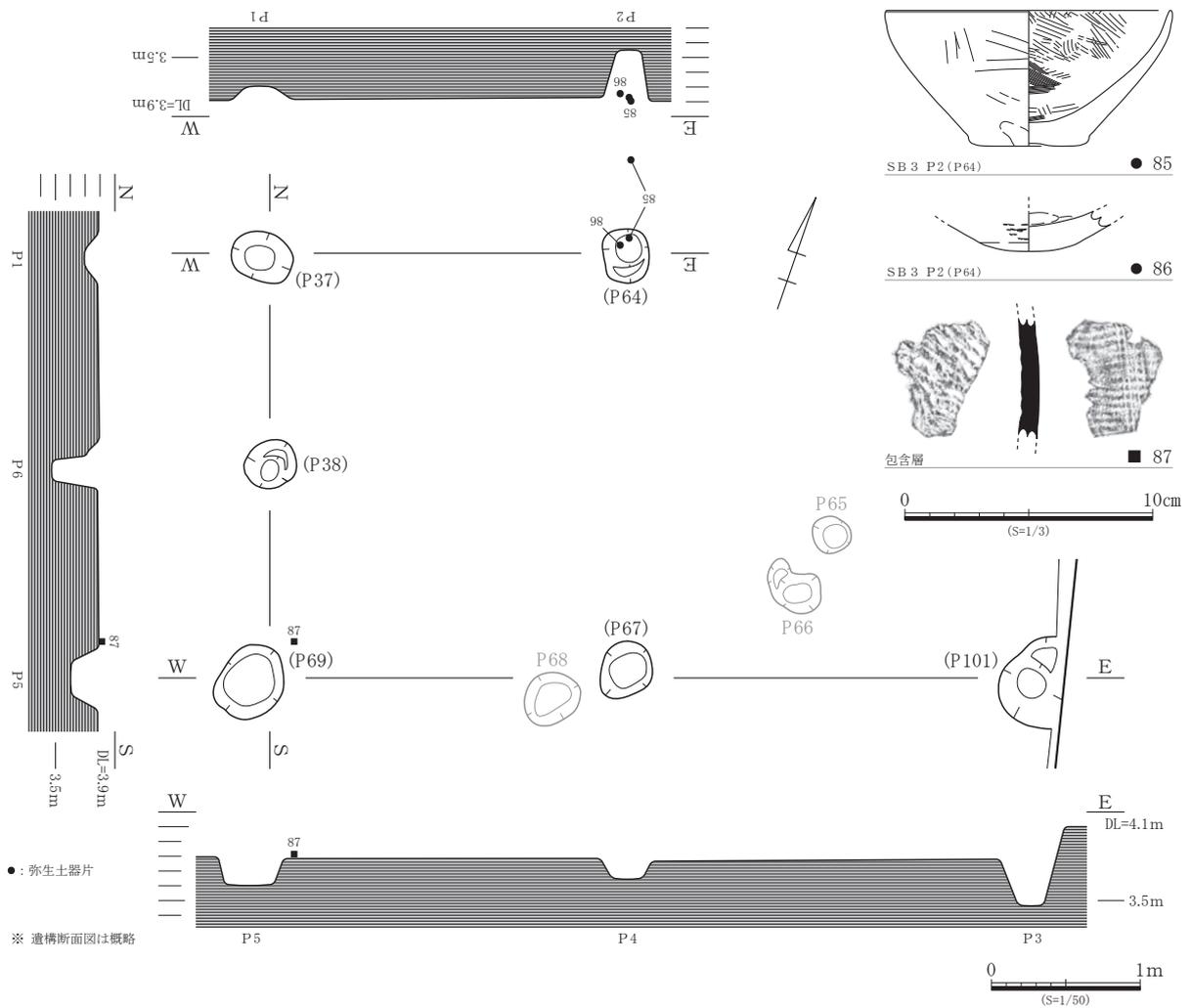


第31図 包含層出土遺物実測図1 (S=1/30)

SB 3(第32図)

調査Ⅰ区EⅥ/FⅥ・Ⅶ/GⅥグリッドに位置し、検出高は3.78m前後を測る。柱穴列の配置から、北東端に掘立柱建物を構成する柱穴の存在が想定される。東端が調査区外に展開している可能性も考慮されるため建物規模は不明であるが、現況で2間×2間(約5.1×2.9m：約15㎡)の平面を有する。柱間寸法は桁行で約2.5～2.7m、梁行で約1.4mを測り、棟(桁行)方向はN-71°-Eを指向している。柱穴群の平面形状は円形状を基本とし、径約35～50cm前後、深さ約10～35cm前後を遺存する。埋土は黒褐色シルトを基調とするが、半截による断面調査では柱痕跡等の有無は確認できなかった。

遺物は弥生後期後葉を示唆する土器片(85・86)を出土しており、P2の細片は86の未接合資料である。



第32図 SB 3 遺構平面図・断面図 (S=1/50) 出土遺物実測図 (S=1/3)

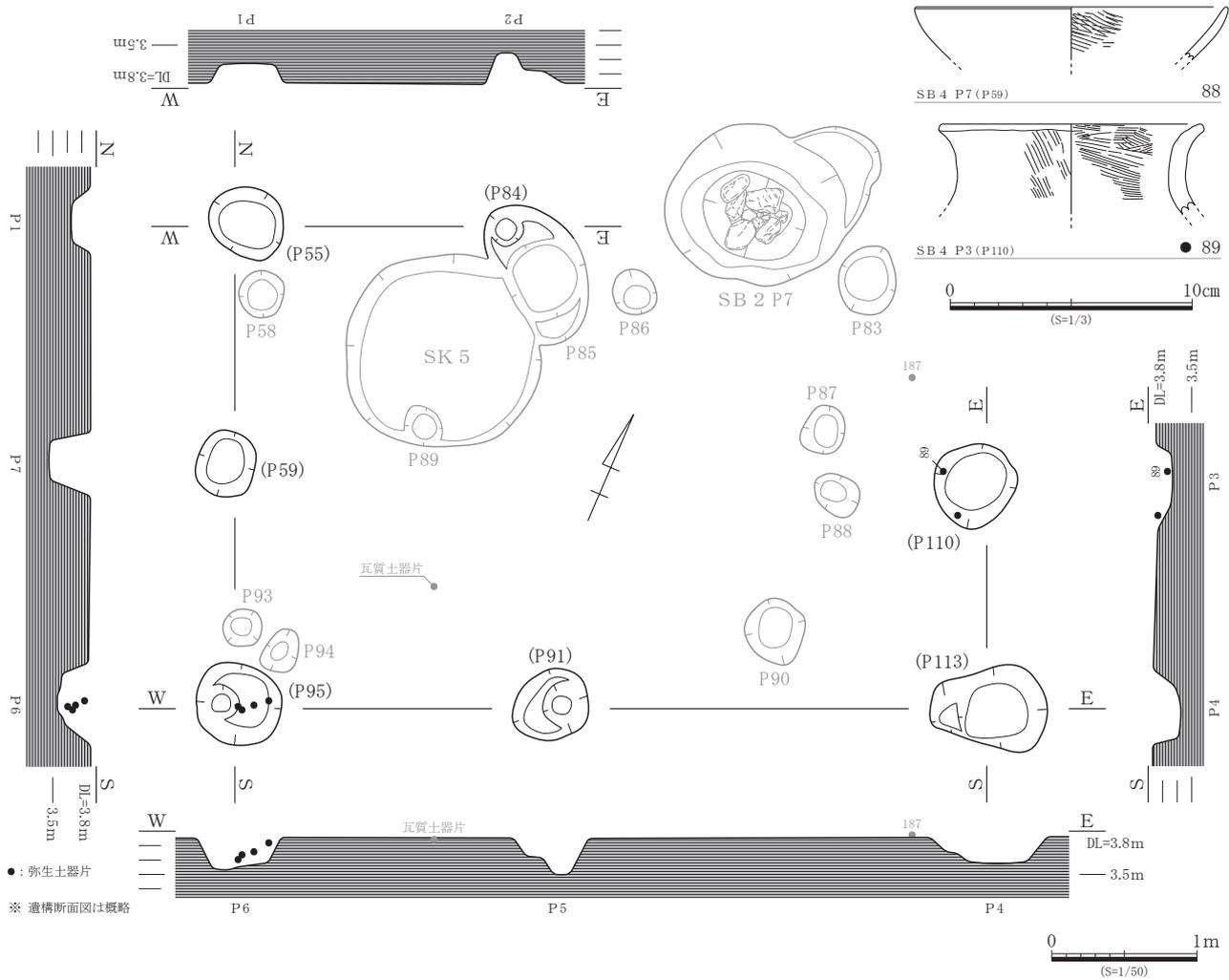
遺構番号	平面形状 (概形)	規模 (cm)			検出高 (m)	埋土 (土色・土性)	重複関係	遺構位置 (グリッド)	出土遺物 (破片点数)	備考
		長径	短径	深さ						
SB 3 P 1	楕円形状	42	33	10	3.788	黒褐色シルト	—	EⅥ-8	—	P 37
SB 3 P 2	垂円形状	37	31	35	3.779	黒褐色シルト	—	FⅥ-2	弥生土器 155点	P 64
SB 3 P 3	楕円形状	(54)	(38)	33	3.785	黒褐色シルト	—	GⅥ-10	—	P 101
SB 3 P 4	垂円形状	42	36	14	3.776	黒褐色シルト	—	FⅥ-15	弥生土器 4点	P 67
SB 3 P 5	垂円形状	52	43	20	3.791	黒褐色シルト	—	FⅦ-1	—	P 69
SB 3 P 6	円形状	36	33	32	3.786	黒褐色シルト	—	EⅥ-12 / FⅥ-9	—	P 38

第3表 SB 3 ピット状遺構(支柱穴)計測表

SB 4(第33図)

調査Ⅲ区E X / F X / G Xグリッドに位置し、検出高は3.76m前後を測る。柱穴列の配置から、北東端に掘立柱建物を構成する柱穴の存在が想定される。建物規模は2間×2間(約5.2×3.4m：約18㎡)と考えられ、柱間寸法は桁行で約1.8～3.0m、梁行で約1.6mを測る。棟(桁行)方向はN-67°-Eを指向している。柱穴群の平面形状は円形状を基本とし、径約25～60cm前後、深さ約15～30cm前後を遺存する。埋土は黒褐色シルトを基調とするが、半截による断面調査では柱痕跡等の有無は確認できなかった。

遺物は弥生後期後葉を示唆する土器片(88・89)を出土している。



第33図 SB 4 遺構平面図・断面図 (S=1/50) 出土遺物実測図 (S=1/3)

遺構番号	平面形状 (概形)	規模 (cm)			検出高 (m)	埋土 (土色・土性)	重複関係	遺構位置 (グリッド)	出土遺物 (破片点数)	備考
		長径	短径	深さ						
SB 4 P 1	亜円形状	54	47	14	3.761	褐色シルト	—	EX-4・8	—	P 55
SB 4 P 2	亜円形状	(32)	(55)	22	3.773	暗褐色シルト	P 85	FX-2	—	P 84
SB 4 P 3	円形状	60	57	15	3.746	黒褐色シルト	—	GX-1・2	弥生土器 22点	P 110
SB 4 P 4	方円形状	62	61	19	3.763	黒褐色シルト	Pit 状遺構	GX-6・10	弥生土器 43点	P 113
SB 4 P 5	亜円形状	54	47	26	3.748	黒褐色シルト	—	FX-11・15	弥生土器 4点	P 91
SB 4 P 6	円形状	59	56	26	3.761	黒褐色シルト	—	FX-13・14 / FXI-1・2	弥生土器 7点	P 95
SB 4 P 7	亜円形状	46	40	29	3.763	黒褐色シルト	—	EX-12 / FX-9	弥生土器 9点	P 59

第4表 SB 4 ピット状遺構(支柱穴)計測表

第3節 古代～中世期の遺構と遺物

本調査区において古代～中世期に成立する主な遺構は、集石遺構を含む土坑状遺構7基と、自然流路及び暗渠状遺構等(性格不明遺構)の可能性を有する溝状遺構6条を検出している。他に掘立柱建物跡2棟を確認できるが、何れの遺構も当該期の出土遺物が僅少で帰属時期を示唆する断定資料に欠いている。

本報告書で記載する「土師質土器」とは、轆轤(回転台)を用いて成形し、施釉せず低火度で酸化焰焼成された中世土器の一つと捉えているが、一瞥だけでは先行期と弁別が困難な遺物も含まれている。



第34図 古代～中世土器片等出土遺構 (S=1/250)

土坑状遺構(集石遺構)

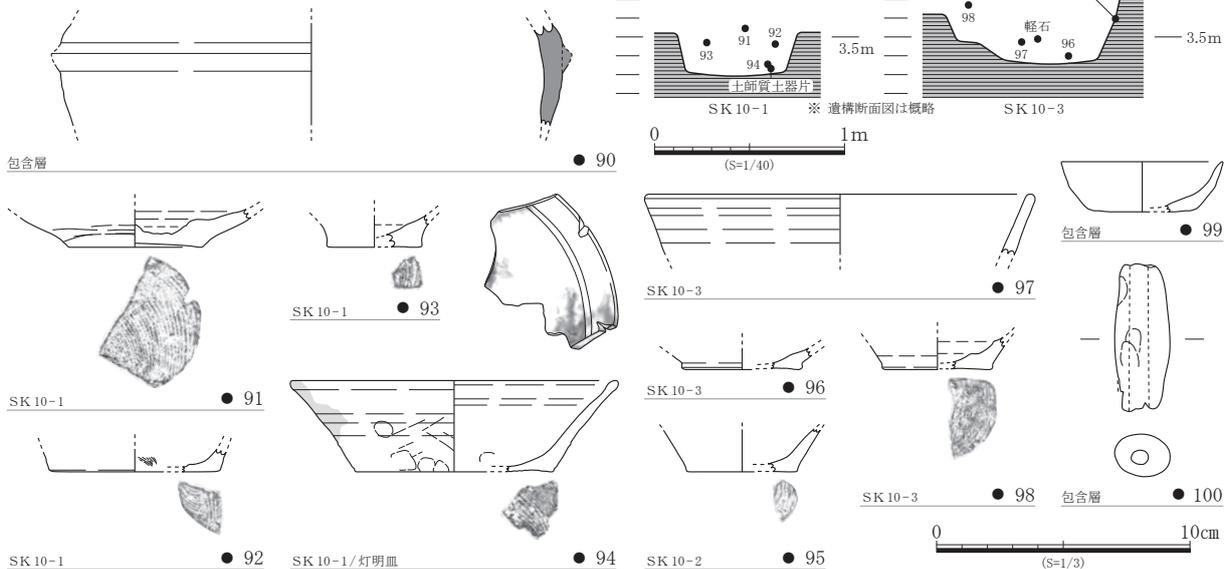
本調査区において古代～中世期を示唆する遺物を主体に出土するなど、当該期の可能性が考えられる土坑状遺構は、集石遺構も含めて7基を検出している。出土した土師質土器片は底部に回転糸切痕を有する遺物が大半を占めるが、多くは摩耗がみられる。検出した集石遺構の用途及び帰属時期については、性格不明遺構(SX 1)を含めて検討を要する。

SK 10(第35図)

調査Ⅱ区KⅣ-10・11・14・15グリッドに位置する。北端は調査区外へ続いており、未検出である。検出高は北端(SK 10-3)で3.72 m、南端(SK 10-1)で3.52 mを測り、同端でSD 2と先後関係を有している。平面形状は土坑状遺構群(SK 10-1・2・3)が重複関係で構成する有段状の不整形な溝状を呈しており、現状で長軸1.39m、短軸0.64～0.92mを測る。検出状態での長軸方向はN-40°-Eを示す。断面形態は箱形～逆梯形状を呈し、深さは23～36 cmを遺存している。埋土は褐灰色シルトを基調とする。

遺物は口縁・底部を含む土師質土器片約60点を出土しており、多くは摩耗がみられる。図示したものは同片の底部を中心とした91～98であり、94は断面の煤の付着具合などから灯明皿として再利用した可能性を有している。他に瓦質土器片1点と、周辺遺構に由来すると考えられる弥生土器片20点を出土している。

本遺構は調査Ⅱ区上面に展開する礫層下位より検出した中世期の土坑状遺構群であり、包含層中に当該期遺物(90・99・100)が埋存しているなど、遺構名は包括的な総称として付している。

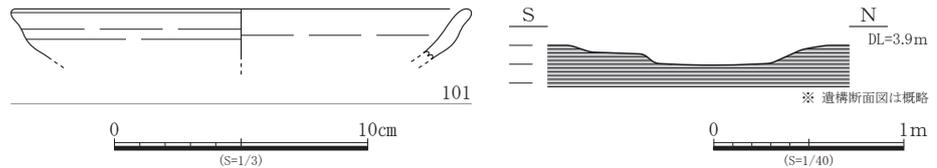


第35図 SK 10 遺構平面図・他 (S=1/40) 出土遺物実測図 (S=1/3)

SK 1(第36図)

調査Ⅰ区CⅨ-12・16グリッドに位置する。検出高は3.81mを測る。平面形状は不整楕円形状を呈し、長軸1.35m、短軸0.83mを測る。長軸方向はN-2°-Wを示す。断面形態は凹状を呈し、段部を有して深さは5~12cm前後を遺存している。埋土は灰褐色シルトを基調とする。

遺物は土師質土器片10点(101)と、弥生土器片1点を出土している。多くは細片であり、摩耗がみられる。



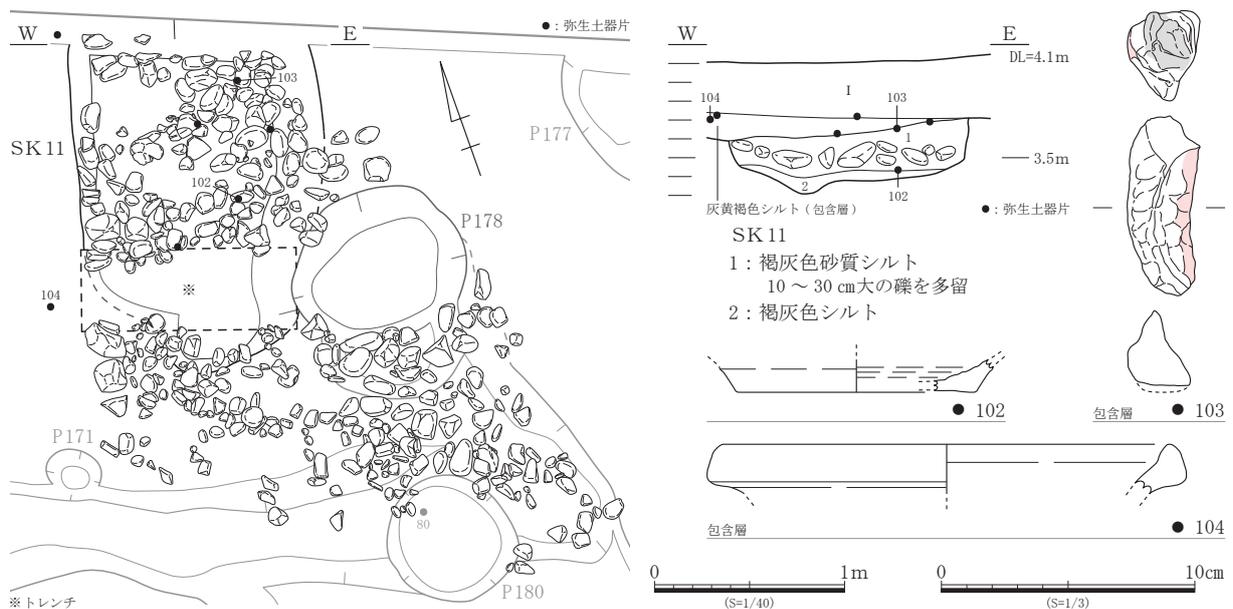
第36図 SK 1 遺構平面図・他 (S=1/40) 出土遺物実測図 (S=1/3)

SK 11(第37図)

調査Ⅱ区LⅣ-13/LⅤ-1・2・5・6グリッドに位置する。北端は調査区外へ続いており、未検出である。検出高は3.62mを測り、P178等と重複関係を有している。現状での検出規模は長軸1.89m、短軸1.32mの矩形形状を呈しており、検出状態での長軸方向はN-15°-Eを指向している。断面形態は箱形状を呈し、深さは28cm前後を遺存する。遺構からは粒径5~25cm大の粗細粒砂岩を主体とする円礫~垂円礫約300個を検出した。礫群の集積状況を把握するため小規模なトレンチを開削し、下位の確認を行った。礫群は周辺へも展開しているが、掘方西側への集積は認められず、意図的な埋積である可能性も考慮される。集石を充填する埋土は褐灰色砂質シルトを基調とする。図示したものは調査区北壁を測図した土層断面図であり、灰黄褐色シルトを基調とする遺物包含層が本遺構を被覆している状態が観察できる。

遺物は土師質土器片23点(102)と、周辺遺構に由来すると考えられる弥生土器片約40点(103)を出土しており、多くは摩耗がみられる。同片は包含層遺物が混在している可能性を含んでいる。

本遺構は礫群の検出状況などから暗渠(導水)状遺構的な側面を有している可能性が考えられ、SR 1及びSX 1との関連性が検討される。尚、P178等は排水後も一時湧水するなどの伏流が認められた。

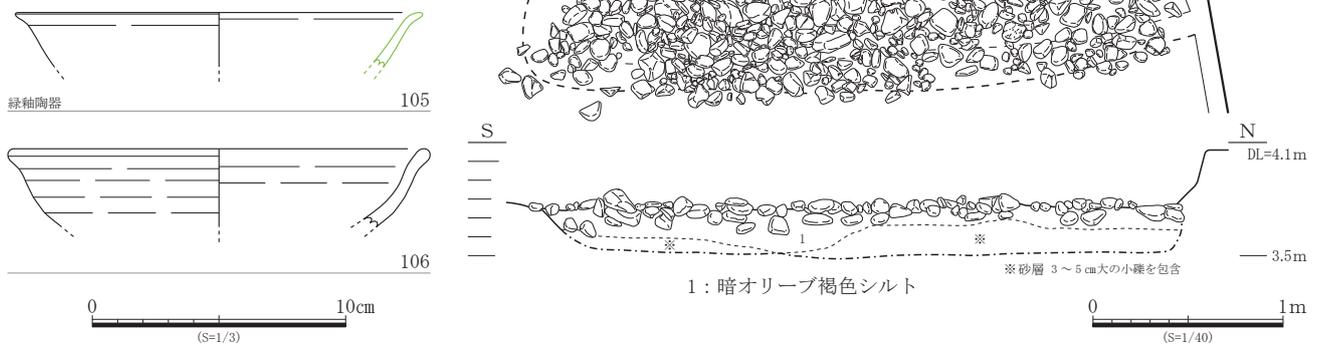


第37図 SK 11 遺構平面図(礫群検出状況)・他 (S=1/40) 出土遺物実測図 (S=1/3)

集石遺構 1(第 38 図)

調査Ⅰ区FⅣ・Vグリッドに位置する。北端は調査区外へ続いており、未検出である。検出高は約3.8m前後を測る。現状での検出規模は長軸3.65m、短軸1.60mの帯状を呈しており、検出状態での長軸方向はN-7°-Wを示している。遺構は粒径5～20cm大の粗細粒砂岩を主体とする円礫～垂円礫を中心に構成され、約670個を検出した。礫群は深さ12～22cm前後の凹状を呈した掘方を有して集積しており、標高約3.7～3.8m前後の水準で検出している。集石を充填する埋土は暗オリーブ褐色シルトを基調とする。

遺物は土師質土器片8点(106)を出土している。多くは細片であり、何れも摩耗がみられる。他に羽釜(摂津型)の鏝部と緑釉陶器片(105)を出土している。



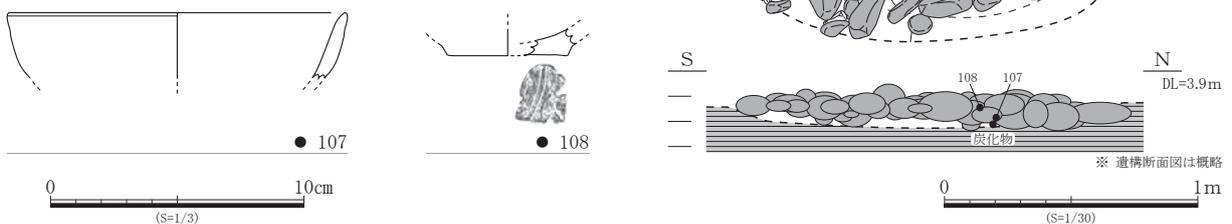
第 38 図 集石遺構 1 遺構平面図(礫群検出状況)・他(S=1/40) 出土遺物実測図(S=1/3)

集石遺構 3(第 39 図)

調査Ⅱ区KⅣ-14・15 / KⅤ-2・3グリッドに位置し、検出高は約3.8m前後を測る。検出規模は長軸1.55m、短軸1.08mの楕円形状を呈しており、長軸方向はN-23°-E前後を示している。遺構は粒径5～30cm大の粗細粒砂岩を主体とする円礫～垂円礫を中心に構成され、約120個を検出した。礫群は底面の傾斜変換点が不明瞭な深さ12cm前後の皿状を呈した掘方を有して集積しており、垂直範囲は標高約3.7～3.8m前後の水準で埋置されている。集石を充填する埋土は褐灰色シルトを基調とする。

遺物は土師質土器片7点(107・108)と、周辺遺構に由来すると考えられる弥生土器片32点を出土している。多くは細片であり、何れも摩耗がみられる。

本遺構はSK 10やP169に近接して所在しており(第48図)、出土遺物から中世期の平坦な敷石状を呈した配石遺構と考えられるが、近傍遺構との先後関係や機能(意図)等については不明である。



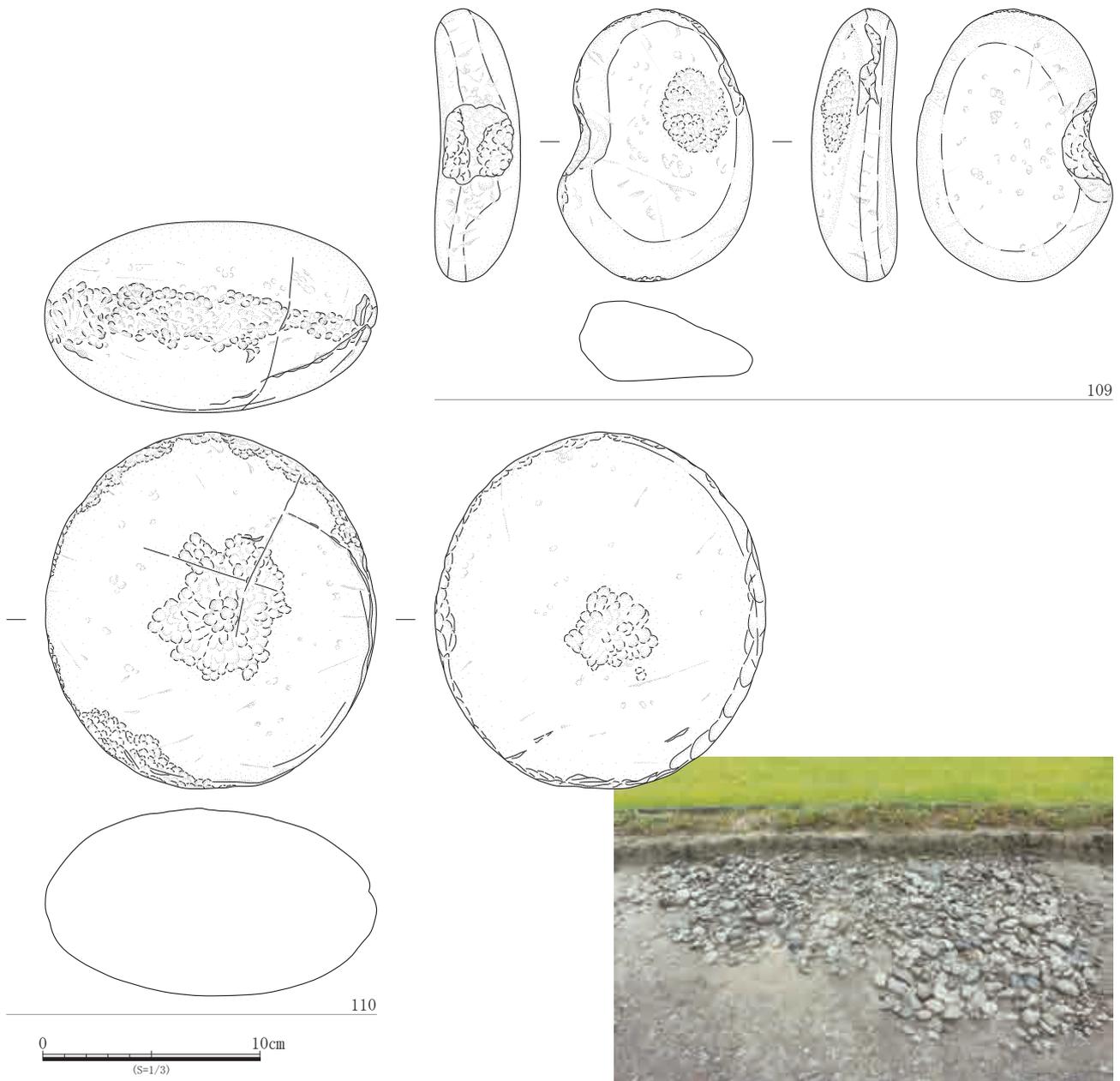
第 39 図 集石遺構 3 遺構平面図(礫群検出状況)・他(S=1/30) 出土遺物実測図(S=1/3)

集石遺構 2(第 40 図)

調査Ⅱ区FⅡ・Ⅲ/GⅡ・Ⅲ/HⅢグリッドに位置する。北端は調査区外へ続いており、未検出である。検出高は約 3.8m 前後を測る。現状での検出規模は長軸約 5.7m、短軸約 1.7～3.1m の不整形状を呈しており、主軸方向を捉え難い平面形状を有している。遺構は粒径 5～30 cm 大の粗細粒砂岩を主体とする多量の円礫～垂円礫を中心に構成されており、集石を充填する埋土は暗灰黄色シルトを基調とする。

遺物は須恵器片 1 点と土師質土器片 6 点の他、弥生土器片 9 点を出土(沈着)している。多くは細片であり、何れも摩耗がみられる。図示したのは使用痕が認められる礫石器(109・110)であり、他に数点を表採している。また被熱し煤が付着する 30 cm 程の割石を埋置しているなど、人為的な所産の礫を看取できる。

本遺構も調査Ⅱ区北端に展開している集石群を構成する意図的な礫集積状況の可能性が検討されるが、精査には至らず検出状況を把握するに留まる。



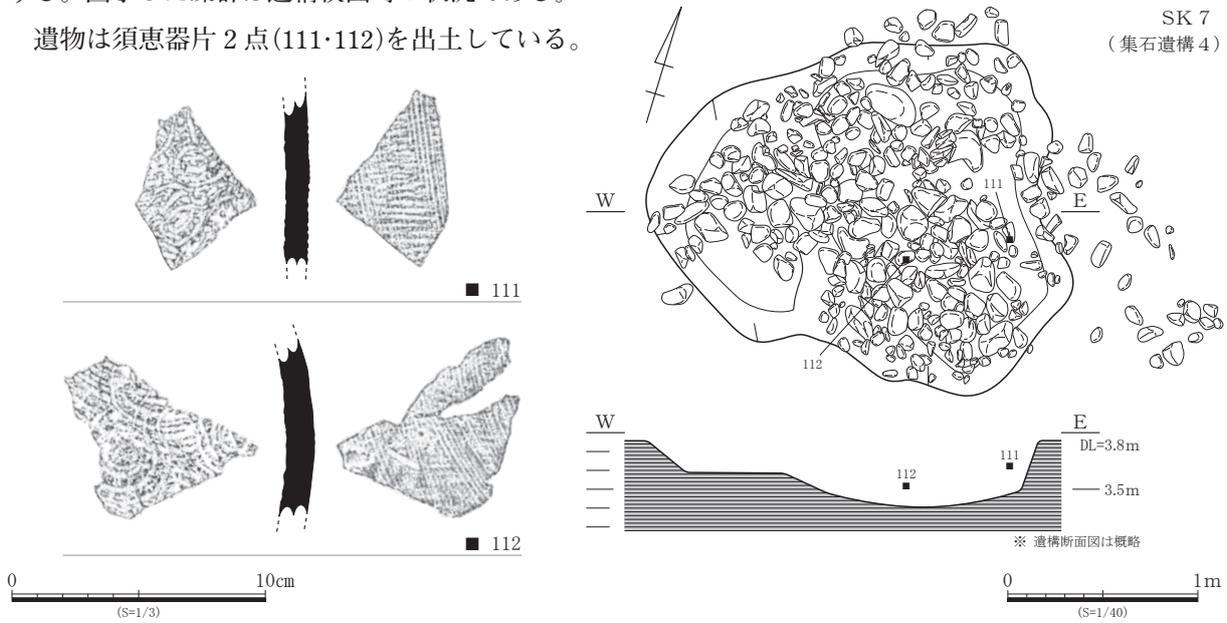
第 40 図 集石遺構 2 出土遺物実測図 (S=1/3)

集石遺構 2 礫群検出状況 (2017. 10. 20)

集石遺構 4/SK 7(第 41 図)

調査Ⅱ区HⅢ-9・10・11・13・14・15グリッドに位置し、検出高は3.74m前後を測る。検出規模は長軸約2.4m、短軸約1.9mの不整形状を呈しており、主軸方向を捉え難い平面形状を有している。遺構は主に礫群の集積で構成されており、段部を有する深さ17～37cm前後を測る掘方から、粒径5～30cm大の粗細粒砂岩を主体とする円礫～垂円礫約820個を検出した。集石を充填する埋土は暗灰黄色シルトを基調とする。図示した礫群は遺構検出時の状況である。

遺物は須恵器片2点(111・112)を出土している。



第 41 図 SK 7 遺構平面図（礫群検出状況）・他 (S=1/40) 出土遺物実測図 (S=1/3)

ピット状遺構(P)/掘立柱建物跡(SB)

本調査区において当該期の可能性を有するピット状遺構は約10個を抽出できるが、大半が単一埋土であり土層の類別化による遺構群の時期差は判然としない。主に土師質土器片等の出土を時期比定の依拠とするが、多くは細片であり摩耗もみられるなど、埋積状況には擾乱等の考慮を要すると思われる。

遺構の平面形状は概形で円形状を基本とする。断面形は立柱を意図した形状を呈するものが多いが、遺存深度が比較的小規模な遺構は地目由来する人為的要因により主体部を削失した可能性に加え、調査区を被覆する埋積土壌(遺物包含層)と当該期の遺構埋土との識別が判然とせず、下位層(扇状地性礫層)において検出に至った状況等が現因の一つとして考えられる。

建物状配置等の企画的な位置関係を有する柱穴列(掘立柱建物跡)は2棟を検出している。遺構の構成要素を平面的に抽出した後、柱痕跡の有無を確認するため数cmの段下げを行って精査したが、明瞭な痕跡は把握できなかった。柱穴半断面の記録確保を優先し、断面位置を調整して精査を行ったが、幾つかの柱穴は工程上の事由等により対応がなかった。

調査区に散在する多数のピット状遺構は柵列跡等を含む遺構群を構成していたと考えられるが、復元作業には変則的な平面形の可能性を考慮すると共に、柱穴群の属性や同時性にも留意する必要がある。

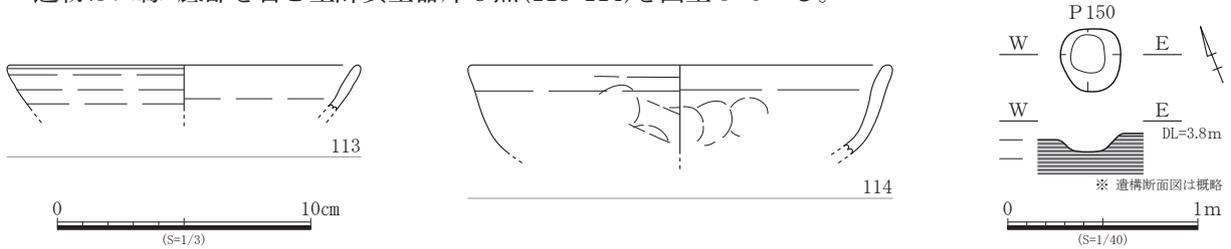


調査Ⅰ区 掘立柱建物跡 作業状況 (2017.6.12)

P 150(第 42 図)

調査Ⅲ区Ⅰ区-11・15グリッドに位置する。検出高は3.71mを測る。平面形状は円形状を呈し、長径33cm、短径32cm、深さ10cmを遺存している。埋土は褐色シルトを基調とする。

遺物は口縁・底部を含む土師質土器片8点(113・114)を出土している。



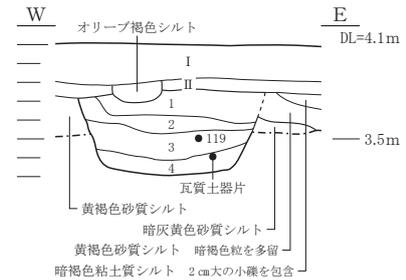
第 42 図 P 150 遺構平面図・他 (S=1/40) 出土遺物実測図 (S=1/3)

P 169(第 43 図)

調査Ⅱ区K V-3・4・7・8グリッドに位置する。検出高は3.64(3.75)mを測り、P 167・168と重複関係を有している。平面形状は方円形状を呈し、長径1.0m、短径0.96mを測る。断面形態は逆梯形状を呈し、深さは36cm前後を遺存するが、掘方上部は遺構検出時に若干削失した可能性を残している。埋土は暗褐色～黒褐色粘土質シルトを基調に分層される。図示したものは試掘調査時のTR 4北壁を加除修正した土層断面図である。Ⅰ・Ⅱ層は灌漑水田土壌由来の耕土層であり、基本層序(第5図)に準拠する。

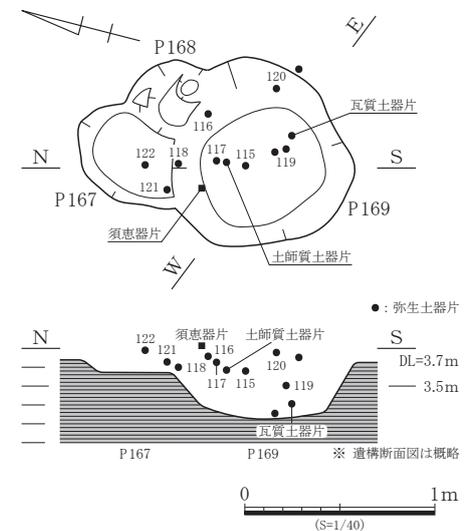
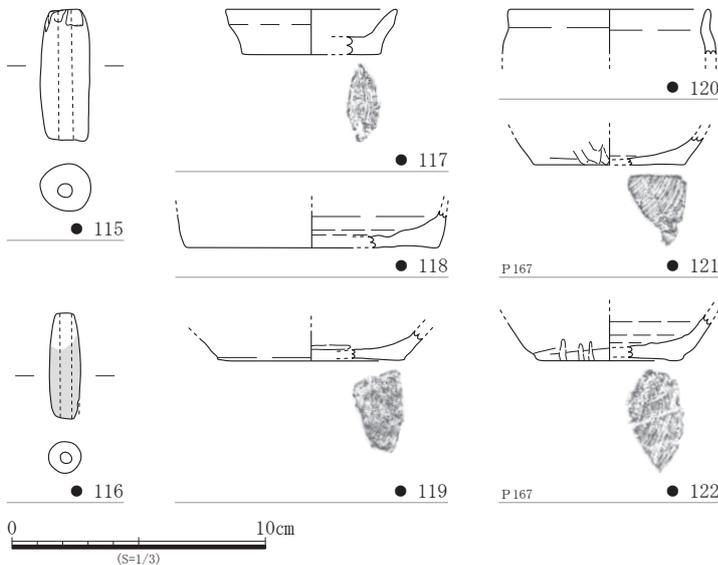
遺物は土錘を含む土師質土器片62点(115～120)と、須恵器片1点、瓦質土器片1点を出土している。多くは細片であり、摩耗がみられる。他に周辺遺構に由来すると考えられる弥生土器片約20点を出土している。

本遺構周辺の中世期遺構検出土壌は、越流によって供給された黄褐色砂質シルト(極細粗粒砂)の二次堆積物と考えられ、基底礫層との互層関係が看取できる。当該期の遺構の立地は沖積低地の氾濫原における旧河道の転流・変遷等に伴う地形環境の安定化と関連している可能性が推察される。



P 169

- 1: 暗褐色粘土質シルト 遺物・2cm大の小礫を包含
- 2: 暗褐色粘土質シルト 黄褐色シルトが混在
- 3: 黒褐色粘土質シルト
- 4: 暗オリーブ褐色粘土質シルト 炭化物を包含



第 43 図 P 169 遺構平面図(遺物出土状況)・土層断面図 (S=1/40) 出土遺物実測図 (S=1/3)

SB 1(第44・45図)

調査Ⅰ区BⅥ・Ⅶ/CⅤ・Ⅵ・Ⅶ/DⅤ・Ⅵ・Ⅶグリッドに位置し、検出高は3.78m前後を測る。建物規模は4間×3間(約8.3×4.8m)で、平面積は約40㎡を測る。柱間寸法は桁行で約1.8～2.4m、梁行で約1.1～1.9mを測り、棟(桁行)方向はN-83°-Eを指向している。柱穴群の平面形状は円形状～隅丸方形(不整形)を呈し、径約0.85～1.15m前後、深さ19～49cm前後を遺存する。また、底面から柱痕跡の可能性を憶見するピット状遺構を検出した掘方も存在している。柱掘方埋土は主に黒褐色シルトを基調とし、上位部から礫群を検出している柱穴も認められる。

遺物は弥生後期後葉を示唆する土器片(123～126)を多出するが、土師質土器片(129・130)や須恵器片(127・128)なども僅少なから出土しており、当該期を主要な帰属時期とする掘立柱建物跡の可能性を勘案して本節に所載している。

SB 1 P1(第44図)

調査Ⅰ区BⅥ-1・2・5・6グリッドに位置する。検出高は3.79mを測る。平面形状は不整形な隅丸方形を呈し、長径1.15m、短径1.04mを測る。断面形態は箱型状を呈し、深さは33cm前後を遺存している。柱掘方埋土は黒褐色シルトを基調とする。

遺物は周辺遺構に由来すると考えられる弥生土器片26点を出土しており、多くは摩耗がみられる。

SB 1 P2(第44図)

調査Ⅰ区BⅥ-3・4グリッドに位置する。検出高は3.80mを測る。平面形状は楕円形状を呈し、長径1.29m、短径1.01mを測る。断面形態は逆梯形状を呈し、深さは49cm前後を遺存する。底面から長径32cm、短径27cm、深さ11cmを測るピット状遺構を検出した。柱掘方埋土は黒褐色シルトを基調とする。

遺物は検出面から須恵器片1点(127)と、周辺遺構に由来すると考えられる弥生土器片23点を出土している。多くは細片であり、摩耗がみられる。

SB 1 P3(第44図)

調査Ⅰ区CⅤ-13・14/CⅥ-1・2グリッドに位置する。検出高は3.77mを測る。平面形状は隅丸方形を呈し、長径0.97m、短径0.95mを測る。断面形態は箱型状を呈し、深さは38cm前後を遺存している。底面から長径42cm、短径36cm、深さ14cmを測るピット状遺構を検出した。柱掘方埋土は暗褐色シルト～黒褐色シルトを基調とする。

遺物は須恵器片1点(中位部:128)と弥生土器片27点(上位部1点/中位部11点:125/下位部4点/最下位部3点/ピット状遺構3点/不明5点:124)を出土している。多くは細片であり、摩耗がみられる。

SB 1 P4(第45図)

調査Ⅰ区CⅤ-15・16/CⅥ-3・4グリッドに位置する。検出高は3.78mを測る。平面形状は垂円形状を呈し、長径1.01m、短径0.89mを測る。断面形態は箱型状を呈し、深さは39cm前後を遺存している。底面から長径66cm、短径41cm、深さ6cmを測るピット状遺構を検出した。柱掘方埋土は黒褐色～暗褐色シルトを基調とする。

遺物は弥生土器片36点(上位部19点/中位部5点/下位部12点)を出土しており、多くは摩耗がみられる。

SB 1 P5(第 45 図)

調査Ⅰ区DⅤ-13・14/DⅥ-1・2グリッドに位置する。検出高は3.79mを測る。平面形状は不整形な隅丸形状を呈し、長径1.11m、短径1.06mを測る。断面形態は凹状を呈し、深さは27cm前後を遺存している。底面からピット状遺構を2個検出している。北側で長径29cm、短径25cm、深さ23cm、南側で長径32cm、短径26cm、深さ22cmを測るが、本遺構との関連性については検討を要する。柱掘方埋土は褐色シルト～黒褐色シルトを基調とする。

遺物は弥生土器片11点(上位部6点/下位部5点)を出土している。多くは細片であり、摩耗がみられる。

SB 1 P6(第 45 図)

調査Ⅰ区DⅥ-6・7・10グリッドに位置する。検出高は3.80mを測る。平面形状は楕円形状を呈し、長径1.12m、短径0.91mを測る。断面形態は箱型状を呈し、深さは29cm前後を遺存している。底面から長径39cm、短径33cm、深さ14cmを測るピット状遺構を検出した。柱掘方埋土は黒褐色シルトを基調とし、上位部から粒径20cm未満の粗細粒砂岩を主体とする礫群を検出した。

遺物は土師質土器片1点(下位部)と、周辺遺構に由来すると考えられる弥生土器片20点(上位部15点/下位部5点)を出土している。多くは細片であり、摩耗がみられる。

SB 1 P7(第 45 図)

調査Ⅰ区DⅥ-10・11・14・15グリッドに位置する。検出高は3.78mを測る。平面形状は不整形な隅丸形状を呈し、長径0.94m、短径0.82mを測る。断面形態は凹状を呈し、深さは23cm前後を遺存している。柱掘方埋土は黒褐色シルトを基調とする。

遺物は土師質土器片1点(上位部)と、周辺遺構に由来すると考えられる弥生土器片3点(上位部2点/最下位部1点)を出土している。何れも細片であり、摩耗がみられる。

SB 1 P8(第 45 図)

調査Ⅰ区DⅦ-2・3・6・7グリッドに位置する。検出高は3.80mを測る。平面形状は不整形な隅丸形状を呈し、長径0.91m、短径0.90mを測る。断面形態は箱型状を呈し、深さは37cm前後を遺存している。底面から長径27cm、短径25cm、深さ18cmを測るピット状遺構を検出した。柱掘方埋土は黒褐色シルトを基調とする。

遺物は周辺遺構に由来すると考えられる弥生土器片17点(上位部8点/中位部6点/下位部2点/最下位部1点)を出土している。多くは細片であり、摩耗がみられる。

SB 1 P9(第 45 図)

調査Ⅰ区CⅦ-4・8/DⅦ-1・5グリッドに位置する。検出高は3.78mを測る。平面形状は不整形な隅丸形状を呈し、長径1.00m、短径0.92mを測る。断面形態は箱型状を呈し、深さは46cm前後を遺存している。底面から長径25cm、短径21cm、深さ17cmを測るピット状遺構を検出した。柱掘方埋土は黒褐色シルトを基調とする。

遺物は周辺遺構に由来すると考えられる弥生土器片38点(上位部23点/下位部10点/最下位部5点)を出土している。多くは細片であり、摩耗がみられる。

SB 1 P10(第44図)

調査Ⅰ区CⅦ-6・7グリッドに位置する。検出高は3.79mを測る。平面形状は垂円形状を呈し、長径1.13m、短径0.98mを測る。断面形態は箱型状を呈し、深さは42cm前後を遺存している。柱掘方埋土は黒褐色シルトを基調とし、上位部から粒径5～30cm大の粗細粒砂岩を主体とする礫群を検出した。

遺物は土師質土器片2点(下位部)と、周辺遺構に由来すると考えられる弥生土器片6点(上位部5点：126/最下位部1点)を出土している。多くは細片であり、摩耗がみられる。

SB 1 P11(第44図)

調査Ⅰ区BⅦ-7・8・11・12グリッドに位置する。検出高は3.78mを測る。平面形状は楕円形状を呈し、長径1.22m、短径1.03mを測る。断面形態は逆梯形状を呈し、深さは44cm前後を遺存している。柱掘方埋土は黒褐色シルトを基調とする。

遺物は土師質土器片2点と、周辺遺構に由来すると考えられる弥生土器片46点を出土している。多くは細片であり、摩耗がみられる。

SB 1 P12(第44図)

調査Ⅰ区BⅦ-5・6・9・10グリッドに位置する。検出高は3.76mを測る。平面形状は円形状を呈し、長径1.16m、短径1.10mを測る。断面形態は逆梯形状を呈し、深さは39cm前後を遺存している。柱掘方埋土は黒褐色シルトを基調とする。

遺物は土師質土器片4点と、周辺遺構に由来すると考えられる弥生土器片114点(123)を出土している。多くは細片であり、摩耗がみられる。図示した土師質土器片(129・130)は同一個体の可能性を有している。

SB 1 P13(第44図)

調査Ⅰ区BⅥ-13・14/BⅦ-1・2グリッドに位置する。検出高は3.76mを測る。平面形状は楕円形状を呈し、長径0.97m、短径0.75mを測る。断面形態は凹状を呈し、深さは27cm前後を遺存している。柱掘方埋土は黒褐色シルトを基調とする。

遺物は周辺遺構に由来すると考えられる弥生土器片17点を出土している。多くは細片であり、摩耗がみられる。

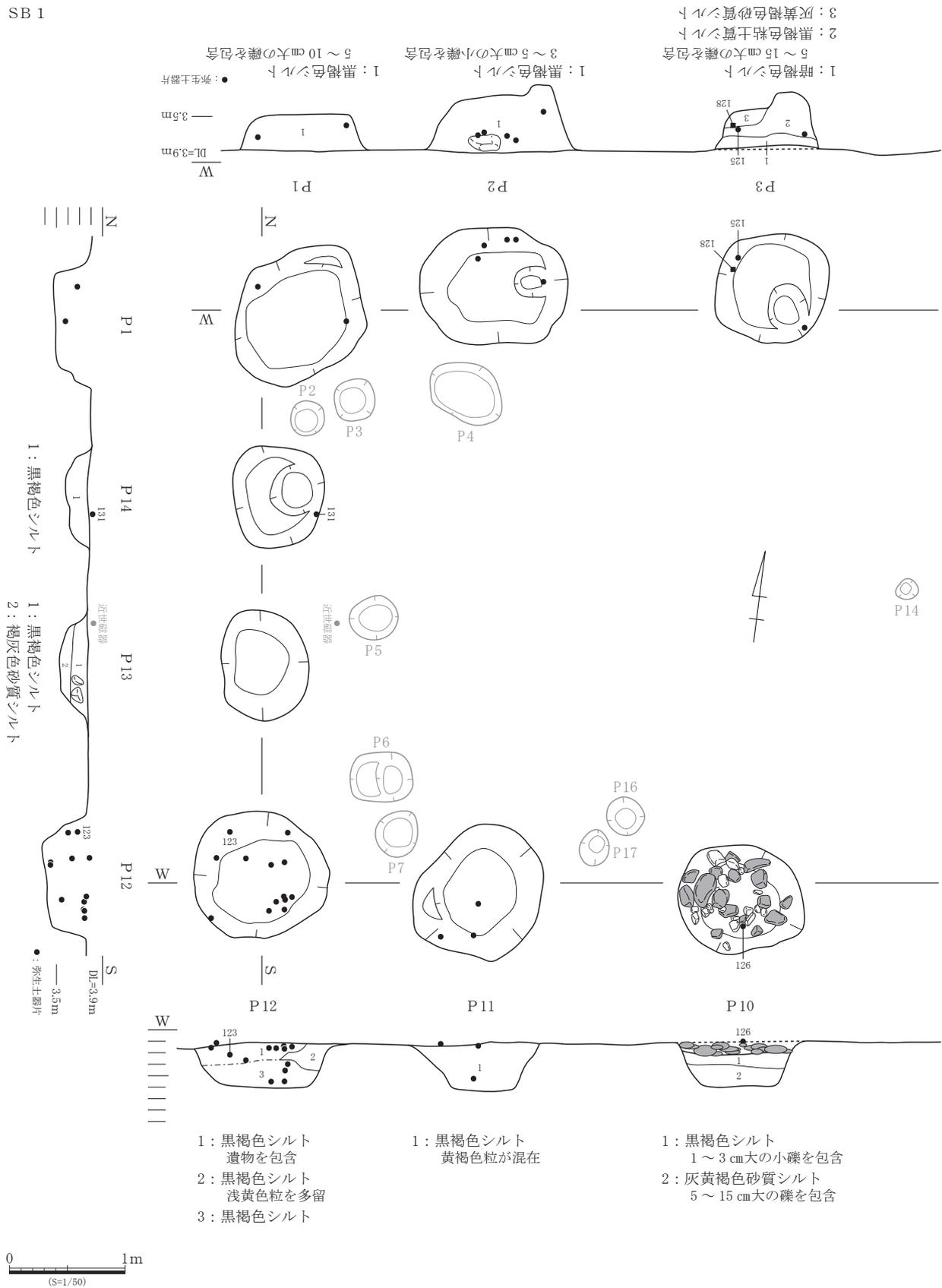
SB 1 P14(第44図)

調査Ⅰ区BⅥ-9・10グリッドに位置する。検出高は3.77mを測る。平面形状は不整形な隅丸方形状を呈し、長径0.90m、短径0.80mを測る。断面形態は凹状を呈し、深さは19cm前後を遺存している。底面から長径49cm、短径43cm、深さ4cmを測るピット状遺構を検出した。柱掘方埋土は黒褐色シルトを基調とする。

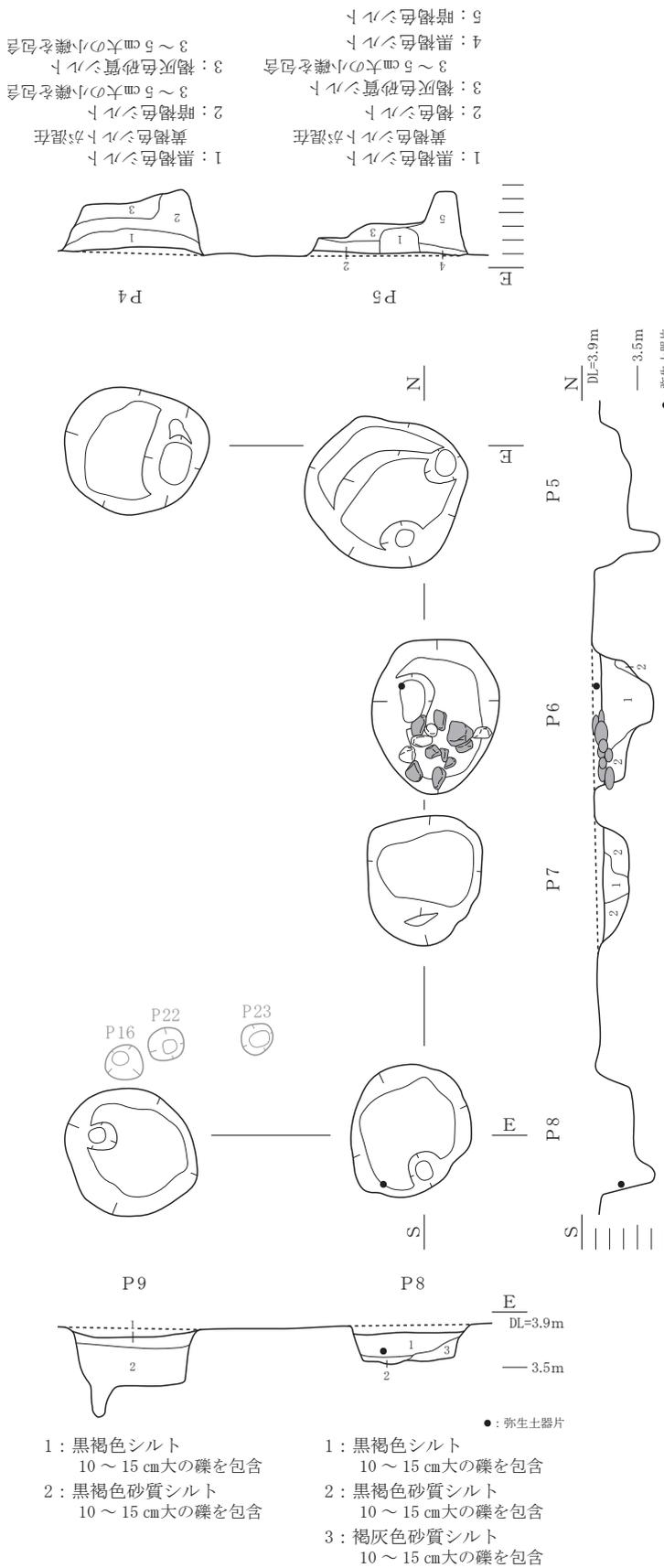
遺物は遺構検出面(包含層)から青磁片(131)を出土している。

本遺構は調査Ⅰ区西北端から検出した掘立柱建物跡であり、平面構造を確認するため西側に調査範囲の拡張を行い、建物規模の把握を試みた。調査の結果、建物跡の西半と試掘調査時におけるTR 6の検出遺構の延伸部と考えられる溝状遺構(SD 1)を検出するなど、予期の成果を収めた。

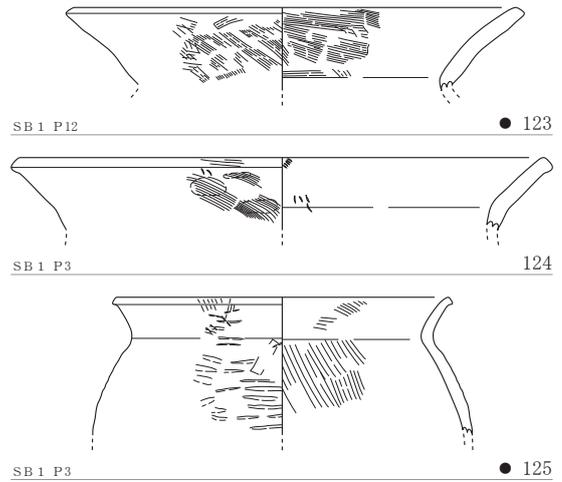
SB 1



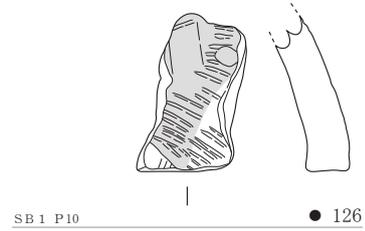
第 44 図 SB 1 遺構平面図・土層断面図 1 (S=1/50)



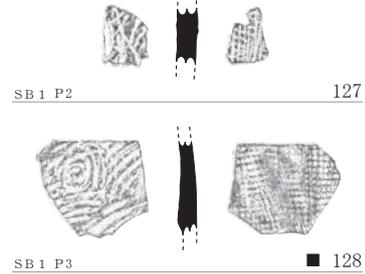
甕形土器



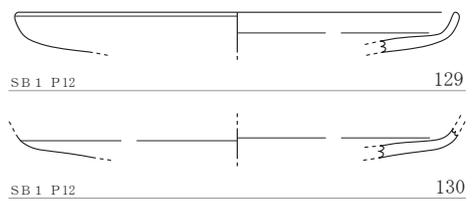
支脚形土器



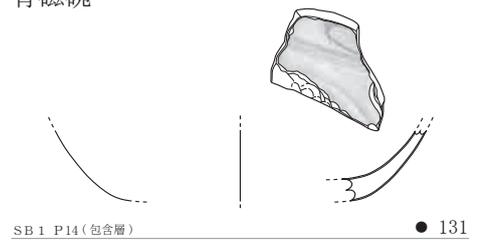
須恵器



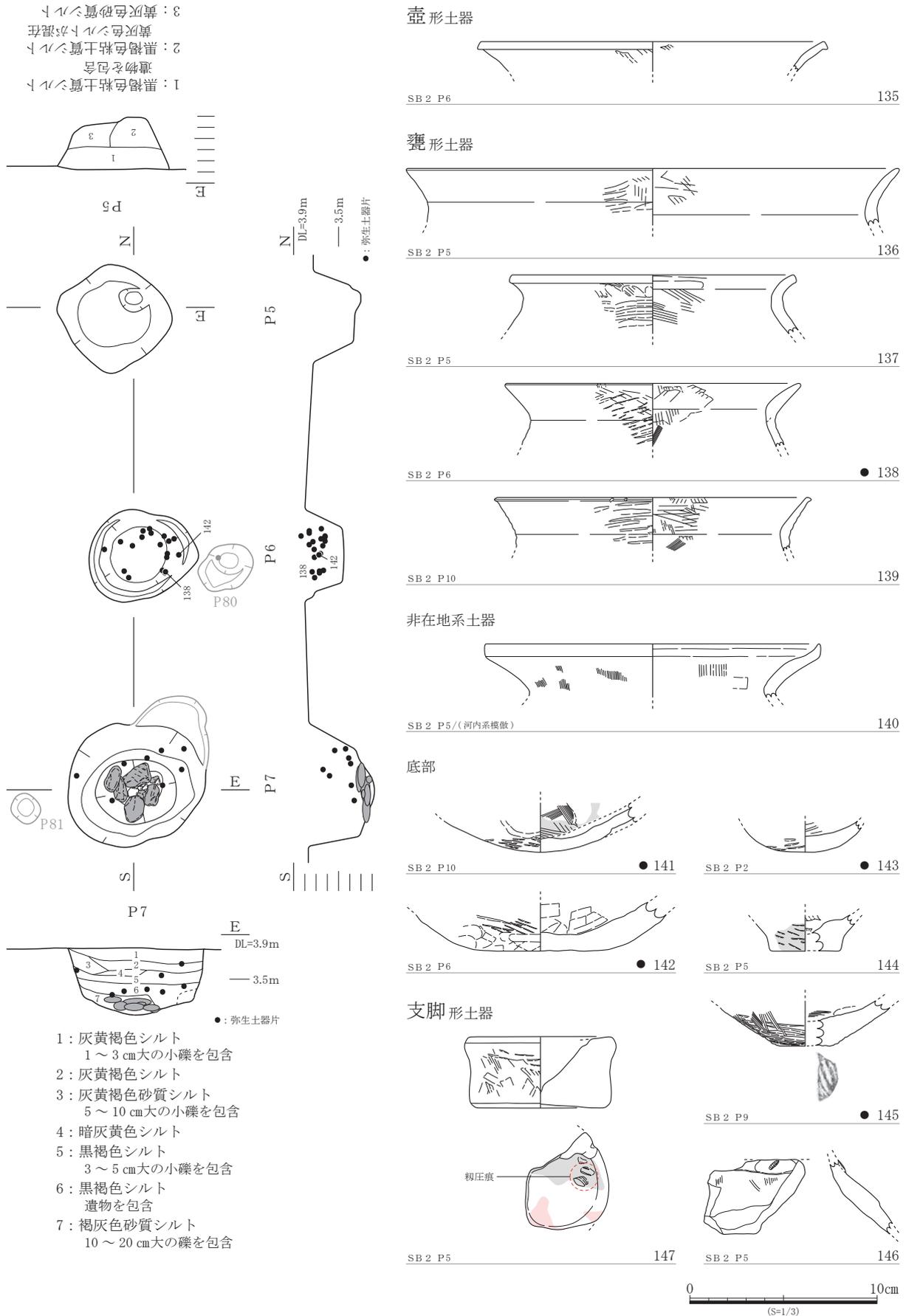
土師質土器



青磁碗



第45図 SB 1 遺構平面図・土層断面図2 (S=1/50) 出土遺物実測図 (S=1/3)



SB 2(第 46・47 図)

調査Ⅰ・Ⅲ区DⅧ・Ⅸ/EⅧ・Ⅸ/FⅧ・Ⅸグリッドに位置し、検出高は3.79m前後を測る。建物規模は4間×2間(約7.5×4.2m)で、平面積は約32㎡を測る。柱間寸法は桁行で約1.9m、梁行で約2.1mを測り、棟(桁行)方向はN-84.5°-Wを指向している。柱穴群の平面形状は円形状～不整形形状を呈し、径約1.0m前後、深さ約23～61cm前後を遺存する。柱掘方埋土は黒褐色シルト～灰黄褐色シルトを基調とし、底面からピット状遺構を検出するものや、下位部から礫群を根石状に配石する柱穴などが認められる。

遺物は弥生後期後葉を示唆する土器片(135～147)を多出するが、土師質土器片(133)や須恵器片(134)なども僅少なから出土しており、当該期を主要な帰属時期とする掘立柱建物跡の可能性を勘案して本節に所載している。

SB 2 P1(第 46 図)

調査Ⅰ区DⅧ-12グリッドに位置する。検出高は3.76mを測る。平面形状は楕円形状を呈し、長径1.14m、短径0.82mを測る。断面形態は凹状を呈し、深さは24cm前後を遺存する。底面から長径65cm、短径50cm、深さ21cmを測るピット状遺構を検出した。柱掘方埋土は黒褐色シルトを基調とする。

遺物は土師質土器片4点(上位部2点/下位部2点)と、周辺遺構に由来すると考えられる弥生土器片51点(上位部42点/下位部5点/ピット状遺構4点)を出土している。多くは細片であり、摩耗がみられる。

SB 2 P2(第 46 図)

調査Ⅰ区EⅧ-10・14グリッドに位置する。検出高は3.80mを測る。平面形状は円形状を呈し、長・短径共に1.1m前後を測る。断面形態は凹状を呈し、深さは23cm前後を遺存する。底面から長径40cm、短径34cm、深さ約40cmを測るピット状遺構を検出した。柱掘方埋土は暗褐色シルトを基調とする。

遺物は口縁・底部を含む土師質土器片3点(上位部1点/下位部1点/最下位部1点)を出土しており、最下位部から出土した底部には回転糸切痕が認められる。また弥生土器片42点(上位部21点/中位部4点/下位部13点:143/最下位部1点/ピット状遺構3点)を出土している。多くは細片であり、摩耗がみられる。

SB 2 P3(第 46 図)

調査Ⅰ区EⅧ-12・16グリッドに位置する。検出高は3.82mを測る。平面形状は楕円形状を呈し、長径1.21m、短径0.94mを測る。断面形状は逆梯形状を呈し、深さは38cm前後を遺存している。柱掘方埋土は黒褐色シルトを基調とする。

遺物は須恵器片1点(上位部)と土師質土器片6点(最下位部)の他に、弥生土器片34点(上位部17点/下位部1点/最下位部16点)を出土している。多くは細片であり、摩耗がみられる。

SB 2 P4(第 46 図)

調査Ⅰ区FⅧ-9・10・13・14グリッドに位置する。検出高は3.50mを測る。平面形状は現況で不整形形状を呈し、長径48cm、短径40cmを測る。断面形態は段部を有する逆梯形状を呈し、深さは24cm前後を遺存している。柱掘方埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とする。

遺物は底部を含む土師質土器片3点と、周辺遺構に由来すると考えられる弥生土器片16点を出土している。多くは細片であり、摩耗がみられる。

SB 2 P5(第47図)

調査Ⅰ区FⅧ-11・12・15・16グリッドに位置する。検出高は3.65mを測る。平面形状は隅丸方形状を呈し、長・短径共に0.87mを測る。断面形状は箱型状を呈し、深さは37cm前後を遺存している。底面から径23cm、深さ5cmを測るピット状遺構を検出した。柱掘方埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とし、下位部から径約30cm前後を測る角礫を根石状(礎板状)に埋置していた。

遺物は土師質土器片約90点と、周辺遺構に由来すると考えられる弥生土器片115点(136・137・140・144・146・147)を出土している。多くは細片であり、摩耗がみられる。

※本遺構とSB 2 P4は試掘調査時におけるTR 1の検出(既掘)遺構である。

SB 2 P6(第47図)

調査Ⅰ・Ⅲ区FⅨ-3・7・8グリッドに位置する。検出高は3.80mを測る。平面形状は垂円形状を呈し、長径0.85m、短径0.81mを測る。断面形態は箱型状を呈し、深さは36cm前後を遺存している。柱掘方埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とする。

遺物は土師質土器片3点(中位部1点/不明2点)と弥生土器片132点(検出面1点/上位部16点:138/中位部70点:142/下位部7点/不明38点:135)を出土している。多くは細片であり、摩耗がみられる。

SB 2 P7(第47図)

調査Ⅲ区FⅨ-11・12・15・16グリッドに位置する。検出高は3.77mを測る。平面形状は垂円形状を呈し、長径1.24m、短径1.15mを測る。断面形態は箱型状を呈し、深さは60cm前後を遺存している。柱掘方埋土は灰黄褐色シルト(上層)及び黒褐色シルト(下層)を基調とし、最下位部から粒径10～25cm大の粗細粒砂岩を主体とする礫群を根石状に検出した。

遺物は土師質土器片1点(不明)と、周辺遺構に由来すると考えられる弥生土器片123点(上位部17点/中位部9点/下位部80点/最下位部2点/不明15点)を出土しており、多くは摩耗がみられる。

SB 2 P8(第46図)

調査Ⅲ区FⅨ-9・10・13・14グリッドに位置する。検出高は3.76mを測る。平面形状は不整形な隅丸方形状を呈し、長径1.14m、短径1.02mを測る。断面形態は箱型状を呈し、深さは57cm前後を遺存する。柱掘方埋土は灰黄褐色(褐灰色)砂質シルトと黒褐色シルトを互層に埋積している。

遺物は土師質土器片3点(検出面2点/下位部1点)と弥生土器片74点(検出面5点/上位部27点/中位部23点/下位部13点/不明6点)を出土している。多くは細片であり、摩耗がみられる。

SB 2 P9(第46図)

調査Ⅲ区EⅨ-11・12・15・16グリッドに位置する。検出高は3.77mを測り、P51と重複関係を有する。平面形状は楕円形状を呈し、長径1.30m、短径1.01mを測る。断面形態は逆梯形状を呈し、深さは58cm前後を遺存している。柱掘方埋土は褐灰色砂質シルト及び黒褐色シルトを基調とし、最下位部から粒径5～20cm未満の粗細粒砂岩を主体とする礫群を根石状(割石)に検出した。

遺物は須恵器片2点(検出面:134)と、周辺遺構に由来すると考えられる弥生土器片82点(上位部9点/中位部43点/下位部10点:145/不明20点)を出土している。多くは細片であり、摩耗がみられる。

SB 2 P 10(第 46 図)

調査Ⅰ・Ⅲ区EⅨ-9・10・13・14グリッドに位置する。検出高は3.78mを測る。平面形状は隅丸方形状を呈し、長径1.14m、短径0.99mを測る。断面形態は逆梯形状を呈し、深さは61cm前後を遺存する。底面から径30cm、深さ3cmを測るピット状遺構を検出した。柱掘方埋土は黒褐色シルトと褐灰色(灰黄褐色)砂質シルトを互層に埋積し、下位部から粒径5～25cm未満の粗細粒砂岩を主体とする礫群を検出した。

遺物は土師質土器片6点(上位部6点:133)と、周辺遺構に由来すると考えられる弥生土器片195点(上位部23点/中位部23点:141/下位部93点:139/最下位部9点/ピット状遺構4点/不明43点)を出土している。多くは細片であり、摩耗がみられる。

SB 2 P 11(第 46 図)

調査Ⅰ区DⅨ-11・12・15・16グリッドに位置する。検出高は3.82mを測る。平面形状は不整形な楕円形状を呈し、長径1.19m、短径0.92mを測る。断面形態は逆梯形状を呈し、深さは40cm前後を遺存する。底面から長径49cm、短径40cm、深さ14cmを測るピット状遺構を検出した。柱掘方埋土は暗褐色(黒褐色)シルト及び褐灰色砂質シルトを基調とする。

遺物はピット状遺構から土師質土器片1点と、周辺遺構に由来すると考えられる弥生土器片31点を出土している。多くは細片であり、摩耗がみられる。

SB 2 P 12(第 46 図)

調査Ⅰ区DⅨ-3・4グリッドに位置する。検出高は3.80mを測り、P26と重複関係を有している。平面形状は垂円形状を呈し、長径0.95m、短径0.85mを測る。断面形態は逆梯形状を呈し、深さは29cm前後を遺存している。柱掘方埋土は黒褐色シルトを基調とする。

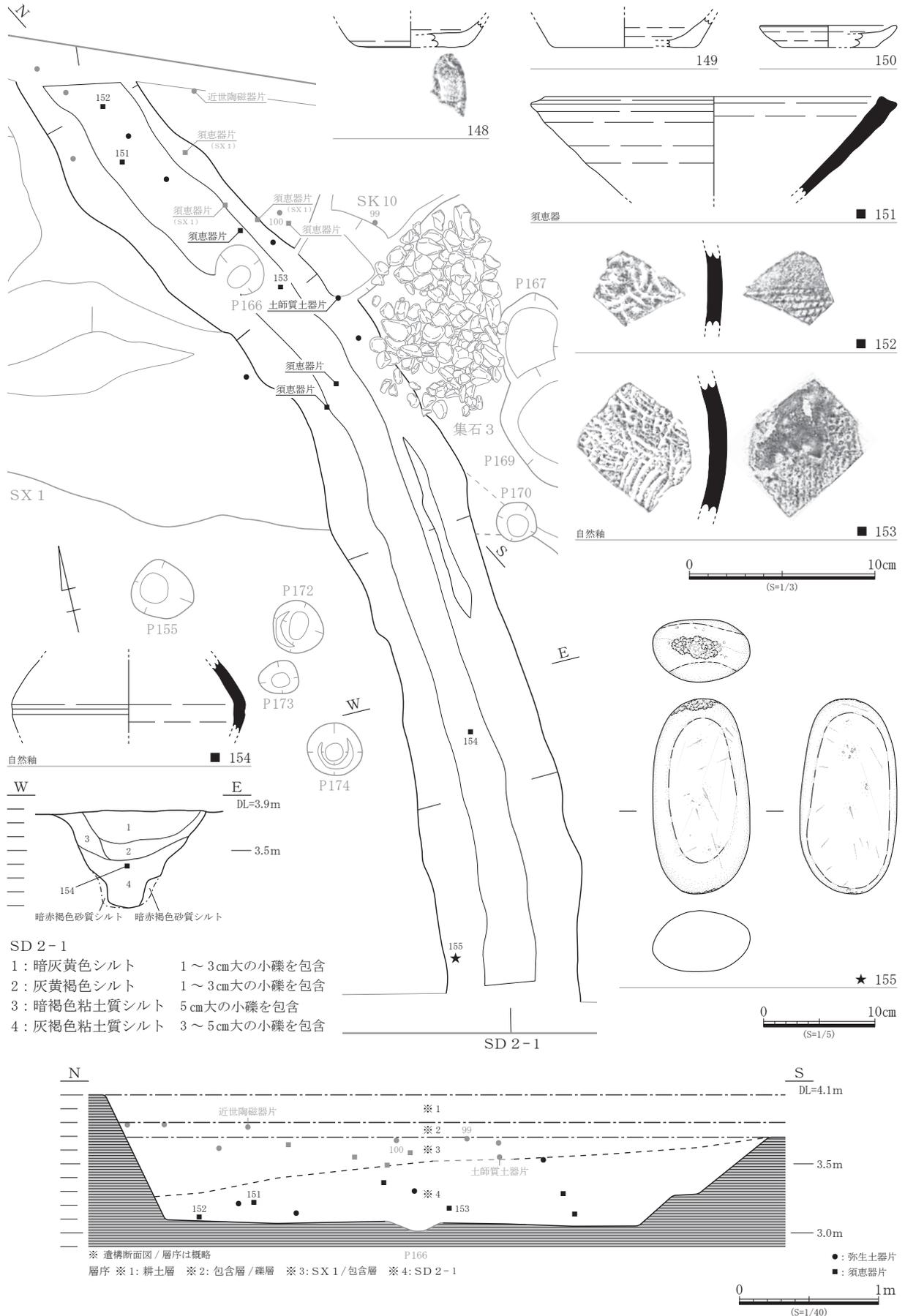
遺物は土師質土器片2点と弥生土器片1点を出土している。何れも細片であり、摩耗がみられる。

溝状遺構(SD)/自然流路(SR)

SD 2-1(第 48 図)

調査Ⅱ区JⅣ/KⅣ・V・Ⅵグリッドに位置する。両端は調査区外に延伸して未検出であるが、南端は試掘調査時におけるTR5の検出遺構(第9図)及びSD2-2(Ⅲ区)に続く可能性を有している。検出高は南端で3.78m、北端で3.28mを測る。底面高は南端で3.14m、北端で3.03mを測り、溝床が南から北へ緩傾斜する状況が看取できる。現状での検出規模は約7.4×0.8～1.0m前後を測り、検出状態での長軸方向はN-1°-Wを指向するが、北半で西傾(N-28°-W)し、緩やかなS字状に弧状を呈しながらSX1を構成する礫群下位に埋没する(第18図)。断面形態は漏斗形状を呈しており、深さは北端で26cm、南端で65cm前後を遺存している。埋土は小礫を包含する暗灰黄色シルト～灰褐色粘土質シルトに分層され、上層に人為的埋土層の可能性を観察する。また最下層土にマンガン化合物(暗赤褐色砂質シルト)と考えられる集積層が形成されており、本遺構の流水・湛水状況の可能性を示している。

遺物は弥生後期後葉を示唆する土器片約450点余を主体とするが、須恵器片7点(151～154)や土師質土器片105点(148～150)等を出土しており、当該期を主要な帰属時期とする溝状遺構と捉え得る。然しながら本遺構はSX1に先行する時期の遺構であり、埋積状況に人為的改変の可能性を含んでいるなど時期小差を伴うと考えられ、周辺遺構との先後関係も含めて埋没時期の検討が勘査される。



第 48 図 SD 2-1 遺構平面図・他 (S=1/40) 出土遺物実測図 (S=1/3)

SD 2-2(第 49 図)

調査Ⅲ区KⅨグリッドに位置する。北端は試掘調査時におけるTR 5の検出遺構(第9図)と接続し、更に調査Ⅱ区に所在する溝状遺構(SD 2-1)に続く可能性が考えられる。南端は調査区外に延伸しており、未検出である。検出高は3.70mを測り、西側でSD 3と先後関係を有している。現状での検出規模は約2.0×1.0m前後を測り、検出状態での長軸方向はN-4°-Wを指向している。底面高は南端で3.22m、北端で3.17mを測り、溝床水準は南側が若干高位である。断面形態は掘鉢形状の掘方を呈しつつ下層において箱形状を形成し、深さは56cm前後を遺存している。埋土は暗灰黄色シルト～褐灰色粘土質シルトに分層される。図示したものは調査区南壁を測図した土層断面図であり、暗褐色シルトを基調とする遺物包含層下位の扇状地性礫層において本遺構を検出した状態が観察できる。

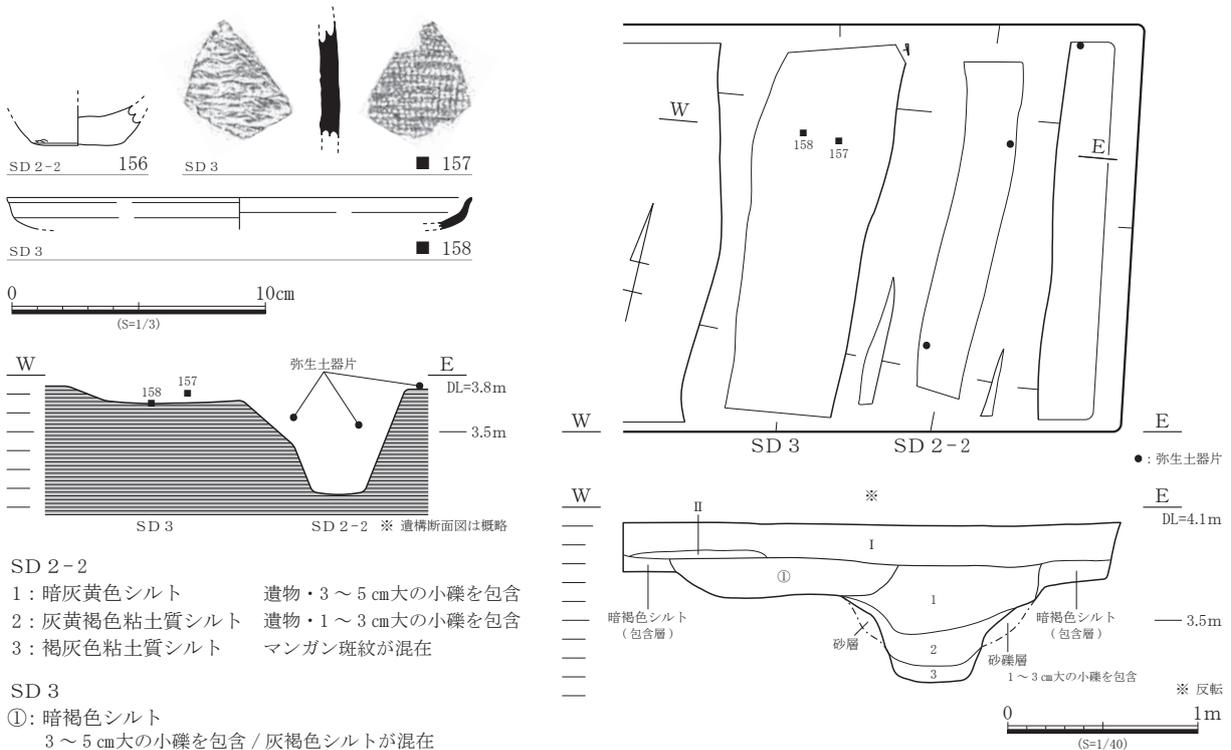
遺物は弥生後期後葉を示唆する土器片185点(156)と、土師質土器片3点を出土している。多くは細片であり、摩耗がみられる。

本遺構は、検出状況や出土遺物等からSD 3に先行する時期に機能していた可能性が考えられる。

SD 3(第 49 図)

調査Ⅲ区KⅨグリッドに位置する。北端は試掘調査時におけるTR 5の検出遺構(第9図)と接続する。南端は調査区外へ延伸しており、未検出である。検出高は3.72mを測り、東側でSD 2-2と先後関係を有している。現状での検出規模は約2.0×0.85(1.2)m前後を測り、検出状態での長軸方向はN-4°-Wを指向している。断面形態は皿状を呈し、深さ13cm前後を遺存するが、上端は遺構検出時に若干削失した可能性を残している。埋土は暗褐色シルトを基調とする。

遺物は須恵器片2点(157・158)と、周辺遺構に由来すると考えられる弥生土器片30点を出土している。多くは細片であり、摩耗がみられる。

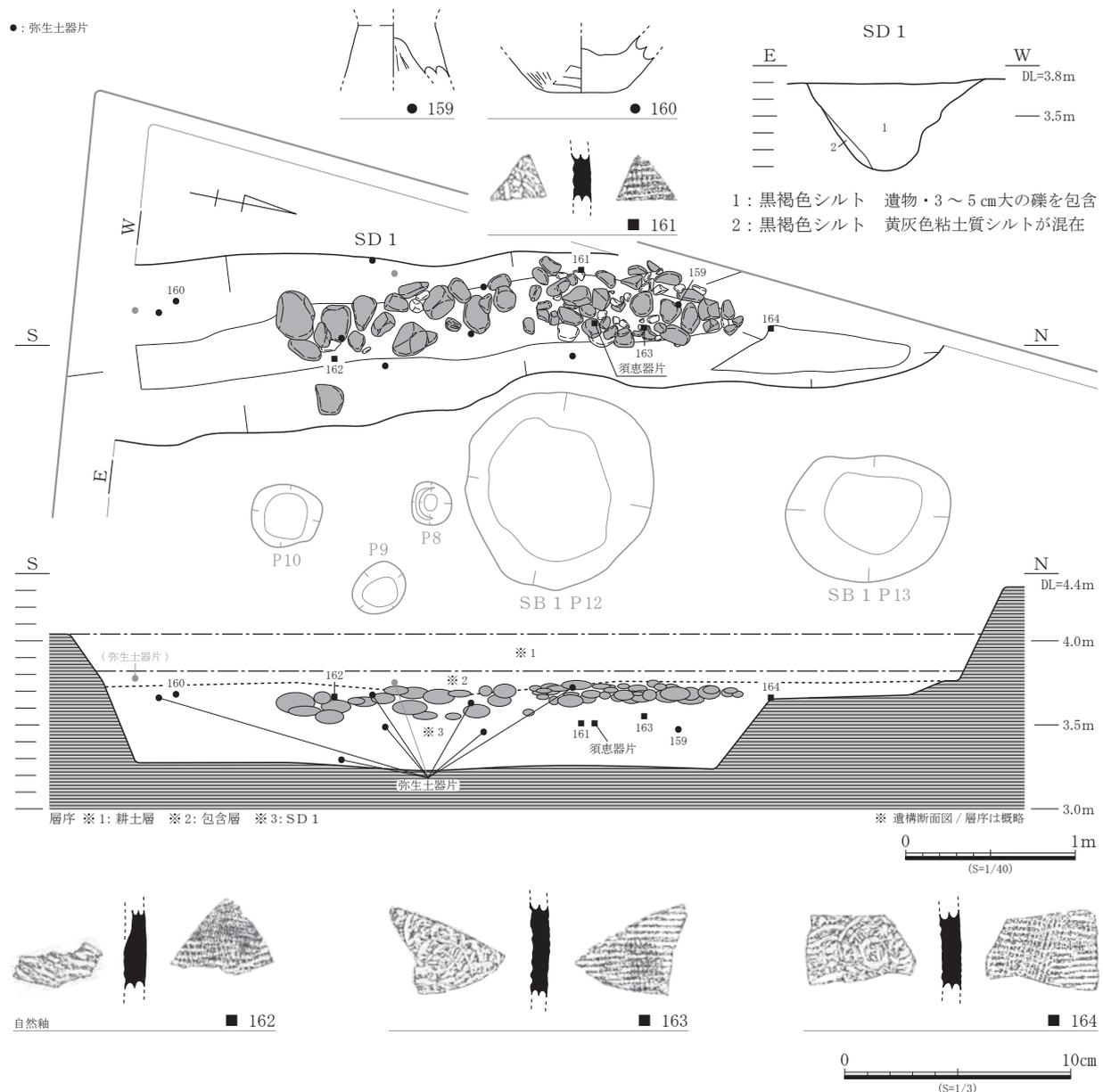


第 49 図 SD 2-2・3 遺構平面図・他 (S=1/40) 出土遺物実測図 (S=1/3)

SD 1(第50図)

調査Ⅰ区BⅦ・Ⅷグリッドに位置し、検出高は3.76mを測る。両端は調査区外に延伸して未検出であるが、南端は試掘調査時におけるTR 6の検出遺構(第9図)に続く可能性を有している。現状での検出規模は約4.9×1.0m前後を測り、検出状態での長軸方向はN-15°-Wを指向するが、西端においてやや西傾する可能性を示している。底面高は南・西端共に3.24m前後を測る。断面形態は楕円形状を呈し、深さは55cm前後を遺存している。埋土は黒褐色シルトを基調とし、上部から粒径5~30cm大の粗細粒砂岩を主体とする円礫~垂円礫86個を検出した。南側は扇状地性礫層の産状とは異なる礫群で構成され、集積状況に小差を認めるが、ほぼ定高性を有して埋存しているなど意図的な埋積の可能性も考慮される。

遺物は須恵器片5点(161~164)と土師質土器片4点の他に、周辺遺構に由来すると考えられる弥生土器片264点(159~160)を出土している。多くは細片であり摩耗がみられるが、弥生土器片とされる一部は土師質土器片の可能性を含んでいる。



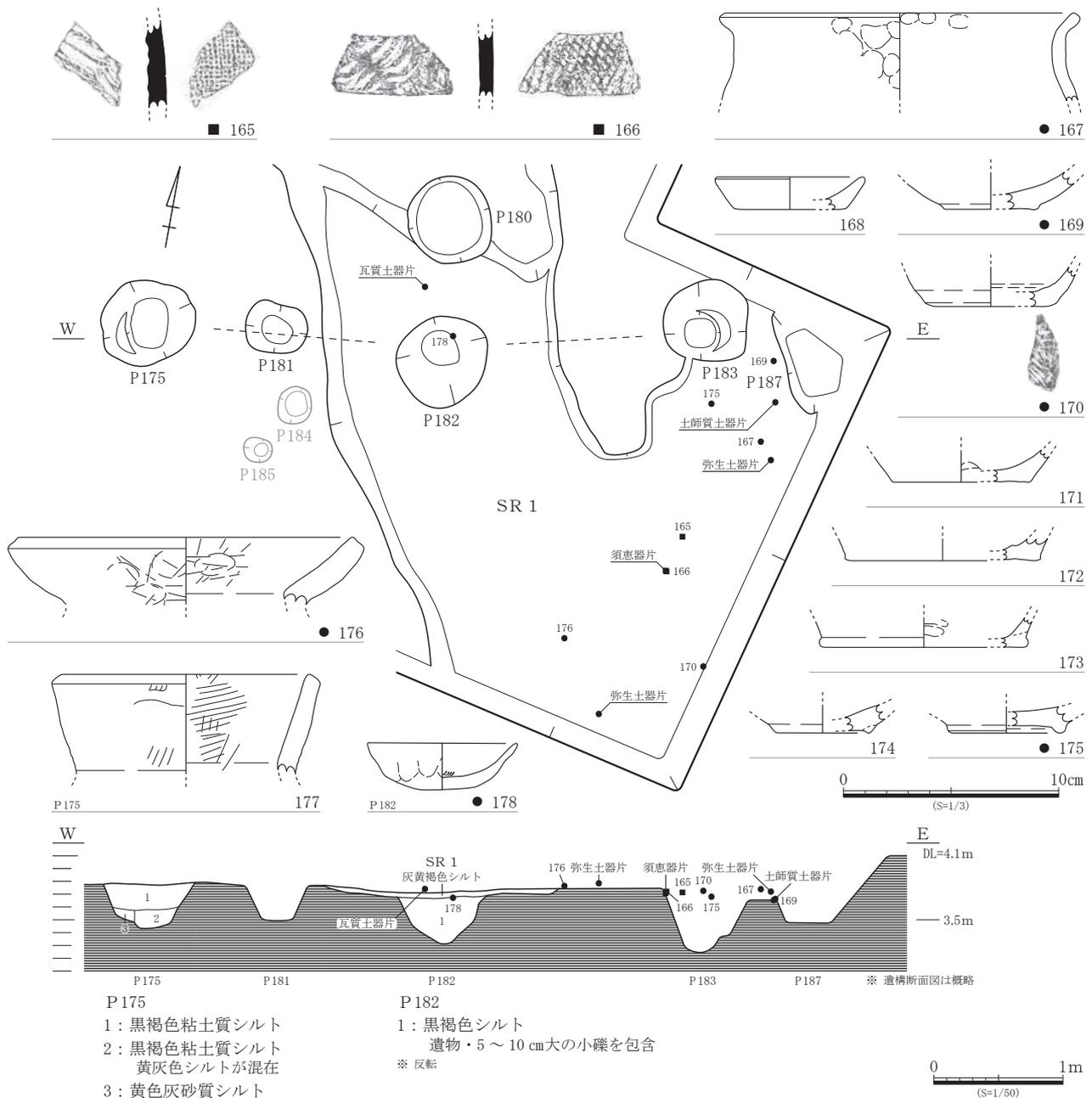
第50図 SD 1 遺構平面図・他 (S=1/40) 出土遺物実測図 (S=1/3)

SR 1(第 51 図)

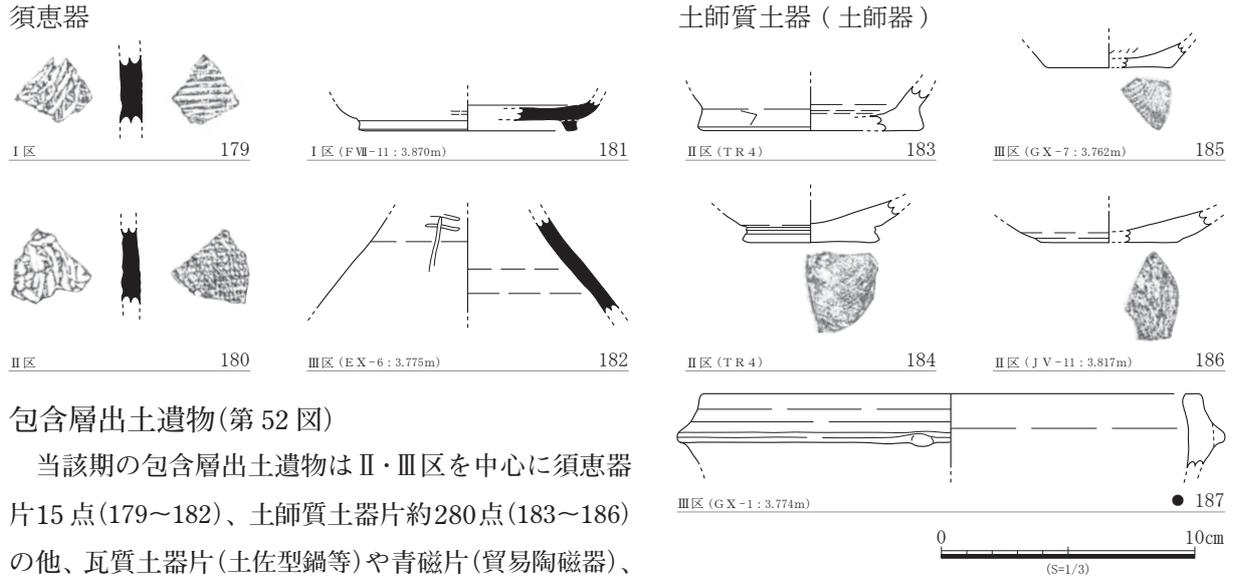
調査Ⅱ区LⅤ・Ⅵ / MⅤ・Ⅵグリッドに位置する。南・東端は調査区外へ続いて未検出であり、北端はSK 11 から展開する礫群に接する段部までを対象とする。検出高は3.76mを測り、底面からP180・182・183・187を検出している。遺構の全体形は地表流水等の自然営力の所産に因るため捉え難い形状を呈しているが、現状での溝状部の検出規模は約4.0×1.8m前後を測り、長軸方向はN-27°-Wを示す。断面形態は皿状を呈し、深さは5cm前後を遺存している。埋土は灰黄褐色シルトを基調とする。

遺物は須恵器片3点(165・166)、土師器片1点(176)、土師質土器片44点(167～175)、瓦質土器片1点と、周辺遺構に由来すると考えられる弥生土器片42点を出土している。多くは細片であり、何れも摩耗がみられる。

本遺構は検出状況などから西側に所在するSX 1(暗渠状遺構)と関連する遺構の可能性を残している。

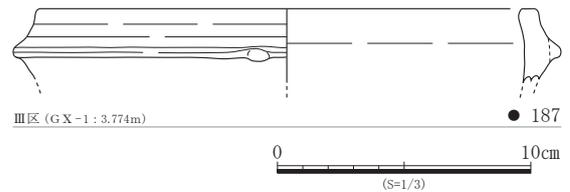


第 51 図 SR 1・P175・182・他 遺構平面図・他 (S=1/50) 出土遺物実測図 (S=1/3)



包含層出土遺物(第 52 図)

当該期の包含層出土遺物はⅡ・Ⅲ区を中心に須恵器片15点(179～182)、土師質土器片約280点(183～186)の他、瓦質土器片(土佐型鍋等)や青磁片(貿易陶磁器)、天目茶碗片(大釜窯産:15～16世紀⁽³⁾/JⅨ-9:3.715m)などを微少ながら出土している。遺物は細片を主体とし、多くは摩耗がみられるなど、弥生期の遺物と同様な出土状況を呈している。



第 52 図 包含層出土遺物実測図 2 (S=1/3)

調査上の遺構検出面の層準深度はほぼ定高性を有しており、先行期を含めて単次での精査で完掘した。

第 4 節 小括

弥生後期後葉に還元する竪穴住居状遺構などを検出した当遺跡は、物部川下流域東岸に形成される野市台地縁辺部(扇端部)に展開する弥生後期末～古墳初頭にかけての遺跡群(野口遺跡・射場屋敷遺跡等)との連関に蓋然性を求められる。当期は県内でも遺跡数が増加する時期に該当し、香長平野における遠因には拠点的集落となる田村遺跡群の衰滅(後期中葉頃)を一因とする周辺地域への分布が指摘されている。

本調査区での成果は限定的で、具体的な空間配置や同時併存遺構の抽出等の遺跡形成に関わる集落構造の復元は能わなかったが、近接する当該期遺跡群との暦年代的な併行関係や可視関係を勘案すれば、周辺に集落跡が遺存している可能性が推測され、埋蔵文化財包蔵地範囲の再検討が用務となる。

土器型式での相対編年区分は概してヒビノキ式の範疇に帰属し、主要な器種別の組成比率は不明瞭ながら支脚形土器を得るなど当該期の一般的な傾向とほぼ一致していると推定される。当遺跡の興起として同定し得るが、以降の継続的な考古資料は確認できず、弥生終末～古墳初頭には廃滅した集落跡と考察される。背景として古環境の不安定化や移行期における社会考古学的な再編などの可能性を推論する。

物部川下流域周辺は、調査事例の蓄積により当該期の土器編年や集落研究における変遷等の分析が近年整いつつある。その中に在って、低平な沖積扇状地の旧河道地形に挟まれた自然堤防上に立地する集落跡を検出した本遺跡は、定見となる段丘縁辺部に占地する高所偏重型遺跡分布に一考を思量する例証としてその評価が課題となる。然るに今次調査においては、検出範囲や遺存状態及び精査に要する期間などから十分な成果を整序し所収することは困難を伴い、実用に供する資料の提示には不備を否めず意を尽くし得ていない。本書では調査対象地における事実報告を概要するに留め、後事に期したい。

【註】

(1) 齋藤美幸氏の御教示による。(2) 吉本由佳氏の御教示による。(3) 吉成承三氏の御教授による。

遺構 番号	平面形状 (概形)	規模			検出高 (m)	埋土 (土色・土性)	重複関係	遺構位置 (グリッド)	出土遺物 (破片点数)	図版 番号
		長径	短径	深さ						
P1	亜円形状	68	57	12	3.804	黄灰色シルト	—	BV-14・15 BVI-2	—	
P2	円形状	31	31	12	3.790	黄灰色シルト	—	BVI-6	—	
P3	円形状	40	37	16	3.786	黄灰色シルト	—	BVI-6	—	
P4	楕円形状	70	50	6	3.793	黄灰色シルト	—	BVI-7	—	
P5	亜円形状	42	38	10	3.752	黄灰色シルト	—	BVI-14・15	—	
P6	楕円形状	54	43	12	3.765	黄灰色シルト	—	BVII-3・7	—	
P7	亜円形状	42	37	10	3.784	黄灰色シルト	—	BVII-7	—	
P8	円形状	25	23	19	3.753	黄灰色シルト	—	BVII-10	—	
P9	亜円形状	33	28	15	3.770	褐灰色シルト	—	BVII-11	弥生土器(摩耗) 3点	
P10	円形状	41	38	12	3.758	黄灰色シルト	—	BVII-14・15	—	
P11	円形状	39	37	12	3.775	黄灰色シルト	—	BVII-16	—	
P12	亜円形状	50	41	18	3.788	黄灰色シルト	—	BVII-16	—	
P13	円形状	40	38	38	3.687	黒褐色シルト /黄灰色粒含	—	CI-11	弥生土器 1点	71
P14	亜円形状	20	18	6	3.780	灰黄褐色シルト	—	CVI-11	—	
P15	円形状	34	33	10	3.792	黄灰色シルト	—	CVII-1・5	—	
P16	円形状	27	27	11	3.753	灰黄褐色シルト	—	CVII-4	—	
P17	亜円形状	32	26	11	3.788	黄灰色シルト	—	CVII-5	弥生土器(摩耗) 1点	
P18	亜円形状	45	39	14	3.824	黒褐色シルト	—	CVIII-12	—	
P19	亜円形状	56	48	5	3.771	黄灰色粘土質シルト	—	DII-3・4	—	
P20	不整形	63	56	35	3.783	暗褐色シルト	—	DV-10	—	
P21	不整形	40	37	8	3.815	黒褐色シルト	—	DVI-12	—	
P22	円形状	26	24	9	3.761	灰黄褐色シルト	—	CVII-4 DVII-1	—	
P23	円形状	24	22	15	3.762	灰黄褐色シルト	—	DVII-1	—	
P24	円形状	25	23	9	3.794	灰黄褐色シルト	—	DVII-7	—	
P25	亜円形状	28	24	34	3.799	黒褐色シルト	—	DVIII-15	—	
P26	楕円形状	51	(35)	6	3.822	黒褐色シルト	SB2 P12	DVIII-15・16 DIX-3・4	弥生土器(摩耗) 1点	
P27	円形状	27	26	12	3.834	黒褐色シルト /暗褐色粒含	—	DVIII-16	—	
P28	円形状	52	48	5	3.836	黒褐色シルト /褐灰色粒含	Pit状遺構	DIX-1	—	
P29	亜円形状	43	39	9	3.826	黒褐色シルト	—	DIX-3・7	—	
P30	楕円形状	31	24	20	3.819	黒褐色シルト	—	DIX-4 EIX-1	—	
P31	亜円形状	29	25	29	3.825	黒褐色シルト	—	DIX-5	—	
P32	亜円形状	73	62	5	3.829	黒褐色砂質シルト	—	DIX-5・9	弥生土器(摩耗) 1点	
P33	楕円形状	61	28	10	3.825	黒褐色シルト	—	DIX-6	—	
P34	円形状	23	21	10	3.786	黄灰色粘土質シルト	—	EII-7	—	
P35	亜円形状	32	28	12	3.764	黄灰色粘土質シルト	—	EII-8・12	—	
P36	亜円形状	26	23	16	3.822	暗褐色シルト	—	EV-6・7	—	
P37	楕円形状	42	33	10	3.788	黒褐色シルト	—	EVI-8	—	
P38	円形状	36	33	32	3.786	黒褐色シルト	—	EVI-12 FVI-9	—	
P39	楕円形状	24	18	13	3.826	灰黄褐色シルト	—	EVIII-7・8	—	
P40	楕円形状	32	25	27	3.818	灰黄褐色シルト	—	EVIII-11・15	弥生土器(摩耗) 3点 土師質土器(摩耗) 2点	

※ () は残存値 / 単位: cm

第5表 ピット状遺構 計測表1

遺構 番号	平面形状 (概形)	規模			検出高 (m)	埋土 (土色・土性)	重複関係	遺構位置 (グリッド)	出土遺物 (破片点数)	図版 番号
		長径	短径	深さ						
P41	亜円形状	30	25	31	3.833	黒褐色シルト / 灰黄褐色粒含	—	EⅧ-13	—	
P42	亜円形状	31	25	23	3.815	黒褐色シルト / 灰黄褐色粒含	—	EⅧ-13	土師質土器(摩耗) 2点	
P43	楕円形状	43	29	23	3.818	黒褐色シルト / 灰黄褐色粒含	—	EⅧ-14	—	
P44	亜円形状	27	24	9	3.801	灰黄褐色シルト	—	EⅧ-15・16 EⅨ-3・4	—	
P45	亜円形状	35	31	20	3.829	黒褐色シルト	—	EⅧ-13 EⅨ-1	—	
P46	楕円形状	38	25	7	3.827	灰黄褐色シルト	—	EⅨ-1・2	土師質土器(摩耗) 7点	
P47	楕円形状	32	20	19	3.801	暗褐色シルト	—	EⅨ-5・6	—	
P48	不整形形状	58	50	19	3.824	暗褐色シルト	—	EⅨ-6	弥生土器(摩耗) 1点	
P49	円形状	27	25	(20)	3.808	暗褐色シルト	—	EⅨ-6	弥生土器(摩耗) 8点	
P50	円形状	27	25	10	3.812	黒褐色シルト	—	EⅨ-8	—	
P51	亜円形状	(46)	77	42	3.789	褐灰色シルト	SB2 P9	EⅨ-11・15	弥生土器(摩耗) 3点	
P52	円形状	36	35	22	3.792	黒褐色シルト	—	EⅨ-14・15 EⅩ-2・3	弥生土器 1点	
P53	亜円形状	35	31	17	3.769	黒褐色シルト / 灰黄褐色粒含	—	EⅨ-15・16 EⅩ-3・4	—	
P54	非円形状	29	27	18	3.754	褐灰色シルト	—	EⅨ-16 EⅩ-4	—	
P55	亜円形状	54	47	14	3.761	褐灰色シルト	—	EⅩ-4・8	—	
P56	亜円形状	43	38	14	3.789	黒褐色砂質シルト	—	EⅩ-6・他	—	
P57	亜円形状	41	35	11	3.758	灰褐色シルト	—	EⅩ-8	—	
P58	円形状	33	31	17	3.745	黒褐色シルト / 灰黄褐色粒含	—	EⅩ-8	—	
P59	亜円形状	46	40	29	3.763	黒褐色シルト	—	EⅩ-12 FⅩ-9	弥生土器 9点	88
P60	方円形状	47	45	(10)	3.779	黒褐色砂質シルト	—	EⅩ-14	—	
P61	楕円形状	69	46	23	3.791	黒褐色シルト	SK4	FⅡ-13・14	弥生土器(摩耗) 4点	
P62	楕円形状	35	26	54	3.795	褐灰色砂質シルト	—	FⅢ-12	弥生土器(摩耗) 1点	
P63	円形状	65	62	15	3.792	灰黄褐色砂質シルト	—	FⅢ-14 FⅣ-2	—	
P64	亜円形状	37	31	35	3.779	黒褐色シルト	—	FⅥ-2	弥生土器(摩耗) 155点	85 86
P65	円形状	27	25	12	3.775	黒褐色シルト	—	FⅥ-8・12	—	
P66	不整形形状	33	28	14	3.754	黒褐色シルト	Pit 状遺構	FⅥ-12	—	
P67	亜円形状	42	36	14	3.776	黒褐色シルト	—	FⅥ-15	弥生土器(摩耗) 4点	
P68	亜円形状	40	34	11	3.777	黒褐色シルト	—	FⅥ-15	—	
P69	亜円形状	52	43	20	3.791	黒褐色シルト	—	FⅦ-1	—	
P70	亜円形状	34	30	33	3.760	暗褐色シルト	—	FⅦ-4	—	
P71	亜円形状	42	38	33	3.797	黒褐色シルト	—	FⅦ-6・他	弥生土器(摩耗) 13点	
P72	亜円形状	27	24	13	3.753	黒褐色シルト	—	FⅦ-7	—	
P73	亜円形状	(37)	34	20	3.782	黒褐色シルト	Pit 状遺構	FⅦ-15・16	弥生土器(摩耗) 1点	
P74	楕円形状	35	27	40	3.810	褐灰色粘土質シルト	—	FⅧ-2	土師質土器(摩耗) 3点	
P75	亜円形状	46	40	27	3.779	黒褐色シルト	—	FⅧ-3	弥生土器 2点	
P76	楕円形状	65	51	13	3.818	灰黄褐色シルト	—	EⅧ-8 FⅧ-5	—	
P77	楕円形状	34	27	8	3.821	灰黄褐色シルト	—	FⅧ-5・9	—	

第6表 ピット状遺構 計測表2

遺構 番号	平面形状 (概形)	規模			検出高 (m)	埋土 (土色・土性)	重複関係	遺構位置 (グリッド)	出土遺物 (破片点数)	図版 番号
		長径	短径	深さ						
P78	円形状	31	30	19	3.805	黒褐色シルト / 灰黄褐色粒含	—	FIX-2・6	—	
P79	亜円形状	36	29	19	3.816	黒褐色シルト / 灰黄褐色粒含	—	FIX-5・6	弥生土器(摩耗) 3点	
P80	方円形状	50	41	18	3.779	黒褐色シルト	—	FIX-8	弥生土器(摩耗) 21点 土師質土器(摩耗) 1点	
P81	亜円形状	27	24	9	3.770	黒褐色シルト / 灰黄褐色粒含	—	FIX-14	弥生土器 1点	
P82	円形状	37	35	22	3.753	褐灰色シルト	—	FIX-14	弥生土器(摩耗) 1点	
P83	亜円形状	49	41	21	3.760	灰褐色シルト	—	FIX-16	弥生土器 土師質土器 5点 1点	
P84	亜円形状	(32)	(55)	22	3.773	暗褐色シルト	P85	FX-2	—	
P85	方円形状	56	55	19	3.762	暗褐色シルト	SK5/P84	FX-2	弥生土器(摩耗) 5点	
P86	亜円形状	32	29	22	3.776	黒褐色シルト	—	FX-2・3	弥生土器 5点	
P87	亜円形状	34	30	23	3.759	黒褐色シルト	—	FX-4	—	
P88	亜円形状	33	27	23	3.757	黒褐色シルト / 灰黄褐色粒含	—	FX-4・8 GX-1・5	—	
P89	円形状	27	26	16	3.665	褐灰色シルト	SK5	FX-6	弥生土器 10点	
P90	亜円形状	47	42	23	3.759	褐灰色砂質シルト	—	FX-12・他	弥生土器 3点	
P91	亜円形状	54	47	26	3.748	黒褐色シルト	—	FX-11・15	弥生土器 4点	
P92	亜円形状	31	26	22	3.733	黒褐色シルト	—	FX-13・他	弥生土器 1点	
P93	円形状	28	27	15	3.749	褐灰色砂質シルト	—	FX-13	—	
P94	楕円形状	32	24	25	3.760	灰褐色シルト	—	FX-13	—	
P95	円形状	59	56	26	3.761	黒褐色シルト	—	FX-13・14 FXI-1・2	弥生土器(摩耗) 7点	
P96	楕円形状	71	41	19	3.792	黒褐色シルト / 黄灰色粒含	P97	GIV-3	—	
P97	楕円形状	(53)	42	11	3.797	黒褐色シルト / 黄灰色粒含	P96	GIV-3・4	—	
P98	円形状	33	31	26	3.800	褐色シルト	—	GIV-12	—	
P99	円形状	57	55	14	3.797	灰黄褐色砂質シルト	—	GIV-12 HIV-9	—	
P100	楕円形状	49	(24)	32	3.788	黒褐色シルト	—	GVI-1	—	
P101	楕円形状	(54)	(38)	33	3.785	黒褐色シルト	—	GVI-10	—	
P102	楕円形状	31	24	13	3.789	黒褐色シルト	—	GVIII-1	—	
P103	円形状	34	32	17	3.807	暗褐色シルト	—	GVIII-3	—	
P104	亜円形状	35	31	23	3.808	灰黄褐色シルト	—	GVIII-7	—	
P105	楕円形状	31	23	2	3.769	黒褐色シルト	—	GVIII-10・14	—	
P106	亜円形状	52	43	10	3.733	灰黄褐色粘土質シルト	—	GIX-12・16	—	
P107	亜円形状	39	34	26	3.759	黒褐色シルト	—	GIX-13・他	弥生土器(摩耗) 9点	
P108	非円形状	54	50	10	3.756	褐灰色砂質シルト	—	GIX-15	—	
P109	円形状	40	38	13	3.746	暗褐色粘土質シルト	—	GIX-16	弥生土器(摩耗) 1点	
P110	円形状	60	57	15	3.746	黒褐色シルト	—	GX-1・2	弥生土器(摩耗) 22点	89
P111	円形状	42	42	24	3.762	褐灰色シルト	SK6	GX-2・3	弥生土器 1点	
P112	楕円形状	(66)	48	21	3.761	褐灰色シルト	SK6	GX-4	—	
P113	方円形状	62	61	19	3.763	黒褐色シルト	Pit 状遺構	GX-6・10	弥生土器(摩耗) 43点	
P114	方円形状	60	51	19	3.756	黒褐色シルト	—	GX-10・11	弥生土器(摩耗) 99点 石器(叩石) 1点	73 5 78
P115	円形状	41	38	10	3.568	灰褐色シルト	SX2	HIV-2	—	

第7表 ピット状遺構 計測表3

遺構 番号	平面形状 (概形)	規模			検出高 (m)	埋土 (土色・土性)	重複関係	遺構位置 (グリッド)	出土遺物 (破片点数)	図版 番号
		長径	短径	深さ						
P116	亜円形状	56	49	33	3.620	褐灰色砂質シルト	SX2	HIV-4・8 IIV-1・5	弥生土器(摩耗) 5点	79 80
P117	楕円形状	46	36	9	3.803	褐灰色砂質シルト	—	HIV-5	—	
P118	方円形状	28	24	6	3.787	黒褐色シルト / 黄灰色粒含	—	HIV-7・8	—	
P119	亜円形状	59	50	46	3.802	灰黄褐色砂質シルト	—	HIV-9・10	—	
P120	亜円形状	36	32	10	3.813	黒褐色シルト / 黄灰色粒含	—	HIV-6・10	—	
P121	亜円形状	31	26	29	3.794	褐色シルト	—	HIV-15	—	
P122	円形状	24	22	18	3.783	褐色シルト	Pit 状遺構	HIV-12・16	—	
P123	非円形状	51	50	23	3.806	黒褐色シルト / 黄灰色粒含	—	HV-4・8	弥生土器(摩耗) 8点	
P124	亜円形状	36	30	15	3.809	黒褐色シルト / 黄灰色粒含	—	HV-8	—	
P125	方円形状	35	33	6	3.801	黄灰色粘土質シルト	—	HV-8	—	
P126	方円形状	45	39	5	3.823	黄灰色粘土質シルト	—	HV-12 IV-9	—	
P127	亜円形状	32	28	26	3.723	灰黄褐色粘土質シルト	—	HIX-13	—	
P128	非円形状	34	32	26	3.721	灰黄褐色粘土質シルト	—	HIX-15	—	
P129	亜円形状	35	31	20	3.704	灰黄褐色シルト	—	HIX-15	—	
P130	非円形状	54	47	11	3.723	褐灰色砂質シルト	—	HIX-16	—	
P131	楕円形状	57	37	22	3.742	褐灰色砂質シルト	P132	HX-1	—	
P132	楕円形状	45	31	12	3.726	褐灰色砂質シルト	P131	HX-1・2	—	
P133	円形状	60	56	18	3.713	黒褐色砂質シルト / 灰黄褐色粒含	—	HX-3	弥生土器 1点	
P134	亜円形状	51	45	14	3.741	褐灰色砂質シルト	—	HX-5・他	—	
P135	亜円形状	50	(44)	11	3.695	黒褐色砂質シルト / 灰黄褐色粒含	—	HX-6・7	—	
P136	楕円形状	111	(68)	53	3.744	黒褐色シルト	—	IⅢ-13・14	弥生土器(摩耗) 3点	
P137	非円形状	33	30	8	3.826	黄灰色粘土質シルト	—	IV-16	—	
P138	楕円形状	28	21	7	3.821	灰黄褐色粘土質シルト	—	IⅦ-13・14 IⅧ-1・2	—	
P139	円形状	31	29	12	3.794	灰黄褐色粘土質シルト	—	IⅧ-2・6	—	
P140	楕円形状	26	(19)	10	3.773	灰黄褐色シルト	—	IⅧ-7・11	—	
P141	亜円形状	36	29	9	3.763	灰黄褐色シルト	—	IⅧ-11	—	
P142	楕円形状	24	19	9	3.751	灰黄褐色シルト	—	IⅧ-12	—	
P143	円形状	33	32	9	3.751	黒褐色シルト / 灰黄褐色粒含	—	IⅧ-12・16	—	
P144	円形状	49	46	24	3.756	暗褐色粘土質シルト	—	IⅧ-14・15	弥生土器 土師質土器(摩耗) 3点	1点 3点
P145	円形状	27	27	9	3.749	灰黄褐色シルト	—	IⅧ-15・16	—	
P146	亜円形状	32	29	18	3.745	灰黄褐色シルト	—	IⅧ-16 JⅧ-13	—	
P147	亜円形状	31	26	22	3.687	灰黄褐色粘土質シルト	—	IⅨ-2・6	—	
P148	亜円形状	44	36	21	3.707	灰黄褐色粘土質シルト	—	IⅨ-8・12 JⅨ-5・9	—	
P149	楕円形状	36	28	29	3.696	褐灰色シルト	—	IⅨ-11	—	
P150	円形状	33	32	10	3.710	褐色シルト	—	IⅨ-11・15	土師質土器 8点	113 114
P151	楕円形状	75	59	(15)	3.731	褐灰色砂質シルト	—	IⅨ-14・15	—	
P152	楕円形状	30	24	12	3.734	褐灰色シルト	—	IⅨ-16	—	

第8表 ピット状遺構 計測表4

第Ⅲ章 調査の成果

遺構番号	平面形状 (概形)	規模			検出高 (m)	埋土 (土色・土性)	重複関係	遺構位置 (グリッド)	出土遺物 (破片点数)	図版 番号
		長径	短径	深さ						
P153	非円形状	33	32	12	3.710	褐灰色シルト	—	IX-3・4	—	
P154	円形状	38	36	25	3.830	黒褐色シルト / 黄灰色粒含	—	JV-7	—	
P155	亜円形状	48	41	37	3.791	黒褐色シルト	—	JV-8	弥生土器 2点	
P156	楕円形状	40	(30)	6	3.820	褐色シルト	ST2	JV-9	—	
P157	亜円形状	27	23	9	3.811	黄灰色粘土質シルト	—	JV-14	—	
P158	非円形状	33	31	11	3.746	灰黄褐色シルト	—	JVIII-9	—	
P159	楕円形状	39	24	6	3.748	灰黄褐色シルト	—	JVIII-13	—	
P160	非円形状	28	26	14	3.730	褐灰色シルト	—	JIX-9	—	
P161	亜円形状	36	36	12	3.711	褐灰色砂質シルト	—	JIX-9	—	
P162	円形状	46	45	8	3.726	黒褐色シルト	—	JIX-11・15	—	
P163	亜円形状	27	24	8	3.721	褐灰色シルト	—	JIX-13 JX-1	—	
P164	円形状	27	26	10	3.717	褐灰色シルト	—	JIX-13 JX-1	—	
P165	亜円形状	(38)	(16)	9	3.731	黒褐色シルト	SK9	JIX-15	弥生土器 1点	70
P166	円形状	37	35	7	3.075	褐灰色粘土質シルト	SD2-1	KIV-13	—	
P167	楕円形状	(54)	(43)	7	3.633	灰黄褐色シルト	P168・169	KV-3	弥生土器 2点 須恵器 1点 土師質土器(摩耗) 10点	
P168	亜円形状	41	(34)	16	3.636	黒褐色シルト	P167・169	KV-3・4	—	
P169	方円形状	100	96	36 (43)	3.644 (3.750)	暗褐色粘土質シルト	P167・168	KV-7・他	弥生土器(摩耗) 20点 須恵器 1点 土師質土器(摩耗) 62点 瓦質土器(煤) 1点	115 122
P170	円形状	30	29	32	3.711	灰黄褐色砂質シルト	(SR1)	KV-7	弥生土器(摩耗) 4点	
P171	亜円形状	30	27	10	3.545	黒褐色粘土質シルト	(SR1)	KV-8	—	
P172	円形状	38	37	14	3.736	灰黄褐色シルト	—	KV-9	—	
P173	亜円形状	29	24	14	3.746	黒褐色粘土質シルト / 褐灰色粒含	—	KV-9	弥生土器(摩耗) 2点	
P174	円形状	39	38	35	3.740	黒褐色粘土質シルト	—	KV-13	弥生土器(摩耗) 5点	
P175	不整形形状	76	66	34	3.779	黒褐色粘土質シルト	—	KV-15・16 KVI-3・4	弥生土器(摩耗) 29点	177
P176	亜円形状	43	35	19	3.791	灰黄褐色砂質シルト	—	KVI-7	—	
P177	亜円形状	(87)	(71)	18	3.703	褐灰色シルト	—	LV-3・他	—	
P178	亜円形状	94	79	44	3.726	黒褐色シルト	P179	LV-6	—	
P179	亜円形状	74	(35)	16	3.527	黒褐色シルト	P178	LV-6・10	—	
P180	円形状	68	65	15	3.698	褐色シルト	SR1	LV-10・14	弥生土器 1点	81
P181	亜円形状	48	40	27	3.767	黒褐色シルト / 黄灰色粒含	—	LV-13 LVI-1	弥生土器(摩耗) 12点	
P182	亜円形状	72	70	41	3.700	黒褐色シルト	SR1	LV-14 LVI-2	弥生土器(摩耗) 20点	178
P183	方円形状	65	64	47	3.751	黒褐色シルト / 黄灰色粒含	SR1	LV-16	弥生土器(摩耗) 12点	
P184	亜円形状	30	27	13	3.763	黒褐色シルト / 黄灰色粒含	—	LVI-1	—	
P185	亜円形状	22	19	9	3.776	黒褐色シルト / 黄灰色粒含	—	LVI-1・5	—	
P186	円形状	33	32	33	3.771	黒褐色シルト / 黄灰色粒含	—	LVI-5	—	
P187	方円形状	(85)	(47)	21	3.676	褐灰色シルト	SR1	MV-13	—	

第9表 ピット状遺構 計測表5

遺物觀察表

遺物観察表凡例

1. 貿易陶磁器の分類は大略において『土佐神社西遺跡・土佐神社』（高知市教委 2006）所収一覧（小野分類）に準拠した。
2. 煮炊具の分類は大略において『中近世土器の基礎研究 21』（日本中世土器研究会 2007）所収「四国の土製甕・羽釜・鍋」（吉成承三）に準拠した。
3. 法量の（ ）は残存値、[] は復元値である。単位はcm。

図版 番号	出土遺構 (層位)	器種 器形	法量			色 調	特 徴	備 考
			口径	器高	底径			
1 (第6図)	T R 6 (包含層)	須恵器 坏身	[12.3]	2.9	[7.5]	内) 黄灰 外) 灰白	精選された胎土。回転ナデ調整。体部は低く開き気味に立上り、強いナデにより外面に凹状の段を成す。受け部は外方に伸び端部は丸く収める。立上りはやや内傾し、端部は丸く尖らせる。	
2 (第12図)	S T 2 (上位)	土師質土器 坏	[13.2]	(2.0)	—	内) 淡黄 外) 淡黄	精選された胎土。体部は逆「ハ」字形に開き、外面にロクロ目痕。口縁端部は丸く収める。	全体的に摩耗
3 (第12図)	S T 2 P1	弥生土器 鉢	[15.8]	(4.1)	—	内) 灰白 外) 浅黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面は叩目をナデで消す。内面は横ハケ調整。口縁端部は丸く収める。	
5 (第14図)	S T 2 (検出面)	弥生土器 壺	[19.8]	(6.3)	—	内) 灰白 外) 浅黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面は縦ハケ、内面はナデ調整。口縁部は粘土帯を付加し、段部を有して直線的に立上る。端部は面を取り、僅かに外方へ丸みを帯びて張出す。	受口状の二次口縁
6 (第14図)	S T 2 (中位)	弥生土器 壺	[17.2]	(8.6)	—	内) にぶい黄橙 外) 浅黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。口縁部外面は横ハケ、内面はナデ調整。頸部外面は縦ハケ、内面は横ハケ調整。口縁部は粘土帯を付加し、段部を有して直線的に立上る。端部は面を取る。	受口状の二次口縁
7 (第14図)	S T 2 (中位)	弥生土器 壺	[17.4]	(6.0)	—	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面は斜・縦ハケ、内面は横ハケ調整。口縁部はラッパ状に外反し、端部は面を取る。	広口壺の可能性
8 (第14図)	S T 2 (床面)	弥生土器 壺	[15.8]	(2.2)	—	内) 灰白 外) にぶい黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面は縦ハケ調整。口縁部は逆「ハ」字形に外反する。	
9 (第14図)	S T 2 (上位)	弥生土器 壺	[24.0]	(1.6)	—	内) 黄橙 外) 黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。口縁部はラッパ状に開き、端部は上下に拡張する。	全体的に摩耗 広口壺の可能性
10 (第14図)	S T 2 (上位)	弥生土器 壺	[10.8]	(3.6)	—	内) にぶい橙 外) 橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面は叩目をハケで消す。口縁部はラッパ状に外反し、端部は丸く収める。	全体的に摩耗
11 (第14図)	S T 2 (上位)	弥生土器 壺	[12.5]	(4.9)	—	内) にぶい黄橙 外) にぶい橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面は叩目をナデで消す。内面は横ハケ調整。口縁部は直口気味に外傾し、端部は面を取る。	
12 (第14図)	S T 2 (上位)	弥生土器 甕	[14.8]	(3.5)	—	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面は叩目をナデで消す。内面は横ハケ調整。口縁部は開き気味に外傾する。	未接合資料 (復元図)
13 (第14図)	S T 2 (上位)	弥生土器 甕	[15.1]	[35.7]	3.0	内) 浅黄橙 外) にぶい黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面は叩目をハケで消す。内面は縦ハケ調整。口縁部は「く」字形に外反し、端部は面を取る。長胴部中位に最大径。底部は丸底化を指向する。	底部外面に煤け 未接合資料 (復元図)
14 (第14図)	S T 2 (中位)	弥生土器 (底部)	—	(10.7)	2.2	内) 橙 外) にぶい橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面は叩目をハケで消す。内面にユビナデ。底部は丸底化を指向する。	底部外面に煤け
15 (第14図)	S T 2 (上位)	弥生土器 (底部)	—	(6.4)	2.8	内) 浅黄橙 外) 橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面は叩目をナデで消す。内面はハケ調整。底部は丸底化を指向する。	底部外面に煤け 礫群
16 (第14図)	S T 2 (中位)	弥生土器 (底部)	—	(6.8)	[3.0]	内) にぶい黄橙 外) にぶい黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面は叩目をハケで消す。内面にユビナデ。底部は平底状。	下胴部外面に煤け
17 (第14図)	S T 2 (上位)	弥生土器 (底部)	—	(2.2)	[4.8]	内) 橙 外) 暗灰黄	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面に叩目痕。底面は平底状。	全体的に摩耗
18 (第14図)	S T 2 (下位)	弥生土器 (底部)	—	(1.8)	3.1	内) 橙 外) 橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面はハケ調整。底部は平底状。	全体的に摩耗
19 (第15図)	S T 2	弥生土器 甕	[17.2]	(3.3)	—	内) 橙 外) 橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面は縦ハケ調整。口縁部は短く外反し、端部は丸く収める。	全体的に摩耗
20 (第15図)	S T 2 (上位)	弥生土器 甕	[14.6]	(9.8)	—	内) にぶい黄橙 外) 灰黄	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面に叩目痕。内面は縦ハケ・ユビオサエ。口縁部は外反し、端部は面を取る。	礫群
21 (第15図)	S T 2 (上位)	弥生土器 甕	[13.4]	(7.0)	—	内) 浅黄橙 外) 灰白	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面に叩目痕。内面は縦ハケ・ユビオサエ。口縁部は外反し、端部は面を取る。	礫群 22と重複して出土
22 (第15図)	S T 2 (上位)	弥生土器 甕	[12.2]	(6.2)	—	内) 灰白 外) 灰黄	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面に叩目痕・ユビオサエ。内面は縦ハケ・ユビオサエ。口縁部は外反し、端部は丸く収める。	礫群 21と重複して出土
23 (第15図)	S T 2 (検出面)	弥生土器 (胴部)	—	(7.0)	—	内) 灰黄 外) 灰白	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面は叩目をハケで消す。内面にユビナデ。	胴部内外面に煤け
24 (第15図)	S T 2 (上位)	弥生土器 (底部)	—	(6.4)	4.8	内) にぶい黄橙 外) 浅黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面は叩目をナデで消す。内面はナデ調整。底部は平底状(粘土盤を貼付した可能性)。	
25 (第15図)	S T 2 (中位)	弥生土器 (底部)	—	(2.7)	[12.0]	内) 褐灰 外) 橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。内外面はハケ調整。外底面に叩目痕。底部は平底状。	底部内面に煤け 全体的に摩耗
26 (第15図)	S T 2 (上位)	弥生土器 甕	[16.0]	(3.0)	—	内) にぶい黄橙 外) にぶい黄橙	精選された胎土。口縁部は「く」字形に屈曲し、端部は上方へ僅かに摘み上げる。	全体的に若干摩耗 「東阿波型土器」
27 (第15図)	S T 2 (上位)	弥生土器 支脚	—	(6.8)	[7.4]	内) 灰黄褐 外) 灰黄	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面に叩目痕。内面に絞り痕。体部は筒状(中空)で、脚裾部は外方に開く。	外面に煤け
28 (第15図)	S T 2 (上位)	弥生土器 支脚	—	(1.9)	[7.6]	内) にぶい黄橙 外) にぶい黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。内外面に指頭圧痕。体部は筒状(中空)で、脚裾部はラッパ状に開く。手捏ね成形。	
29 (第15図)	S T 2 (上位)	弥生土器 支脚	—	(4.5)	[6.0]	内) にぶい黄橙 外) にぶい黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面に叩目痕。内面に絞り痕、ユビナデ。体部は筒状(中空)で、脚裾部は外方に開く。	
30 (第15図)	S T 2 (中位)	弥生土器 高坏	—	(2.8)	—	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	精選された胎土。内面にユビオサエ。分割成形。	全体的に摩耗 ミニチュア土器
31 (第15図)	S T 2 (上位)	弥生土器 鉢	[8.4]	(5.0)	—	内) にぶい黄橙 外) 灰白	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面に叩目痕。内面は縦ハケ・ユビオサエ。丸みを帯びた体部から外傾した口縁部が短く立上る。	口縁部外面に煤け
32 (第15図)	S T 2 (上位)	弥生土器 鉢	[13.1]	(4.4)	—	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面はユビオサエ。内面はハケ調整。口縁端部は僅かに凹状を成す。	
33 (第15図)	S T 2 (上位)	弥生土器 鉢	[23.0]	(5.2)	—	内) 淡黄 外) 浅黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面は叩目をナデで消す。口縁端部は丸みを帯びた面を取る。	全体的に摩耗

第10表 遺物観察表 1

遺物観察表

図版 番号	出土遺構 (層位)	器種 器形	法量			色 調	特 徴	備 考
			口径	器高	底径			
34 (第15図)	S T 2 (上位)	弥生土器 鉢	[21.0]	(5.3)	—	内) 淡黄 外) にぶい黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面は叩目をハケ、ナデで消す。内面はハケ調整。口縁端部は丸く収める。	体部外面に煤け 鏽群
35 (第15図)	S T 2 (上位)	弥生土器 鉢	10.9	(4.3)	—	内) にぶい黄橙 外) 灰黄	チャート等の細・粗粒砂を含む。内外面に指頭圧痕。手捏ね成形。	ベッド状遺構
36 (第15図)	S T 2 (上位)	弥生土器 鉢	12.4	(4.0)	—	内) にぶい黄橙 外) 浅黄	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面は叩目をナデで消す。内面はハケ調整。口縁端部は不定高。	ベッド状遺構
37 (第15図)	S T 2 (中位)	弥生土器 鉢	14.0	7.2	2.7	内) にぶい橙 外) にぶい黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面は叩目をハケ・ナデで消す。内面にハケ、ユビナデ。体部は塊状で、底部は丸底化を指向する。	
38 (第15図)	S T 2 (床面)	弥生土器 鉢	[12.4]	6.2	1.1	内) 浅黄 外) にぶい黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面は叩目をハケで消す。底部は丸底(尖底)化を指向する。	体部内外面に煤け
39 (第16図)	S T 2 S K 1	弥生土器 (底部)	—	(7.1)	10.2	内) 橙 外) 橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面は叩目をハケで消す。底部剥離(焼成中の可能性)。	底部外面に煤け 全体的に摩耗
41 (第20図)	S X 1	弥生土器 壺	[14.8]	47.6	[12.9]	内) 浅黄 外) 浅黄	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面は叩目を縦ハケで消す。内面は横ハケ、ユビナデ。口縁端部からやや内傾気味に立上る口縁部を付加する。胴部中上位に最大径。底部は重厚な平底。	上胴部外面に煤け 複合口縁壺
42 (第21図)	S X 1 (上位)	白磁 (底部)	—	(0.8)	[6.0]	内) 灰白 外) 灰白	胎土はやや粗い灰白色。見込みと高台内に薄く施釉。畳付けに軸ハギ。断面三角形の付け高台。	
45 (第21図)	S X 1 (上位)	弥生土器 鉢	[12.8]	4.9	5.7	内) 灰白 外) 灰白	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面は叩目をナデで消す。内面はハケをナデで消す。底部は平底。	全体的に摩耗
46 (第21図)	S X 1 (中位)	弥生土器 壺	[14.8]	(1.9)	—	内) にぶい橙 外) にぶい橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面は縦ハケ調整。内面は横ハケ調整。口縁部はラッパ状に開き、端部は面を取る。	
47 (第21図)	S X 1 (上位)	弥生土器 壺	[15.8]	(1.6)	—	内) にぶい黄橙 外) にぶい黄橙	精選された胎土。口縁部は逆「ハ」字形に外反し、端部は丸く収める。	
48 (第21図)	S X 1 (下位)	弥生土器 壺	[25.8]	(3.5)	—	内) 浅黄橙 外) にぶい橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面はハケをナデで消す。口縁部は逆「ハ」字形に外反し、口唇部に刻目状痕。	全体的に若干摩耗
49 (第21図)	S T 2 (中位)	弥生土器 (頸部)	—	(6.7)	—	内) にぶい橙 外) にぶい橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面に叩目痕。内面にユビナデ。	50(S X 1)と 同一個体の可能性
50 (第21図)	S X 1 (中位)	弥生土器 (底部)	—	(12.2)	[4.0]	内) にぶい橙 外) にぶい橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面は叩目をハケで消す。内面にユビナデ。底部は平底状。	49(S T 2)と 同一個体の可能性
51 (第21図)	S X 1	弥生土器 (胴部)	—	(22.3)	—	内) 灰黄 外) にぶい橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面は叩目をハケで消す。内面にユビナデ。胴部中位に最大径。	
52 (第21図)	S X 1	弥生土器 (胴部)	—	(9.6)	—	内) にぶい橙 外) 橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面に叩目痕。内面にユビナデ。	
53 (第21図)	S X 1	弥生土器 (胴部)	—	(6.9)	—	内) にぶい黄橙 外) にぶい黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面に叩目痕。内面はハケをナデで消す。	
54 (第22図)	S X 1 (中位)	弥生土器 (胴部)	—	(6.5)	—	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面は叩目をハケで消す。内面にユビナデ。	全体的に若干摩耗
55 (第22図)	S X 1 (下位)	弥生土器 甕	[15.1]	(1.9)	—	内) 橙 外) 橙	精選された胎土。口縁部は「く」字形に屈曲し、端部は上方へ揃み上げる。	全体的に摩耗 「東阿波型土器」
56 (第22図)	S X 1 (中位)	弥生土器 (底部)	—	(2.1)	4.1	内) にぶい黄橙 外) 橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面に叩目痕。底部は丸底状(粘土盤を貼付した可能性)。	
57 (第22図)	S X 2	弥生土器 (底部)	—	(4.1)	3.4	内) 浅黄橙 外) にぶい黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面に叩目痕。底部は平底状。	全体的に摩耗
58 (第22図)	S X 1 (上位)	弥生土器 (脚部)	—	(2.4)	[19.6]	内) にぶい橙 外) にぶい橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面は縦ハケ調整。内面は横ハケ調整。脚部はラッパ状に開き、端部は丸みを帯びた面を取る。	
59 (第22図)	S X 1 (中位)	弥生土器 支脚	—	(7.0)	[8.0]	内) にぶい橙 外) 浅黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面に指頭圧痕。内面に絞り痕。体部は筒状(中空)。脚部はラッパ状に開き、端部は丸みを帯びた面を取る。手捏ね成形。	
60 (第22図)	S X 1 (下位)	弥生土器 支脚	—	(5.0)	—	内) にぶい黄橙 外) にぶい黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面に指頭圧痕。体部は筒状(中空)の可能性。焼成後穿孔痕?手捏ね成形。	
62 (第22図)	S X 1 (上位)	弥生土器 土製品	—	(1.5)	0	内) にぶい黄橙 外) にぶい黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。内面にヘラミガキ。丸底。	ミニチュア土器
65 (第23図)	S X 2	弥生土器 壺	15.2	30.4	2.2	内) にぶい黄橙 外) にぶい黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面は叩目をハケで消す。口縁部内面はハケ調整、胴部内面にユビナデ。口縁部は逆「ハ」字形に外反し、端部は面を取る。体部は球形状。底部は丸底状。	底部内外面に煤け
66 (第23図)	S X 2	弥生土器 甕	[27.0]	[34.6]	5.8	内) にぶい橙 外) にぶい橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面は叩目をハケで消す。内面にユビナデ。口縁部は「く」字形に外反し、端部は面を取る。体部は球形状。底部は形骸化した平底状。	底部外面に煤け 未接合資料 (復元図)
67 (第24図)	S K 2 (下位)	弥生土器 (底部)	—	(1.7)	[3.2]	内) 灰黄 外) 黒褐	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面に叩目痕。外底面の叩目をハケで消す。底部は平底状。	外底面に煤け
68 (第24図)	S K 9 (上位)	弥生土器 高坏	—	(1.7)	[23.0]	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。脚部は低平に開き、裾端部は丸く収める。	全体的に摩耗
69 (第24図)	S K 9 (上位)	弥生土器 高坏	—	(3.0)	[14.6]	内) 灰白 外) 灰白	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面にヘラミガキ。内面はハケ調整。脚部は低平な「ハ」字形に開き、裾端部は丸く収める。脚部に径9mmの円孔を穿つ。	全体的に若干摩耗
70 (第24図)	P 165 (上位)	弥生土器 支脚	—	(5.9)	8.2	内) 浅黄 外) 灰黄	チャート等の細・粗粒砂を含む。内外面に指頭圧痕。体部は筒状(中空)で、脚部は上げ底状。底面に不規則な棒状圧痕。手捏ね成形。	外面に煤け・被熱痕 全体的に若干摩耗

第11表 遺物観察表 2

図版 番号	出土遺構 (層位)	器種 器形	法量			色 調	特 徴	備 考
			口径	器高	底径			
71 (第25図)	P13 (中位)	弥生土器 (底部)	—	(2.9)	[6.4]	内) にぶい橙 外) にぶい黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面は叩目をハケで消す。内面にヘラケズリ。底部は平底。	
72 (第25図)	包含層 (Ⅱ区)	弥生土器 壺	[17.6]	(2.3)	—	内) 橙 外) 橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。口縁部は逆「ハ」字形に外反し、端部は僅かに上下に拡張して擬凹線状を成す。	広口壺の可能性
74 (第27図)	P114 (上位)	弥生土器 (底部)	—	(4.0)	4.2	内) 橙 外) 橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面に叩目痕。底部は平底(粘土盤を貼付した可能性)。	全体的に摩耗
75 (第27図)	P114 (上位)	弥生土器 (底部)	—	(3.7)	3.1	内) 橙 外) 橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面に叩目痕。底部は平底。	全体的に摩耗
76 (第27図)	P114 (底部)	弥生土器 (底部)	—	(2.5)	[3.7]	内) 灰黄褐 外) 橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面は縦ハケ調整。底部は平底。	
77 (第27図)	P114 (上位)	弥生土器 鉢/甌	[32.6]	(6.4)	—	内) 浅黄 外) 橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。口縁部外面は縦ハケ、内面は横ハケ調整。胴部外面に叩目痕。口縁部は直線的に外傾し、端部は面を取る。	
78 (第27図)	P114	弥生土器 鉢	[14.0]	(2.9)	—	内) にぶい黄橙 外) にぶい橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。内外面はハケ調整。口縁端部は丸く収める。	全体的に若干摩耗
79 (第28図)	P116	弥生土器 甌	[15.0]	(2.3)	—	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面に叩目痕。内面は横ハケ調整。口縁部は逆「ハ」字形に外反し、端部は面を取る。	
80 (第28図)	P116 (中位)	弥生土器 壺	[13.0]	(3.6)	—	内) 淡黄 外) 橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。口縁部は開き気味に外反し、端部は僅かに擬凹線状を成す。断面は方形状。	全体的に摩耗
81 (第30図)	P180 (上位)	弥生土器 支脚	—	(2.7)	[6.1]	内) 浅黄橙 外) にぶい黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。内外面に指頭圧痕。脚部は上げ底状で、端部は丸く収める。手捏ね成形。	全体的に摩耗
82 (第31図)	包含層 (Ⅲ区)	弥生土器 甌	[16.1]	(2.5)	—	内) 黄灰 外) 灰	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面に叩目痕。口縁部は「く」字形に外反し、端部は面を取る。	
83 (第31図)	包含層 (Ⅰ区)	弥生土器 鉢	[17.0]	(2.8)	—	内) 浅黄 外) 灰白	チャート等の細・粗粒砂を含む。口縁端部は丸く収める。	全体的に摩耗 内面に煤け
84 (第31図)	包含層 (Ⅲ区)	弥生土器 支脚	—	(3.1)	[6.2]	内) にぶい橙 外) にぶい橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面に指頭圧痕。脚部は上げ底状の可能性を有し、底面は平坦を成す。手捏ね成形。	全体的に摩耗 外面に被熱痕
85 (第32図)	S B 3 P2	弥生土器 鉢	[12.2]	5.5	[4.6]	内) 橙 外) にぶい橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。内面はハケ調整。碗状の体部から口縁部は僅かに直立気味に立上る。底部は平底。	
86 (第32図)	S B 3 P2	弥生土器 (底部)	—	(1.7)	4.0	内) 明黄褐 外) 明黄褐	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面に叩目痕。底部は丸底化を指向する。	
87 (第32図)	包含層 (Ⅰ区)	須恵器 (胴部)	—	(4.9)	—	内) 灰白 外) 灰黄	精選された胎土。外面は平行叩目をハケ状原体で調整。内面に同心円状の当具痕。外面に自然釉。	全体的に摩耗
88 (第33図)	S B 4 P7	弥生土器 鉢	[12.9]	(2.2)	—	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。内面は横ハケ調整。口縁端部は丸く収める。	全体的に若干摩耗
89 (第33図)	S B 4 P3	弥生土器 壺	[11.0]	(3.8)	—	内) 褐灰 外) 灰黄褐	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面は縦ハケ、内面は横ハケ調整。口縁部は開き気味に外反し、端部は丸みを帯びた面を取る。	
90 (第35図)	包含層 (Ⅱ区)	瓦質土器 羽釜	—	(4.1)	—	内) 灰 外) 灰	チャート等の細・粗粒砂を含む。退化した銹部を貼付。	全体的に摩耗
91 (第35図)	S K 10 (上位)	土師質土器 環	—	(1.5)	[5.4]	内) にぶい橙 外) 橙	精選された胎土。外面はロクロ目を回転ナデで消す。内底面に凹状(有段)のロクロ目痕を有し、底央は回転成形により凸状を成す。底部回転糸切痕。	
92 (第35図)	S K 10 (上位)	土師質土器 環	—	(0.9)	[6.4]	内) 橙 外) 橙	精選された胎土。体部は直線的に立上る。底部回転糸切痕。	全体的に摩耗
93 (第35図)	S K 10 (上位)	土師質土器 環	—	(1.3)	[3.8]	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	精選された胎土。内底面に凹状(有段)のロクロ目痕を有するが、回転ナデ又は摩耗により不明瞭。円盤状高台。底部回転糸切痕。	全体的に摩耗
94 (第35図)	S K 10 (下位)	土師質土器 環	[13.0]	3.7	[7.8]	内) 灰黄褐 外) にぶい黄橙	精選された胎土。回転ナデ調整。体部は逆「ハ」字形を呈しつつ、やや屈折気味に立上る。口縁端部は僅かに肥厚して丸く収める。底部回転糸切痕。	内外面に煤け 灯明皿として 再利用した可能性
95 (第35図)	S K 10 (中位)	土師質土器 環	—	(1.7)	[4.4]	内) 橙 外) 橙	精選された胎土。回転ナデ調整。体部は逆「ハ」字形に立上る。底部回転糸切痕。	全体的に摩耗
96 (第35図)	S K 10 (下位)	土師質土器 環	—	(0.9)	[4.6]	内) 橙 外) にぶい橙	精選された胎土。底部は形骸化した円盤状高台。	全体的に摩耗
97 (第35図)	S K 10 (下位)	土師質土器 環	[15.2]	(2.4)	—	内) 橙 外) 橙	精選された胎土。回転ナデ調整。口縁部は直線的に立上り、端部は丸みを帯びた面を取る。	全体的に摩耗
98 (第35図)	S K 10 (上位)	土師質土器 環	—	(1.3)	[4.2]	内) 浅黄橙 外) にぶい橙	精選された胎土。内底面に凹状(有段)のロクロ目痕。底部回転糸切痕。	
99 (第35図)	包含層 (Ⅱ区)	土師質土器 環	[6.4]	2.0	[4.2]	内) 橙 外) 橙	精選された胎土。体部は屈曲気味に立上る。	全体的に摩耗
101 (第36図)	S K 1	土師質土器 皿	[18.0]	(2.0)	—	内) 橙 外) 明黄褐	精選された胎土。体部は稜を有して、口縁端部は丸く収める。	全体的に摩耗
102 (第37図)	S K 11 (下位)	土師質土器 環	—	(1.3)	[9.5]	内) 橙 外) 橙	精選された胎土。内底面に凹状のロクロ目痕を有するが、摩耗により不明瞭。	全体的に摩耗
104 (第37図)	包含層 (Ⅱ区)	土師器 甌	[17.8]	(2.0)	—	内) 灰白 外) 灰白	チャート等の細・粗粒砂を含む。口縁端部は上下に肥厚する。	全体的に若干摩耗
105 (第38図)	集石 1 (下位)	緑釉陶器 碗	[16.0]	(2.2)	—	内) 灰オリーブ 外) 灰	精選された胎土(硬陶)。全面に薄く施釉。回転ナデ調整。口縁端部は端反り気味に外反。	9C後半の可能性

第12表 遺物観察表 3

遺物観察表

図版 番号	出土遺構 (層位)	器種 器形	法量			色 調	特 徴	備 考
			口径	器高	底径			
106 (第38図)	集石 1 (下位)	土師質土器 埴	[16.3]	(3.1)	—	内) 灰白 外) 灰白	精選された胎土。回転ナデ調整。外面にヘラミガキ。口縁部は端 反り気味に外反し、端部は丸みを帯びた面を取る。	
107 (第39図)	集石 3 (下位)	土師質土器 杯	[13.3]	(2.6)	—	内) にぶい黄橙 外) にぶい黄橙	精選された胎土。回転ナデ調整。口縁部は丸く収める。	
108 (第39図)	集石 3 (上位)	土師質土器 杯	—	(1.1)	[4.8]	内) にぶい黄橙 外) 褐灰	精選された胎土。底部は形骸化した円盤状高台。底部回転糸切痕。	全体的に摩耗
111 (第41図)	S K 7 (中位)	須恵器 (胸部)	—	(6.9)	—	内) 灰白 外) 灰白	精選された胎土。外面は平行叩目をハケ状原体で調整。内面に同 心円状の当具痕。断面は褐灰色。	全く摩耗なし
112 (第41図)	S K 7 (中位)	須恵器 (胸部)	—	(7.0)	—	内) 灰 外) 灰	精選された胎土。外面は平行叩目をハケ状原体で消す。内面に同 心円状の当具痕・自然釉。断面は赤灰色。	
113 (第42図)	P 150	土師質土器 杯	[14.0]	(1.8)	—	内) 橙 外) 橙	精選された胎土。回転ナデ調整。口縁部は丸く収める。	全体的に摩耗
114 (第42図)	P 150	土師質土器 埴	[16.6]	(3.6)	—	内) にぶい黄橙 外) にぶい黄橙	精選された胎土。回転ナデ調整。口縁部は僅かに外反し、端部は 丸く収める。	全体的に若干摩耗
117 (第43図)	P 169 (上位)	土師質土器 小皿	[6.8]	(1.8)	[5.5]	内) にぶい黄橙 外) にぶい黄橙	精選された胎土。回転ナデ調整。体部は稜を持つ。内底面端部に 沈線状の凹線が巡る。底部回転糸切痕。	全体的に摩耗
118 (第43図)	P 169 (中位)	土師質土器 杯	—	(1.5)	[10.0]	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	精選された胎土。内底面に凹状(有段)のロクロ目痕を有するが、 摩耗により不明瞭。	全体的に摩耗
119 (第43図)	P 169 (中位)	土師質土器 杯	—	(1.2)	[7.4]	内) 橙 外) 橙	精選された胎土。底部は形骸化した円盤状高台。底部回転糸切痕。	全体的に摩耗
120 (第43図)	P 169 (上位)	土師質土器 (口縁部)	[7.8]	(1.8)	—	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	精選された胎土。丸みを帯びた体部から口縁部が僅かに外反し、 端部は丸く収める。	全体的に摩耗
121 (第43図)	P 167 (下位)	土師質土器 杯	—	(2.1)	[6.0]	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	精選された胎土。回転ナデ調整。底部回転糸切痕。	全体的に若干摩耗
122 (第43図)	P 167 (上位)	土師質土器 杯	—	(1.9)	[5.8]	内) 赤橙 外) 赤橙	精選された胎土。内底面に凹状のロクロ目痕を有するが、回転ナ デ又は摩耗により不明瞭。底部回転糸切痕。	全体的に摩耗
123 (第45図)	S B 1 P 12	弥生土器 甕	[17.5]	(3.3)	—	内) にぶい黄橙 外) にぶい黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。内外面はハケ調整。口縁部は逆 「ハ」字形に外反し、端部は面を取る。	全体的に若干摩耗
124 (第45図)	S B 1 P 3	弥生土器 甕	[20.8]	(2.9)	—	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。内外面はハケ調整。外面にユビ オサエ。口縁部は逆「ハ」字形に外反し、端部は面を取って僅か に下方へ張出す。	全体的に摩耗
125 (第45図)	S B 1 P 3	弥生土器 甕	[13.2]	(5.5)	—	内) 黄灰 外) 浅黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面に叩目痕。内面は縦ハケ調整。 口縁部は「く」字形に外反し、端部は面を取る。	内面に煤け 全体的に摩耗
126 (第45図)	S B 1 P 10	弥生土器 支脚	—	(6.3)	—	内) 橙 外) 浅黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面に叩目痕。内面はナデ調整。 脚部は内傾気味に立上り、残存部は中空を呈する。	外面に煤け
127 (第45図)	S B 1 P 2	須恵器 (胸部)	—	(2.3)	—	内) 灰 外) 灰	精選された胎土。外面は平行叩目をハケ状原体で調整。内面は同 心円状の当具痕。断面は褐灰色。	
128 (第45図)	S B 1 P 3	須恵器 (胸部)	—	(3.7)	—	内) 灰 外) 灰	精選された胎土。外面は平行叩目をハケ状原体で調整。内面は同 心円状の当具痕。断面は褐灰色。	全く摩耗なし
129 (第45図)	S B 1 P 12	土師質土器 高杯	[19.6]	(1.6)	—	内) 灰黄 外) にぶい黄橙	精選された胎土。	全体的に摩耗
130 (第45図)	S B 1 P 12	土師質土器 高杯	—	(1.2)	—	内) にぶい黄橙 外) にぶい黄橙	精選された胎土。回転ナデ調整。	全体的に摩耗
131 (第45図)	S B 1 P 14	青磁 碗	—	(2.8)	—	内) 灰オリーブ 外) 灰オリーブ	胎土は密で灰白色。全面に施釉。内面に飛雲文又は草花文。	龍泉窯系 12C後半～13C前葉
132 (第46図)	包含層 (I区)	青磁 碗	—	(1.3)	[6.1]	内) オリーブ灰 外) 灰白	胎土はやや粗い灰白色。高台内・畳付け以外に施釉。断面逆梯形 状の付け高台。	
133 (第46図)	S B 2 P 10	土師質土器 皿	[16.0]	(2.3)	—	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	精選された胎土。内面に稜を有して、口縁部は丸く収める。	全体的に若干摩耗
134 (第46図)	S B 2 P 9	須恵器 (胸部)	—	(3.3)	—	内) 灰 外) 灰	精選された胎土。外面に平行叩目痕。	
135 (第47図)	S B 2 P 6	弥生土器 壺	[18.4]	(1.6)	—	内) にぶい黄橙 外) にぶい黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。口縁部はラッパ状に開き、端部 は面を取って僅かに下方へ張出す。	
136 (第47図)	S B 2 P 5	弥生土器 甕	[26.3]	(3.1)	—	内) 浅黄橙 外) にぶい黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。口縁部は逆「ハ」字形に外反し、 端部は丸く収める。	全体的に摩耗
137 (第47図)	S B 2 P 5	弥生土器 甕	[15.0]	(3.2)	—	内) にぶい黄橙 外) にぶい黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面に叩目痕。内面は横ハケ調整。 口縁部は短く開き気味に外反し、端部は面を取る。	全体的に摩耗
138 (第47図)	S B 2 P 6	弥生土器 甕	[15.6]	(3.4)	—	内) 灰白 外) 浅黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面に叩目痕。口縁部内面に粘 土帯を貼付。口縁部は「く」字形に外反し、端部は丸く収める。	全体的に摩耗
139 (第47図)	S B 2 P 10	弥生土器 甕	[16.7]	(2.9)	—	内) にぶい黄橙 外) にぶい黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面に叩目痕。口縁部は逆「ハ」 字形に外反し、端部は面を取って僅かに下方へ張出す。	全体的に若干摩耗
140 (第47図)	S B 2 P 5	弥生土器 甕	[17.8]	(2.9)	—	内) 橙 外) 浅黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面は縦ハケ調整。口縁部は「く」 字形に外反し、端部を上方へ摘み上げる。	全体的に摩耗 非在地系模倣土器
141 (第47図)	S B 2 P 10	弥生土器 (底部)	—	(2.6)	0	内) 浅黄橙 外) 褐灰	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面に叩目痕。焼成時剥離痕。 底部は丸底。	底部内外面に煤け

第13表 遺物観察表 4

図版 番号	出土遺構 (層位)	器種 器形	法量			色調	特徴	備考
			口径	器高	底径			
142 (第47図)	S B 2 P 6	弥生土器 (底部)	—	(2.6)	[7.0]	内) 灰白 外) 褐灰	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面に叩目痕。底部は平底状。	外底部に煤け 全体的に摩耗
143 (第47図)	S B 2 P 2	弥生土器 (底部)	—	(1.7)	3.2	内) 橙 外) 橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面に叩目痕。底部は丸底化を 指向する。	全体的に若干摩耗
144 (第47図)	S B 2 P 5	弥生土器 (底部)	—	(1.9)	[3.6]	内) にぶい黄 外) 黄灰	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面に叩目痕。底部は高台状の 平底。	外底部に煤け 全体的に摩耗
145 (第47図)	S B 2 P 9	弥生土器 (底部)	—	(2.5)	[3.0]	内) 灰黄褐 外) 灰黄褐	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面は叩目を縦方向のナデで消 す。外底部に叩目痕。底部は平底状。	外底部に煤け
146 (第47図)	S B 2 P 5	弥生土器 壺	—	(4.0)	—	内) 橙 外) 橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。内面は横ハケ調整。頸部に刻目 を施した突帯を貼付。	全体的に摩耗
147 (第47図)	S B 2 P 5	弥生土器 支脚	—	3.8	[7.0]	内) にぶい橙 外) にぶい黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面に横方向の絞り目状圧痕。 体部は器高の低い円柱状(中実)で、上面は僅かに凹状を呈する。	外底部に煤け/被熱 外底面に初圧痕
148 (第48図)	S D 2-1 (上位)	土師質土器 坏	—	(1.4)	[5.8]	内) にぶい黄橙 外) 橙	精選された胎土。回転ナデ調整。体部は内湾気味に立上る。底部 へら切痕。	全体的に摩耗
149 (第48図)	S D 2-1	土師質土器 坏	—	(1.6)	[7.6]	内) 浅黄橙 外) にぶい黄橙	精選された胎土。回転ナデ調整。	全体的に摩耗
150 (第48図)	S D 2-1	土師質土器 小皿	[7.4]	1.2	[5.0]	内) 橙 外) 橙	精選された胎土。口縁端部は丸く収める。	全体的に摩耗
151 (第48図)	S D 2-1 (下位)	須恵器 握鉢	[18.0]	(5.4)	—	内) 灰黄 外) 灰黄	精選された胎土。回転ナデ調整。体部は逆「ハ」字形に立上る。 口縁端部は凹状を成し、僅かに上下に張出す。	全体的に摩耗 焼成不良
152 (第48図)	S D 2-1 (下位)	須恵器 (胸部)	—	(4.1)	—	内) 灰白 外) 灰	精選された胎土。外面に格子目状痕。内面に同心円状の当具痕・ ナデ。	全体的に摩耗
153 (第48図)	S D 2-1 (下位)	須恵器 (胸部)	—	(7.2)	—	内) 灰白 外) オリーブ灰	精選された胎土。外面は叩目をハケ状原体で調整。内面に同心円 状の当具痕。外面に自然釉。	全く摩耗なし
154 (第48図)	S D 2-1 (中位)	須恵器 (胸部)	—	(4.0)	—	内) 灰白 外) 灰	胎土はやや粗い。体部は算盤玉状を呈し、稜線部に沈線状の凹線。 外面に自然釉。	全く摩耗なし
156 (第49図)	S D 2-2	弥生土器 (底部)	—	(1.6)	[3.5]	内) 灰黄 外) 淡黄	チャート等の細・粗粒砂を含む。底部は平底状。	
157 (第49図)	S D 3 (上位)	須恵器 (胸部)	—	(4.6)	—	内) 灰白 外) 黄灰	精選された胎土。外面は平行叩目をハケ状原体で調整。内面に同 心円状の当具痕。	
158 (第49図)	S D 3 (下位)	須恵器 皿	[18.4]	(1.3)	—	内) 灰白 外) 灰白	精選された胎土。回転ナデ調整。口縁部は端反り気味に外反し、 端部は丸く収める。	
159 (第50図)	S D 1 (中位)	弥生土器 高坏	—	(2.5)	—	内) 橙 外) 橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。内面に絞り痕。	全体的に摩耗
160 (第50図)	S D 1 (上位)	弥生土器 (底部)	—	(2.5)	3.2	内) 浅黄 外) にぶい橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面は縦ハケ調整。内底面に指 頭圧痕。底部は平底状。	全体的に摩耗
161 (第50図)	S D 1 (中位)	須恵器 (胸部)	—	(2.1)	—	内) 灰黄 外) 黄灰	精選された胎土。外面は平行叩目をハケ状原体で調整。内面に同 心円状の当具痕。	全く摩耗なし
162 (第50図)	S D 1 (上位)	須恵器 (胸部)	—	(3.5)	—	内) 灰黄 外) にぶい黄	胎土はやや粗い。外面は平行叩目をハケ状原体で調整。内面に同 心円状の当具痕。外面に自然釉。	全く摩耗なし
163 (第50図)	S D 1 (中位)	須恵器 (胸部)	—	(4.2)	—	内) 灰 外) 灰黄	精選された胎土。外面は平行叩目をハケ状原体で調整。内面に同 心円状の当具痕。断面は褐灰色。	全く摩耗なし
164 (第50図)	S D 1 (上位)	須恵器 (胸部)	—	(3.6)	—	内) 灰 外) にぶい黄	精選された胎土。外面は平行叩目をハケ状原体で調整。内面に同 心円状の当具痕。断面は褐灰色。	殆ど摩耗なし
165 (第51図)	S R 1	須恵器 (胸部)	—	(4.1)	—	内) 灰白 外) 灰白	精選された胎土。外面は平行叩目をハケ状原体で調整。内面に同 心円状の当具痕。断面はにぶい黄橙色。	
166 (第51図)	S R 1	須恵器 (胸部)	—	(3.0)	—	内) 灰 外) 灰	精選された胎土。外面に格子目状痕。内面に同心円状の当具痕。	全体的に摩耗
167 (第51図)	S R 1	土師質土器 甕	[16.2]	(4.1)	—	内) 黄灰 外) 灰白	チャート等の細粒砂を含む。外面に指頭圧痕。口縁部は短く外反 し、端部は丸みを帯びた面を取る。	全体的に若干摩耗
168 (第51図)	S R 1	土師質土器 小皿	[6.8]	(1.6)	[5.2]	内) 橙 外) 橙	精選された胎土。口縁端部は丸く収める。	全体的に摩耗
169 (第51図)	S R 1	土師質土器 埴	—	(1.7)	[4.4]	内) 淡赤橙 外) 浅黄橙	精選された胎土。輪高台。	全体的に摩耗
170 (第51図)	S R 1	土師質土器 坏	—	(1.9)	[6.2]	内) 橙 外) 橙	精選された胎土。内底面に凹状のロクロ目痕。底部回転糸切痕(不 明瞭)。	全体的に摩耗
171 (第51図)	S R 1	土師質土器 坏	—	(1.5)	[6.4]	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	精選された胎土。	全体的に摩耗
172 (第51図)	S R 1	土師質土器 坏	—	(1.1)	[9.1]	内) 浅黄橙 外) 橙	精選された胎土。内底面に凹状のロクロ目痕。	全体的に摩耗
173 (第51図)	S R 1	土師質土器 坏	—	(1.4)	[9.6]	内) 橙 外) 橙	精選された胎土。底部は形骸化した円盤状高台。	全体的に摩耗
174 (第51図)	S R 1	土師質土器 埴	—	(1.3)	[4.4]	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	精選された胎土。貼付輪高台。	全体的に摩耗
175 (第51図)	S R 1	土師質土器 埴	—	(1.2)	[5.5]	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	精選された胎土。輪高台。	全体的に摩耗

第14表 遺物観察表 5

遺物観察表

図版 番号	出土遺構 (層位)	器種 器形	法量			色調	特徴	備考
			口径	器高	底径			
176 (第51図)	S R 1	土師器 甕	[15.5]	(3.2)	—	内) にぶい黄橙 外) にぶい黄褐	チャート等の細・粗粒砂を含む。内外面にユピオサエ。口縁部は内彎気味に開き、端部は面を取る。	
177 (第51図)	P 175	弥生土器 壺	[11.4]	(4.6)	—	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。内面は横ハケ調整。口縁部は直口気味に外傾し、端部は面を取る。	全体的に若干摩耗
178 (第51図)	P 182 (上位)	弥生土器 鉢	[7.0]	2.2	2.3	内) 灰白 外) 灰白	チャート等の細粒砂を含む。外面に指頭圧痕。口縁端部は丸く取める。底部は丸底化を指向する。手捏ね成形。	小皿状
179 (第52図)	包含層 (I区)	須恵器 (胴部)	—	(2.7)	—	内) 灰白 外) 灰	精選された胎土。外面に平行叩目痕。内面に同心円状の当具痕。	全く摩耗なし
180 (第52図)	包含層 (II区)	須恵器 (胴部)	—	(3.0)	—	内) 灰白 外) 灰白	精選された胎土。外面に平行叩目をハケ状原体で調整。内面に同心円状の当具痕。	
181 (第52図)	包含層 (I区)	須恵器 杯	—	(1.2)	[8.6]	内) 灰 外) 灰	精選された胎土。回転ナデ調整。底面外縁端部に断面方形状の貼付輪高台。	
182 (第52図)	包含層 (III区)	須恵器 (胴部)	—	(3.7)	—	内) 赤灰 外) 灰	精選された胎土。回転ナデ調整。外面にへら状工具による「干」字状の窠記号。	
183 (第52図)	包含層 (II区)	土師質土器 杯	—	(1.8)	[8.6]	内) 浅黄 外) にぶい黄橙	チャート等の細粒砂を含む。内底面に凹状のロクロ目痕。円盤状高台。	全体的に摩耗
184 (第52図)	包含層 (II区)	土師質土器 碗	—	(1.7)	[5.4]	内) 灰白 外) 灰白	精選された胎土。回転ナデ調整。底部の円盤状高台にハケ状原体による条痕。底部回転糸切痕。	全体的に摩耗
185 (第52図)	包含層 (III区)	土師質土器 杯	—	(0.9)	[4.8]	内) にぶい橙 外) にぶい黄橙	精選された胎土。底部回転糸切痕。	全体的に摩耗
186 (第52図)	包含層 (II区)	土師質土器 杯	—	(1.3)	[5.5]	内) にぶい橙 外) にぶい黄褐	精選された胎土。底部は形骸化した円盤状高台。底部回転糸切痕。	全体的に摩耗
187 (第52図)	包含層 (III区)	土師器 羽釜	[19.6]	(3.0)	—	内) 橙 外) 橙	精選された胎土。回転ナデ調整。口縁部は内彎気味に立上り、端部は面を取る。退化した鋳部の断面は蒲鋒 / 梯形状を呈し、端部に非調整の圧痕。	

第15表 遺物観察表 6

図版 番号	出土遺構 (層位)	器種 器形	法量				色調	特徴	備考
			全長	全幅	全厚	重量			
4 (第13図)	S T 2 (下位)	石製品 砥石	(4.5)	2.3	1.8	(26g)	内) 外)	細粒砂岩(堆積岩系)。四角柱状。欠損部を除く全面が研磨(使用面)され、条線状の擦痕を認める。2面は磨滅により凹状を成す。	全面的に被熱 定形砥石
40 (第16図)	S T 2 (S K 1)	礫石器 叩石	15.2	8.1	6.1	1,218g	内) 外)	細・粗粒砂岩。棒状円礫。両端に敲打痕。	部分的に被熱
43 (第21図)	S X 1 (上位)	土錘	4.2	1.6	1.6	(6g)	内) 明黄褐 外) 浅黄橙	精選された胎土。外面にへらミガキ。円筒形。端部欠損。	全体的に若干摩耗
44 (第21図)	S X 1 (下位)	土錘	(2.2)	1.3	(0.6)	(2g)	内) 黄橙 外) 橙	精選された胎土。円筒形。	全体的に摩耗
61 (第22図)	S X 1 (上位)	土製品	(6.4)	3.3	2.6	(21g)	内) 浅黄橙 外) にぶい黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面に指頭圧痕。内面はナデ調整。体部は中空の楕円形状(断面馬蹄形状)を呈し、端部に垂直方向の扁平状突起が付く。手捏ね成形。	
63 (第22図)	S X 1 (上位)	礫石器 砥石	5.0	3.6	1.5	50g	内) 外)	細粒砂岩(堆積岩系)。亜角礫状の自然石。一平坦面に条線状の擦痕を認める。	
64 (第22図)	S X 2 (底面)	石製品	7.3	1.0	0.8	7g	内) 外)	粘板岩。体部は研磨して面(擦痕)を取り、棒状に調整。両端に挟りを入れ、端部は丸く加工する。	
73 (第27図)	P 114 (中位)	礫石器 叩石	13.5	8.4	4.2	732g	内) 外)	細粒砂岩。円磨度の高い扁平状円礫。端部に敲打痕。側方に分割痕(剥離)。	
100 (第35図)	包含層 (II区)	土錘	5.9	2.2	1.7	(16g)	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。外面に指頭圧痕。扁平な円筒形。端部欠損。	全体的に摩耗
103 (第37図)	包含層 (II区)	弥生土器 支脚	(7.2)	2.9	3.6	—	内) にぶい橙 外) にぶい黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。内外面に指頭圧痕。粘土帯を貼付した手捏ね成形。	外下部に被熱 指状の受け部
109 (第40図)	集石 2 (表採)	礫石器	12.7	9.1	3.7	534g	内) 外)	粗細粒砂岩。扁平状円礫。一平坦面に敲打痕(擦痕)。側方に敲打による挟り状痕。	
110 (第40図)	集石 2 (表採)	礫石器	16.6	15.3	8.7	3,018g	内) 外)	細・粗粒砂岩。御餅状円礫。平坦面及び周縁部に敲打痕(整形加工痕?)。	
115 (第43図)	P 169 (中位)	土錘	5.3	2.0	1.9	(16g)	内) 外) 浅黄橙	精選された胎土。扁平な円筒形。端部欠損。	
116 (第43図)	P 169 (上位)	土錘	(4.2)	1.3	1.3	(5g)	内) 外) 淡黄	精選された胎土。僅かに紡錘形状を呈した円筒形。端部欠損。	外面に煤け
155 (第48図)	S D 2-1 (上位)	礫石器 叩石	17.7	8.8	5.5	1,341g	内) 外)	粗細粒砂岩。棒状円礫。端部に敲打痕(擦痕)。	

第16表 遺物観察表 7

写真図版



図版 1
調査対象地



東狭間遺跡 遠景 (■: 調査対象地)
※『射場屋敷遺跡』香南市教育委員会 2016年 所収写真を加筆修整



大八幡宮 (2017. 3. 16)



調査対象地: 西 (2017. 3. 16)



調査対象地: 北 (2017. 3. 16)



調査対象地: 東 (2017. 3. 17)

調査 I 区



調査区設定状態 (2017. 5. 26)



遺構検出状態 (2017. 6. 6)



調査区南壁 土層断面状況 (2017. 7. 4)



完掘状態 (2017. 8. 3)



完掘状態 空撮 (2017. 8. 3)

図版 3
調査Ⅱ区



調査区設定状態 (2017. 8. 9)



遺構検出状態 (2017. 8. 29)



礫群検出状況 (2017. 9. 21)



完掘状態 (2017. 10. 27)



完掘状態 空撮 (2017. 10. 27)

調査Ⅲ区



調査区設定状態 (2017. 8. 16)



遺構検出状態 (2017. 9. 27)



完掘状態 (2017. 10. 12)



完掘状態 (2017. 10. 12)



完掘状態 空撮 (2017. 10. 27)

図版 5
ST 2



ST 2 遺構検出状態 (2017. 8. 29)



ST 2 十字形畦 (バンク) 設定状態 (2017. 10. 4)



ST 2 遺物出土状態 : 4 (2017. 10. 18)



ST 2 完掘状態 (2017. 10. 27)



ST 2・他 完掘状態 空撮 (2017. 10. 27)

SX 1



SX 1 礫群検出状況：上位部 (2017. 9. 7)



SX 1 礫群検出状況：中位部 (2017. 10. 4)



SX 1 礫群検出状況：下位部 (2017. 10. 13)



SX 1 堆積断面状況 (2017. 10. 12)

SX 2



SX 2 堆積断面状況 (2017. 10. 4)



SX 1 完掘状態 (2017. 10. 27)



SX 2 遺物出土状態：65 (2017. 9. 13)



SX 2 遺物出土状態：64 (2017. 10. 11)

図版 7

SK 2



SK 2 土層断面状況 (2017. 6. 8)

P 165



P 165 遺物出土状態 : 70 (2017. 9. 19)

SB 3



SB 3 完掘状態 (2017. 8. 3)

P 114



P 114 遺物出土状態 : 73 (2017. 10. 3)

SB 4



SB 4 P3(P110) 遺構検出状態 (2017. 10. 3)



SB 4 P6(P95) 遺構検出状態 (2017. 10. 3)

SK 10



SK 10 遺物出土状態 : 91 (2017. 10. 13)



SK 10 遺物出土状態 : 94 (2017. 10. 20)

SK 11



SK 11 礫群検出状況 (2017. 9. 21)



SK 11 堆積断面状況 (2017. 10. 26)

集石遺構 1



集石遺構 1 礫群検出状況 (2017. 6. 19)



集石遺構 1 半截状態 (2017. 8. 2)

集石遺構 2



集石遺構 2 礫群検出状況 (2017. 10. 24)



集石遺構 2 下層断面状況 (2017. 10. 27)



集石遺構 2 被熱礫検出状況 (2017. 10. 27)



集石遺構 2 遺物出土状態 : 109 (2017. 10. 27)

図版 9

集石遺構 3



集石遺構 3 礫群検出状況 (2017. 8. 28)



集石遺構 3 半截状態 (2017. 9. 19)

集石遺構 4 (SK 7)



SK 7 礫群検出状況：上位部 (2017. 10. 20)



SK 7 礫群検出状況：中位部 (2017. 10. 25)

P 169



※ 試掘調査TR4 北壁断面

P 169 土層断面状況 (2017. 3. 28)



SK 7 礫群検出状況：下位部 (2017. 10. 27)



P 169 完掘状態 (2017. 9. 25)



P 169 遺物出土状態：116 (2017. 9. 25)

SB 1



SB 1 (東側) 遺構検出状態 (2017. 6. 9)



SB 1 (東側) 完掘状態 (2017. 8. 3)



SB 1 P6 礫群検出状況 (2017. 6. 13)



SB 1 P10 礫群検出状況 (2017. 6. 12)



SB 1 P3~5 半截状態 (2017. 6. 12)



SB 1 P3 遺物出土状態 : 128 (2017. 6. 12)



SB 1 (西側) 遺構検出状態 (2017. 8. 21)



SB 1 完掘状態 (2017. 8. 28)

図版 11

SB 2



SB 2 (I区) 遺構検出状態 (2017. 6. 6)



SB 2 (I区) 完掘状態 (2017. 8. 3)



SB 2 (III区) 遺構検出状態 (2017. 9. 27)



SB 2 (III区) 完掘状態 (2017. 10. 27)



SB 2 P11 遺物出土状態 (2017. 6. 9)



※ 試掘調査TR 4

SB 2 P5 土層断面状況 (2017. 3. 17)



SB 2 P7 礫群検出状況 (2017. 10. 12)



SB 2 P9 礫群検出状況 (2017. 10. 12)

SD 2-1



※ 試掘調査TR 4

SD 2-1 遺構検出状態 (2017. 3. 23)



※ 試掘調査TR 4

SD 2-1 土層断面状況：南 (2017. 3. 27)



SD 2-1 遺物出土状態：153 (2017. 10. 5)



SD 2-1 土層断面状況：北 (2017. 10. 12)



SD 2-1 完掘状態 (2017. 10. 27)

図版 13

SD 2-2 / SD 3



SD 2-2 / SD 3 遺構検出状態 (2017. 10. 5)



SD 2-2 / SD 3 完掘状態 (2017. 10. 12)

SD 1



SD 1 礫群検出状況 (2017. 8. 22)



SD 2-2 土層断面状況 (2017. 10. 24)



SD 1 完掘状態 (2017. 8. 24)



SD 1 土層断面状況 (2017. 8. 24)

SR 1



SR 1・P182 土層断面状況 (2017. 9. 4)



遺物出土状態：181 (2017. 5. 30)

包含層（耕土層）出土遺物



東狭間遺跡 空撮 (2017. 8. 3)



東狭間遺跡 空撮 (2017. 10. 27)



4



4



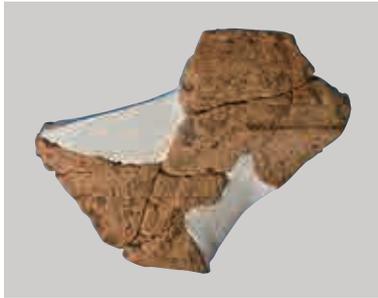
4



4



4



5



6



7



15



20



22



外面

27



26



24



内面

27



28



底面

24

「東阿波型土器」



外面 29



31



32



内面 29



35



36



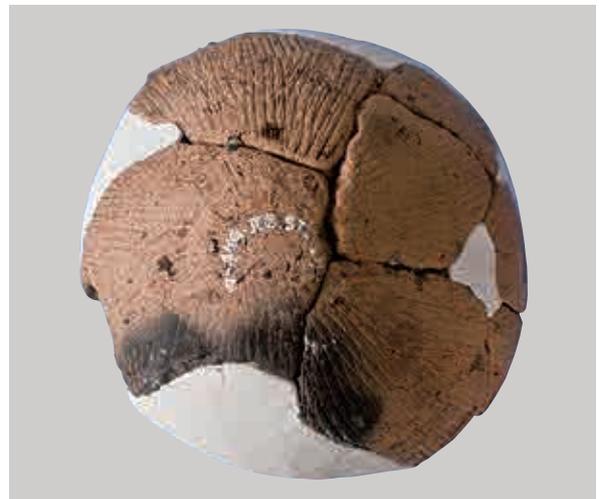
37



38



底面 37



底面 38



39



40



40



41



57



43



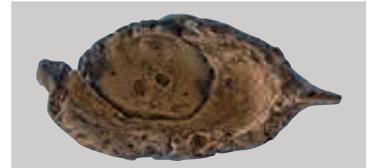
56



59



61



61



65



64



底面

61



61



68



69



70



内面

71



底面

71



73



74



77



75



底面

75



P114

未実測



80



内面

87



外面

87



91



84



85



底面

91



内面

94



外面

94

図版 19



100



103



内面

105



外面

105



115



103



109



110

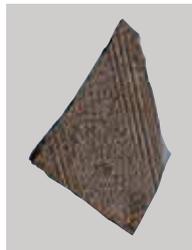


116



内面

111



外面

111



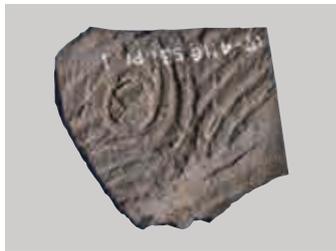
内面

112



外面

112



内面

128



外面

128



内面

127



外面

127



147



内面

134

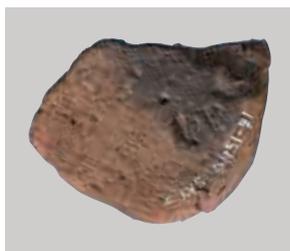


外面

134



131



底面

147



146



底面

148



150



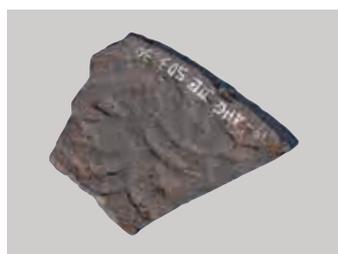
外面

152



外面

154



内面

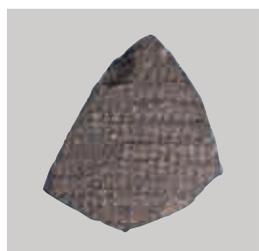
152

153



内面

154



外面

157



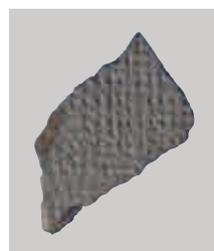
外面

161



外面

162



外面

165



内面

157



内面

161



内面

162



内面

165



外面

163



外面

164



外面

166



内面

163



内面

164



内面

166

図版 21



底面

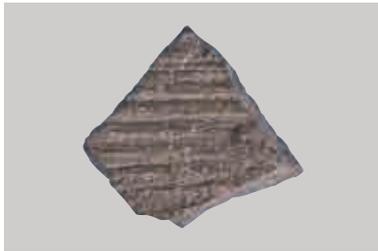
175



178

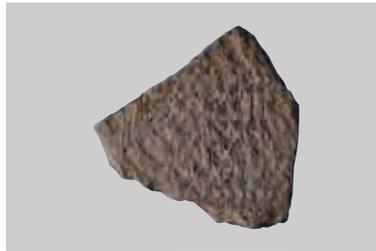


182



外面

179

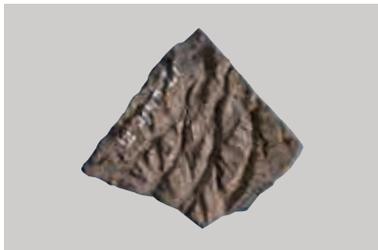


外面

180



181



内面

179



内面

180



底面

181

遺物写真 7

弥生土器・須恵器・土師質土器

津波避難タワー



(2018. 12. 12)

— 調査日誌抄 —



図版 22

5月29日(月)0日目 調査I区 コンクリート畦畔除去 / 仮設駐車場敷設 / 他



コンクリート畦畔除去 (I区)



仮設駐車場敷設作業

5月30日(火)1日目 調査I区 表土剥除(重機)・遺構検出作業 / コンテナハウス搬入 / 他



コンテナハウス搬入



遺構検出作業 (I区)

5月31日(水)2日目 調査I区 表土剥除(重機)・遺構検出作業 / 他



重機故障



遺構検出作業 (I区)

6月1日(木)3日目 調査I区 遺構検出作業 / 重機搬出 / 他



遺構検出作業 (I区)



重機搬出

6月2日(金)4日目 調査I区 遺構検出作業/他



遺構検出作業 (I区)

6月5日(月)5日目 調査I区 遺構検出作業/他



遺構検出作業 (I区)

6月6日(火)6日目 調査I区 遺構検出写真・遺構掘削作業/他



SB 1 遺構検出状態



遺構掘削作業 (I区)

6月7日(水)雨天中止



SB 2 P12 土層断面状況

6月8日(木)7日目 調査I区 遺構掘削作業・遺構平面図作成/他



遺構掘削作業 (I区)



SB 3 P2 遺物出土状態: 86(未接合資料)

図版 24

6月9日(金) 8日目 調査I区 遺構掘削作業 / 他



遺構掘削作業 (I区)

6月12日(月) 9日目 調査I区 遺構掘削作業 / 他



遺構掘削作業 (I区)

6月13日(火) 10日目 調査I区 遺構掘削作業 / 他



遺構掘削作業 (I区)

6月14日(水) 11日目 調査I区 遺構平面図作成 / 他



調査区精査 (I区)

6月15日(木) 12日目 野市中学校 職場体験学習 / 他



職場体験学習

6月19日(月) 13日目 遺構掘削作業 / 他



遺構掘削作業

6月20日(火) 14日目 遺構掘削作業 / 他



遺構掘削作業

6月22日(木) 15日目 遺構掘削作業 / 他(午前)



遺構掘削作業

6月23日(金) 16日目 遺構掘削作業 / 他



遺構掘削作業

6月26日(月) 17日目 遺構掘削作業 / 他



遺構掘削作業

7月3日(月) 18日目 遺構掘削作業 / 他



排水作業 (I区)

7月5日(水) 19日目 遺構精査 / 他(午前)



排水作業

7月6日(木) 20日目 遺構掘削作業 / 他



遺構掘削作業

7月10日(月) 21日目 遺構掘削作業 / 他



遺構掘削作業

7月11日(火) 22日目 遺構掘削作業 / 他



遺構掘削作業

7月12日(水) 23日目 遺構掘削作業 / 他



休憩中

図版 26

7月13日(木) 24日目 遺構掘削作業 / 他



遺構掘削作業

7月19日(水) 25日目 遺構掘削作業 / 他



遺構掘削作業

7月20日(木) 26日目 遺構掘削作業 / 他



遺構掘削作業

7月21日(金) 27日目 遺構掘削作業 / 他



遺構掘削作業

7月24日(月) 28日目 遺構平面図作成 / 他



除草作業

7月26日(水) 29日目 遺構掘削作業 / 他



遺構掘削作業

7月27日(木) 30日目 遺構掘削作業 / 高知新聞社取材 / 他



遺構掘削作業



高知新聞社取材

7月29日(土) 現地説明会(地元住民対象)



現地説明会



現地説明会

7月31日(月) 31日目 遺構掘削作業/他(午前)



遺構掘削作業



現地説明会

8月1日(火) 32日目 調査I区 礫群測量作業/他



集石遺構1 礫群検出状況(2017.7.31)

8月2日(水) 33日目 調査I区 遺構検出作業/他



遺構検出作業(I区)

8月3日(木) 34日目 調査I区 完掘写真(空撮)/他



調査区 完掘写真(空撮)



SB2 完掘状態(I区)

図版 28

8月9日(水) 35日目 重機搬入 / 遺構検出作業 / 他



重機搬入



SB 1 P1・2 遺構検出状態



検出範囲設定



遺構検出状態

8月10日(木) 36日目 運搬車搬入 / 調査Ⅱ区 表土剥除(重機) / 他



表土剥除(Ⅱ区)



遺構完掘状態

8月14日(月) 37日目 調査Ⅱ区 遺構検出作業 / 他



排水作業(Ⅱ区)



▲ SK 8 土層断面状況(調査区東壁)

8月16日(水) 38日目 調査Ⅱ区 遺構検出作業 / 調査Ⅲ区 表土剥除(重機) / 他



遺構検出作業(Ⅱ区)



重機給油

8月17日(木) 39日目 調査Ⅰ・Ⅱ区 遺構検出作業 / 他



遺構検出作業(Ⅱ区)

8月18日(金) 40日目 調査Ⅰ区 遺構検出作業 / 他



遺構検出作業(Ⅰ区)

8月21日(月) 41日目 調査Ⅰ区 遺構検出写真・遺構掘削作業 / 重機搬出 / 他



SB 1 遺構掘削作業



SB 1 P 12 土層断面状況

8月22日(火) 42日目 調査Ⅰ区 遺構掘削作業・遺構平面図作成 / 調査Ⅱ区 集石遺構検出作業 / 他



集石遺構検出作業(Ⅱ区)



作業員さん

図版 30

8月23日(水) 43日目 調査Ⅰ区 遺構掘削作業・遺構平面図作成 / 調査Ⅱ区 集石遺構検出作業 / 他



除草作業(防虫)



遺構掘削作業(Ⅰ区)

8月24日(木) 44日目 調査Ⅰ区 遺構掘削作業・遺構平面図作成 / 調査Ⅱ区 遺構検出作業 / 他



排水作業(Ⅱ区)



遺構検出作業(Ⅱ区)

8月25日(金) 45日目 調査Ⅰ区 遺構平面図作成 / 調査Ⅱ区 遺構検出作業 / 他



遺構検出作業(Ⅱ区)



遺構検出作業(Ⅱ区)

8月28日(月) 46日目 調査Ⅰ区 遺構完掘写真 / 調査Ⅱ区 遺構検出作業・遺構配置図作成 / 他



SB1 完掘状態



遺構検出作業(Ⅱ区)

8月29日(火) 47日目 調査Ⅱ区 遺構検出写真・遺構掘削作業 / 他



遺構検出状態(Ⅱ区)



集石遺構2 礫群検出状況



集石遺構3 礫群検出状況



集石遺構2 礫群検出状況



遺構掘削作業(Ⅱ区)



P119 土層断面状況

8月30日(水) 48日目 調査Ⅱ区 遺構掘削作業 / 他



遺構掘削作業(Ⅱ区)

8月31日(木) 49日目 調査Ⅱ区 遺構掘削作業 / 他



遺構掘削作業(Ⅱ区)

図版 32

9月4日(月) 50日目 調査Ⅱ区 遺構掘削作業 / 他



ST 2 十字形畦 (バンク) 設定状態



休憩中

9月6日(水) 51日目 調査Ⅱ区 遺構掘削作業 / 他



遺構掘削作業 (Ⅱ区)



ST 2 炭化物検出状態

9月7日(木) 52日目 調査Ⅱ区 遺構掘削作業 / 他 (午前)



遺構掘削作業 (Ⅱ区)



SX 1 礫群検出状況: 上位部



ST 2 土層断面状況



集石遺構3 礫群検出状況

9月8日(金) 53日目 調査Ⅱ区 遺構掘削作業 / 他



排水作業(Ⅱ区)



遺構掘削作業(Ⅱ区)

9月13日(水) 54日目 調査Ⅱ区 遺構掘削作業 / 他



排水作業(Ⅱ区)



遺構掘削作業(Ⅱ区)

9月14日(木) 55日目 調査Ⅱ区 遺構掘削作業 / 他



遺構掘削作業(Ⅱ区)



終業状況(Ⅱ区)

9月19日(火) 56日目 調査Ⅱ区 集石検出作業 / 調査Ⅲ区 遺構検出作業 / 他



台風一過(Ⅱ区)



遺構検出作業(Ⅲ区)

図版 34

9月20日(水) 57日目 調査Ⅲ区 遺構検出作業 / 他



礫群検出状態(Ⅱ区)

9月21日(木) 58日目 調査Ⅲ区 遺構検出作業 / 他



遺構検出作業(Ⅲ区)

9月25日(月) 59日目 調査Ⅱ区 遺構掘削作業・礫群検出状況図作成 / 調査Ⅲ区 遺構検出作業 / 他



排水作業(Ⅱ区)



遺構検出作業(Ⅲ区)

9月26日(火) 60日目 調査Ⅲ区 遺構検出作業 / 他



遺構検出作業(Ⅲ区)

9月27日(水) 61日目 調査Ⅲ区 遺構検出写真 / 他



遺構検出状況(Ⅲ区)

10月3日(火) 62日目 調査Ⅱ・Ⅲ区 遺構掘削作業・遺構平面図作成 / 他



排水作業(Ⅱ区)



遺構掘削作業(Ⅲ区)

10月4日(水) 63日目 調査Ⅱ区 遺構精査・土層断面図作成 / 調査Ⅲ区 遺構掘削作業 / 他



遺構精査(Ⅱ区)



ST 2 十字形畦(バンク) 設定状態

10月5日(木) 64日目 調査Ⅱ区 礫群測量作業 / 調査Ⅲ区 遺構掘削作業・遺構平面図作成 / 他



SB 2 P7 土層断面状況



SB 2 P8 土層断面状況

10月10日(火) 65日目 調査Ⅱ区 遺構掘削作業 / 調査Ⅲ区 遺構掘削作業・遺構平面図作成 / 他



排水作業(Ⅱ区)



SK11 礫群検出状況

10月11日(水) 66日目 調査Ⅱ区 遺構掘削作業・土層断面図作成 / 調査Ⅲ区 遺構掘削作業 / 他



SX 2/ST 2 土層断面状況



遺構掘削作業(Ⅱ区)

図版 36

10月12日(木) 67日目 調査Ⅱ区 遺構掘削作業・遺構平面図作成 / 調査Ⅲ区 遺構完掘写真 / 他



SB 2 完掘状態(Ⅲ区)



遺構掘削作業(Ⅱ区)

10月13日(金) 68日目 調査区Ⅱ区 遺構掘削作業・遺構平面図作成 / 他



遺構掘削作業(Ⅱ区)



SK11 礫群堆積状況

10月18日(水) 69日目 調査Ⅱ区 遺構掘削作業 / 他



ST 2 焼土・炭化物検出状態

10月19日(木) 雨天中止



滞水状況(Ⅱ区)

10月20日(金) 70日目 調査Ⅱ区 遺構掘削作業 / 他



SX 1 礫群測量作業：下位部

10月23日(月) 71日目 調査Ⅱ区 礫群測量作業 / 他



SK 7 礫群測量作業：上位部

10月24日(火) 72日目 調査Ⅱ区 遺構掘削作業 / 他



SK 7 礫群測量作業 : 上位部

10月25日(水) 73日目 調査Ⅱ区 遺構掘削作業 / 他



SB 2 P 10 礫群検出状況 : 下位部

10月26日(木) 74日目 調査Ⅱ区 礫群測量作業 / 他



SK 7 礫群測量作業 : 中位部



調査区 清掃作業

10月27日(金) 75日目 調査Ⅱ・Ⅲ区 完掘写真(空撮) / 撤収作業 / 他



発掘道具撤収作業



調査区 完掘写真(空撮)



調査区 完掘状態(Ⅱ区)



東狭間遺跡の落日



おつかれさまでした

遺物整理作業



注記・接合



補填



遺物実測



デジタルトレース

報告書抄録

ふりがな	ひがしはざまいせき							
書名	東狭間遺跡							
副書名	緊急避難塔整備に伴う発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	高知県香南市発掘調査報告書							
シリーズ番号	第14集							
編著者名	宮地啓介							
編集機関	香南市文化財センター（香南市教育委員会）							
所在地	〒781-5453 高知県香南市香我美町山北 1553-1 TEL 0887-54-2296							
発行年月日	2019年2月22日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° / ′	° / ′			
ひがしはざまいせき 東狭間遺跡	こうちけんこうなんし 高知県香南市 よしかわちょうよしわら 吉川町吉原	39211	230009	33° 32′ 37″	133° 41′ 26″	平成29年 5月29日 ～ 10月27日	約760㎡	緊急避難塔 整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
東狭間遺跡	集落跡	弥生後期 古代 / 中世	竪穴住居状遺構 掘立柱建物跡 土坑状遺構 溝状遺構 性格不明遺構 集石遺構 ピット状遺構	弥生土器 須恵器 緑釉陶器 土師質土器 瓦質土器 青磁 石器 / 土製品				

高知県香南市発掘調査報告書第14集

東狭間遺跡

緊急避難塔整備に伴う発掘調査報告書

2019年2月

発行 高知県香南市教育委員会

香南市文化財センター

〒781-5453 高知県香南市香我美町山北1553-1

TEL 0887-54-2296

印刷 高知県香南市野市町西野 45

半田印刷